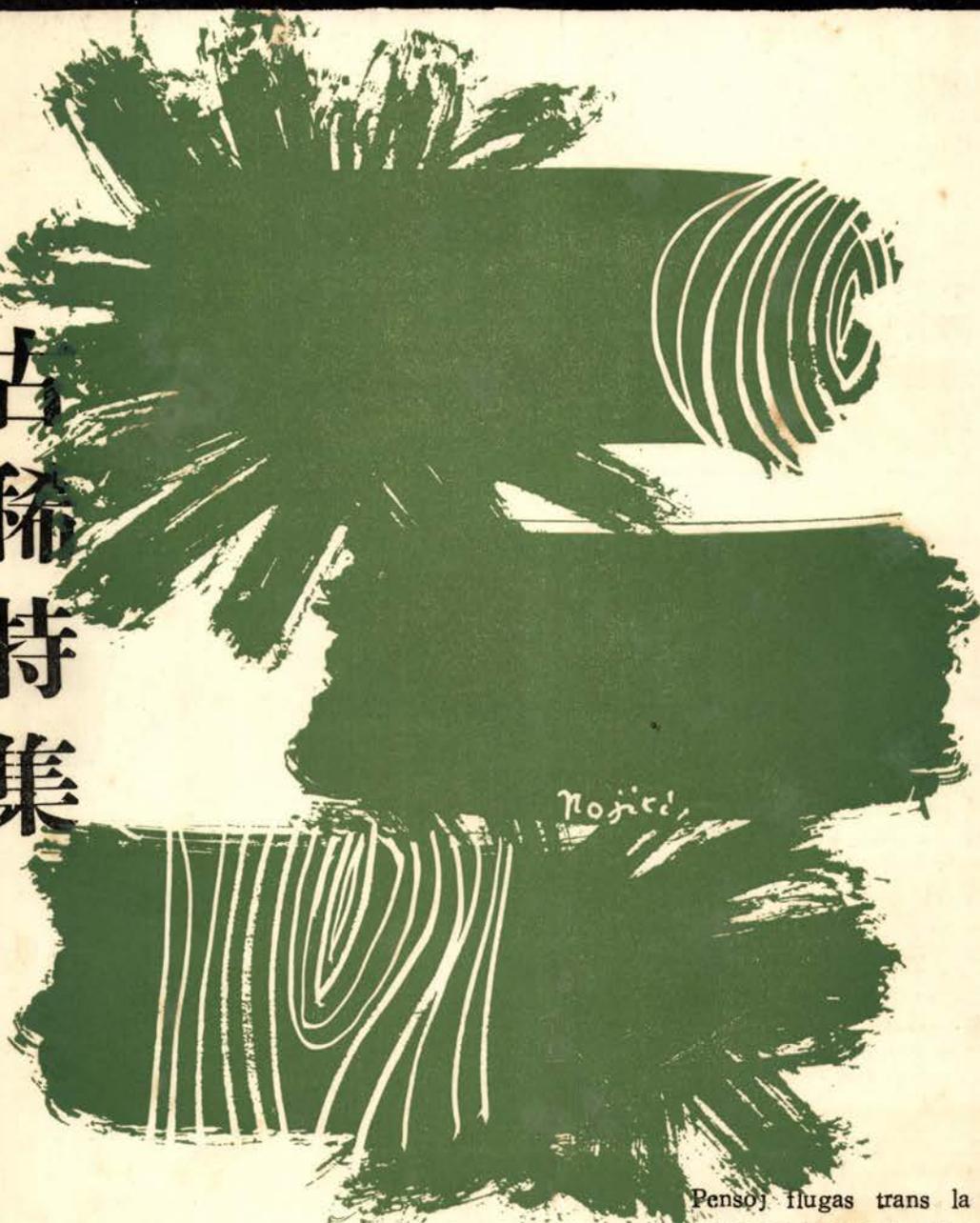


# 川柳雅証

麻生諾郎☆主筆

古稀特集



No. 362

Pensoj flugas trans la land-limon  
THE SENRYU ZASSHI

No. 362

昭和二十二年七月二十一日第三種郵便物認可  
創刊大正十三年・通卷三百六十二号

# 麻生路郎先生 古稀祝賀川柳大会

柳界の視聴を一つに集め、ここに展く世紀の  
祭典！ゼヒ柳友お誘いの上、川柳川柳まつ  
りを盛大に開催致したいと思います。

★日時 七月七日(日)午後一時  
★会場 藤田美術館

(大阪市都島区網島四〇元藤田男爵邸)  
網島御殿 電話(四一〇)五番  
道順 ★市電片町停留所北へ半丁  
大阪駅ヨリノ方へ城東線  
京橋乗換片町下車モ可

## 柳話

「夫 婦」(三句) 麻生路郎先生選  
特別課題 (特別課題の出句は句会出席者に限る)

## 兼題

「友 達」 三句 岸本水府先生選  
「若返り」 三句 梶元紋太先生選  
「福」 三句 麻生葎乃先生選  
「旅」 三句 清水白柳子選  
「私」 三句 北川春葉選  
「飲み手」 三句 土井文蝶選  
「名人」 三句 須崎豆秋選

★各題別紙・兼題締切昭和三十三年七月五日着便  
投句のみの方は金五〇円切手封入の事

宛先 大阪市南区西腰町三〇番地 西尾 榮宛

★兼題天地人★葎乃選天位に不朽洞賞★特別課  
題優勝者に路郎賞を贈呈★優勝者所属の会に優  
勝楯を贈る(優勝楯は明年七月返還・川柳支那  
・準支部に属しない作家が優勝された場合は川  
柳本社の獲得となる)

余興 講談 旭堂小南陵・舞踊 若柳貴洲・  
舞踊 丸尾潮花・  
舞踊 山川芝阿茶  
費 百二十円(路郎先生揮毫団扇進呈)  
★懇親宴 同会場で(会費六百五十円)  
路郎先生揮毫の扇子進呈

主催 川柳不朽洞会  
後援 川柳雜誌社

電話(六〇八一)

# ヤマハHiFi ジュニアセット

新装開店  
梅田店(阪神百貨店一階)

## すばらしい特色

優美でシンプルなデザイン  
8球高性能HiFiスーパーラジオ付  
プレーヤー・アンプ・スピーカーのセパレート方式  
今までに例をみない奉仕的なお値段

## すぐれた設計

ヤマハ特製3スピードモーター装備  
オートストッパー付  
アンプはプラグ・イン・システム  
2つのスピーカーによるHiFiシステム

ヤマハHiFiプレーヤー ¥21,800  
ヤマハHiFiアンプ ¥13,200 1セット  
ヤマハHiFiスピーカー ¥10,000 ¥45,000

(カタログ呈)



# 日本楽器

大阪支店 TEL (五) 5950~59 ・ 梅田店 TEL (五) 4277~79





影近郎路

古稀はよし

弟子に

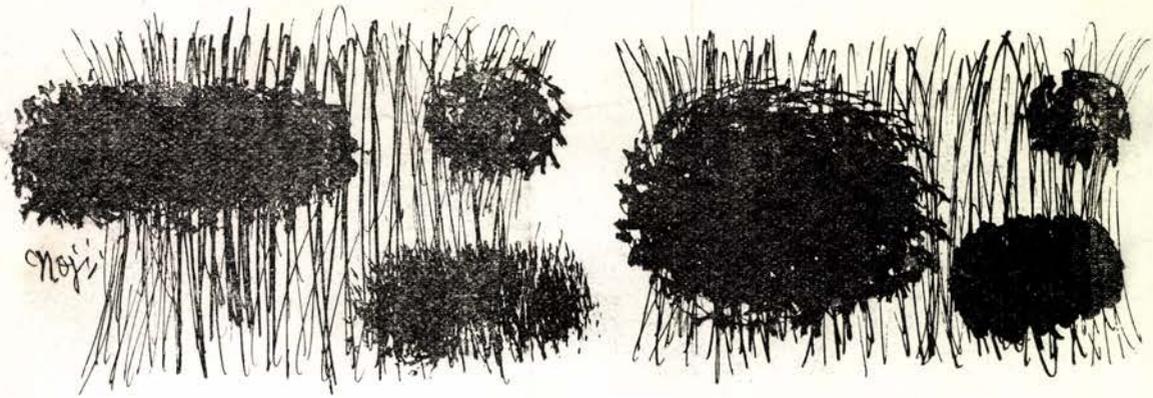
孫弟子

ひまご弟子

路郎

一九五七・七月

古稀特集



題字：麻生路郎・表紙：野尻弘  
 川柳雑誌……………古稀特集号

不朽洞句帖……………1957・7月……………	麻生路郎……………3
川柳五十四年……………朝日会館の思い出……………	麻生路郎……………6
古稀の賀……………	村田周魚……………43
ななそじ……………七十の句……………	富士野鞍馬……………41

麻生路郎を語る

嵐を怖れぬ路郎……………難航の同伴者……………	麻生路郎……………8
一日逢わねば……………明治時代からの柳友として……………	岸本水府……………10
情熱は続く……………父の一面を語る……………	西村梨里……………11
愛の鞭は厳し……………恩師を語る……………	中島生々庵……………12

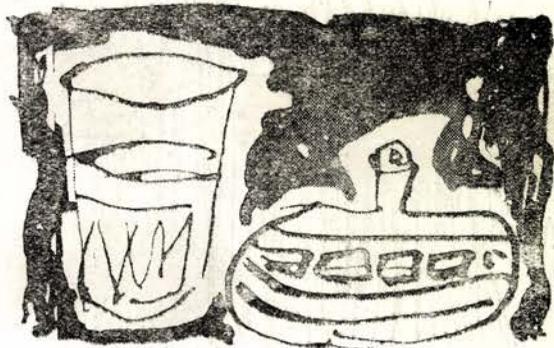
我がお路いちやん……………西のうまい人……………	西島○丸……………39
興起めでたし……………	前田伍健……………37
酒ころり……………最初が友・最後が友……………	川上三太郎……………22
わるさ帖から……………鬼才路郎の句風……………	堀口塊人……………38
偉大なる浪漫……………むかしばなし……………	岡橋宣介……………46

彫刻秘話……………	清水白柳子……………42
句碑ものがたり……………	菊沢小松園……………42
たそがれの除幕式……………	浜田久米雄……………43

岡山県の句碑

大正時代の記憶から……………	稻元紋太……………36
----------------	-------------





# 川柳五十四年

三四五十銭の黒字  
朝日会館の思い出

麻生路郎

妻君を連れてやゝて来たほどである。あの時の入場者は千名を越したし、この種の催しとしては大盛会で税金をとられたが、それでも三四五十銭の黒字だった。若い元氣だからだを張ってやった結果に外ならなかつたのである。

引續いて、東京句会をやつたが、これを発表した時には東京の各柳社が道場荒らしでも来るように感じたらしい。平素句会を持たないような会までが、その月の土曜日曜祭日を埋めつくして開会の予告をした。

その当時、川柳雑誌社の社友だった川上三太郎君から時利あらずだからやめたらどうかと云うて来た。大阪でも、やめた方がエエだろうと云う意見のものもいたが、私は断固としてやることにした。

そして亡くなつた山雨楼君を会場を借りるために東上させた。会場を借りるためには社友の三太郎君や前田雀郎君に相談をし、来て、両君がこゝろをわたり朝日新聞社へ行くように名刺を持たせてやつた。ところが、会場まで借りに東上する熱にうごかさされた雀郎君が、沢田正二郎が新国劇の旗上げをした浅草の劇場を借りてくれた。詳しいことは省略するが、この川柳雑誌社の東京句会も各社各派が全部出席してくれたので、東京柳界空前の大盛会だった。ここから私は昭和十三年以来十年間叫びつづけた川柳の社会化運動に一先ずピリオドを打つことの声明をしたのであった。しかし、それがために、川柳の社会化に

七十になった。(西曆一八八八  
年七月十日生)

川柳にも橋山があつてもいいような氣がする。しかし誰も背負いに来てくれない。

古稀や、古稀やと云う声は私にとって橋山節の響をもつて迫つて来る。それがみ

んなのためならなんでもないと云うおれんな婆さんの心に通じるものがあるのである。

腹乃が反対した。

「オレは子規よりエライとこも持つてるんだぜ」

と云つたが、

「それでもアカン」と反対した。

「そんなら、子規を通して川柳を語るではドウヤ」

「まア、それぐらいならエエやろ」と、賛成してくれた。

川柳に手を染めたのは明治三十七年であるから、こゝろで若い頃に、と云う言葉を使

つても不自然ではないだろう。その昔、松山へ甲かけた時の話だが、道後の公衆堂で、

講演をするのに、「ワレ柳壇の子規たらん」と云う演題にしたらドヤと云つたら、「そんな偉らそうなことを云うたらアカン」と

と云うのである。新聞が書きたててくれたので、路郎と云うヤツ、何をしゃべるか聴

る俳句王国の松山で、こんな演題でやろうと云うのである。新聞が書きたててくれたので、路郎と云うヤツ、何をしゃべるか聴

されたかも知れない。会場は超満員で、世話役の伍健君が大満悦だった。こんな元氣がその後も全国から朝鮮、満洲、北支、蒙疆まで押しかけさせたのである。雪の満洲を防寒具もつけず、内地の姿のままにハルビンまで出かけたことを思うと全く熱の塊だつたのに違いない。

話は前後してゐるかも知れないが、「川柳雑誌」の百号記念には朝日会館で開催した。短詩文学の会を、この会館でやつたのだと云うことは空前の出来事だと云われただけにいまだに誰もやらないから絶後とな

るかも知れない。俳人の月斗が驚いて路郎と云うヤツ無茶なことをやりよる、どんなことをやるのか見て来ようと云つてキップを求めて若い

ついで手をゆるめたわけではなかった。川柳の指導、川柳の研究、川柳の発展向上等々々について「川柳雑誌」や新聞雑誌を通じて微力のかぎりを尽くした。

私は今まで外部から見れば無暴に等しいことを随分とやって来た。しかし私自身は決して無暴ではなかった。私の実行して来たことはすべて、十年間位、練りに練って断行したものであって、成算のない企画は一つもしていなかったのである。

真似をすることはやさしい。しかし創作にしろ、事業にしろ、未踏の地を開拓するとなるとなまやさしいことで出来よう筈のないことをイヤと云うほど知っていた自分、自分一人で練りに練ることを辞さなかつたのである。

私が専門家なき世界発達せずと号して、職業川柳人宣言を発表したのもその一つである。そんなことが出来るものかと真先に反対ののろしをあげたのは柳人であった。川柳外の友人知己も驚いてそんな無暴なことをして、食えるかと云って、衷心から引き留めてくれた。いい職業を押しつけての忠告さえしてくれた。それ等の厚意に感激したが、私は私の意志を少しも譲さなかつた。ハワイの未知の柳人から、あの宣言は実に悲壯である。甚だ失礼な云い分であるが万一生活にお困りの時にはお知らせ

リヤカーで印刷屋へ運んで、一ヶ月も遅刊なく刊行を続けたが、国内事情がますます緊迫して来たので遂には発行をやめたらどうかと云う勧告さえも受けた。主婦の友のような大雑誌すら、みる影もないうすべらな貧弱な雑誌になってしまった。ガン張り通して来た「川柳雑誌」も昭和十八年十二月号限りで潔く廃刊を決定し、堂々たる「奉還号」を出して影を没した。

斯うした難行苦行を続けていたが、三重県に疎開後もガリ版刷を刊行し、職域句集を指導するなどして川柳的活動は寸時も廃さなかつた。

昭和二十年八月十五日に終戦、その後進駐軍によって刊行物の取締が行われることとなり、朝日ビルの三階に検閲室が設置された。こゝに派遣された検閲官がハワイの門下、前山北海、古川慶花麗の両君だったことは予想外の倅せだった。

両君の斡旋で逸早く「川柳雑誌」が刊行されることとなった。仙花紙で僅にB5判四ページのみすげらしい姿ではあったが、それもホッとしたのであった。その後の川柳活動については多くを語る必要はあるまい。

迅速で・経済的  
東京・静岡・名古屋  
へ御進物品

マツザカヤの

直配承り

お中元に……  
暑中お見舞に

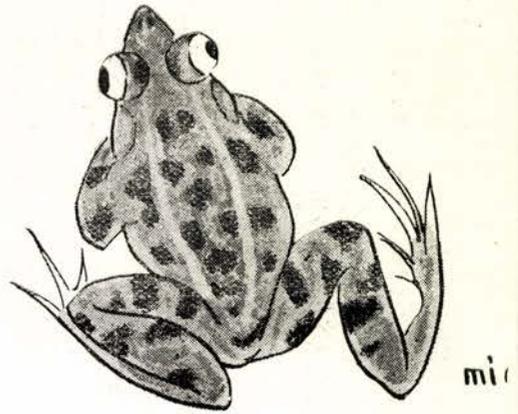
一三八種のお進品を取揃  
えております

3階 御進物相談所



大阪 日本橋  
松坂屋  
電 (64) 1531

(名古屋以東のお中元  
は7月15日まで)



# 嵐を怖れぬ路郎

— 難航の同伴者として —

麻 生 葭 乃

川柳麻生路郎、人間麻生路郎の、ある日、ある時の生活の  
符を、夫人が、友人が、または愛嬢が、門下生が、こゝに世  
におくる愛情と尊敬のクワルテツト!! — 編集局 —

路郎は学生時代の明治三十七年の春頃か

ら川柳を作つて居たそうであるが、私が路郎を初めて知つたのは、父芦村に連れられて出席した川柳会の席上であつた。其頃の大阪の川柳会は六厘坊後で毎月西田当百氏宅の二階で開かれ、出席者は僅に十人内外という小集句会であつた。十八才と云うのにまだ肩場をしていた学生の私には、其頃の路郎はお兄さんというよりは、むしろ若いおじさまに見えた。私が結婚をしたのは大正二年四月九日であつたから、それ以前のことには私には未知の世界である。だから路郎が川柳に手を染めたのは何年何月であるか、或は柄井川柳の句を握つて、母の胎内から生れ出たか、どうか、そんな事は証明が出来ないのである。唯私にわかつて居ることは、暫く東京のある商店に勤務していた事と、川柳が好きであつた

事だけである。

路郎は結婚の翌年の大正三年には第一次世界大戦が勃発したので、大阪中央電信局で、外国電報の検閲係をしていた。青島陥落で検閲の仕事が終つてからは、本の虫である路郎は上福島で素人くさい古本屋の店を開いた。古本屋仲間でも大分古顔になつて来てから、常安橋筋の繁華な通りへ出た。此時すでに、私達二人の間には三人の年児が出来て居た。発育の遅い長女を頭に三人の年児といへば、三つ児を育て、居るようなもので、子守は二人も雇うていても、私には寝る時間も、食事の時間も無視され勝ちであつた。其上あるじが買出しに出た留守中や、趣味のおつきあいで、旅へ出た留守中などは古本屋の店番もせねばならなかつた。古本屋の店番は、他の商売と

違つて、お愛想も、おべんちゃらも要らないが、うっかりして居ると、知らぬ間に棚の本が消えてなくなつて居るので、暇な時でも緊張していねばならぬ商売である。売り方は符牒を見て値段を申上げればよいのであるが、留守の時に限つて

「おばさん、これ買うてんか」

と云つて来る。路郎から買ひ方の予備知識は吹き込まれているが、医学書だの、法律書だの、わけの分らぬエンジンの洋書などを持って来られると一寸どきとする。発書の年月日なども調べて見て値をつけるのだが、こちらが損をするような値段でなければ置いて行かない。大抵の場合は「此おばさん、ハッキリわかつてるのかいな」と云う風な顔付きで持つて去んで終うのである。私は路郎の留守中に高価で買ひ取つてそれが盗品であつたりして、後で吐き出し

て終うのなら、何も買わずに無難な留守番をするに限ると思つていたので、よい鴨を迷がしたとも思つていないのである。其中に不景気で道頓堀の河岸に貸家が出来たので、私達はそれへ移り住んで商売を続けることになつたのだが、当時父の姉にあたる私のおおばさんを、家庭事情であずかつていたので、川沿の家は老人にとって不便であるうと思ひ、宿替を中止したので私達の商売の発展はそこで阻止された形となつた。

私が三女を出産した時、母体が持ち兼ねるとの注意を受けたので、折角有封に入つた商売を豊んで、萩の茶屋三日路へ移り住んだ。路郎の新聞記者生活、作家生活はこゝで始まつた。路郎の交際範囲の人々は風と

夜を間違えたような人ばかりであつた。三日路の私達の家は三日路亭と呼ばれた程、午前十時過ぎから、かしのすき焼や季節物の小鉢で一盃を傾ける面々が毎日のように揃うた。夜は夜で、其頃は道頓堀のカフェーでも、料亭でも徹夜営業だつたから、五座の前は風をあざむくネオンとジャズの交錯した街であつたので、路郎の帰宅は首尾よく戻つても、午前四時であつた。だから午前五時から悪友のおとずれる午前十時頃までが路郎の睡眠の時間であり、又執筆の時間であつた。其当時の若い作家の作品はみんな神経衰弱の傾向があつたのも尤もと頷けるのである。奈那は三日路亭で生れたが母体もたぬと云うので、紀州紀の川のはとりへあずけられた。長男ロンドンの生れたのも此三日路亭であつた。

三日路亭時代の後半期に路郎は外国為替

の研究に没頭した。研究費を出して呉れるパトロンがあつたからである。不幸にして其パトロンは急逝した。路郎の仕事はパトロンと共に殉死した。路郎の研究は当時財界でも大いに参考になる点があつたので、若し此パトロンが長命であつたら、恐らく川柳界から路郎の名は消えていたかも知れない。路郎が外国為替の研究を止めてから、桃谷順天館の広告文案の仕事をした。其頃私達は阪神沿線の鳴尾に住んでいた。空を覆うような大きな柳の木がおもて前栽にある家で、裏庭は当季々々の野菜や、觀賞用の草花を栽培するには充分な面積があつた。

私が草花栽培に熱中していた鳴尾の家でアトが生れた。梨里が生れた。そして長男ロンドンが生れた。私達には何も彼もが悲しい思い出の種子である鳴尾の家を引揚げて岸の里へ移つたのは昭和二年だつた。そしてロンドンを亡くして神経衰弱になつた路郎は店を辞めた。少しからだがよくなつてから著述をやつていた。

路郎は其の後、左のまれて堺市民病院の事務長の職に就いた。当時の院長から「君は川柳の第一戦を退くか、それとも事務長をやめるかどちらかハッキリしたらどうか」と談話談判を喰つた事があつた。これは路郎が事務長としての手腕を買つての院長の要望だつた。元より事務長の職は其頃の院長がむづかしい人であつたので、路郎君ならうまくやつてくれるだろうと、去る人の紹介でなつたのだから、強いて嘯り付いていなくてもよかつたし、何時止めても家庭では文句を云う人が一人もいなかつたから、「それだ」たら今日かぎり事務長を止めます」とあつさり答えたので、当分の外れた院長は、「まあ、そんなに云わんでも」と然りを戻しかかつた事のあつたのを憶えている。院長は或日、お供を連れて私の家へ訪ねて来られた。そして私に「こんな家に住まなくても、もっと良い家へ、住めばよい」と暗に、事務長の職に本腰を入れるなら優遇するぞと云わんばかりの色彩をはのめかして帰られた。私は万事路郎の意志の働く範囲で暮しているのだから、院長の親切は唯聞き置く程度で済していい。病院へ帰られた院長は、「あの妻君は

馬鹿か」とあたりの人に云うていられたそのうだが、人間は馬鹿と云われる位気持の楽な事はない。利口に見えるために苦勞したり、煩悶したりしている人が世間にとれだけ沢山いることか、路郎は生きんがための職業と、川柳とを天秤にかけて、常に均衡を保っているが、どちらかを選べと云えば一も二もなく川柳と答えるであろう。前述の話は其サンブルともなるエピソードである。

其後路郎は川柳の社会進出と、質的向上を思うのあまり、遂に本職を捨て、金にもならない川柳一本で立つことに決心した。一番読者の多い大衆雑誌でさえ、如何にすれば読者にアトラクティブであるかを競うが如く、多種多様の雑誌は書店の店先で、濃厚な色彩によつて、或は新鮮味なタッチによつて購読者の眼を捕えようとしている。此競争の烈しい中で、薄べらな短詩型専門誌の発行と、川柳に関連ある仕事などで安心の出来る所得のあろう筈はなかつた。加うるに路郎には其当時五人の子供があつた。きまつた職に就いていて、孜々として働いても、子沢山の渡世は決して楽ではなかつたのだから、路郎の此企ては、恰もロンプスのアメリカ発見に類するものであつた。此のアメリカ発見の舟は、みすほらしい荒蕪を敷いた和船なので、絶えず天候に気を配らねばならなかつた。乗組員は私達夫婦と、子供達である。勿論子供達は目当があつて上船したのではない。父が乗つたから続いて乗つたのである。いつまでも

浜で遊んでいた子供もあつたらうし、山手の在宅で残っていた子供もあつたであろう。然し太陽を中心に廻っている星は軌道はずす訳にはゆかなかつた。行けども行けども、島は見えず、水や空、空や水なる真只中を、船は木の葉のように揺られて行つた。子供達の一人は舵をとつた。他の一人は櫂をこいだ。時化を喰つたら、皆んなで、かぶつた水を船から外へ掬み出した。路郎は軸に立つて動かなかつた。バロメーターであり、パイロットでもあつたからである。私はおとなしく両手を膝へのせて、舷にもたれていた。路郎が川柳職業人を宣言した時は折悪しく、私は心臓を機能的に弱めて半病人の状態であつた。よしんば、達者なからだであつても、私はアクテイツな人間ではないのだから、永い航海には何の役にたつたなかつたであろう。私がアクテイツでない事は、持つて生れた性格でもあろうが、幼少の時から培われた第二の天性とも云えば云えないこともなかつた。私は六才で母に死別した。それ以来私の父は私の父であり、又母でもあつた。登校の朝々に、さげ髪を梳いて呉れたのも父であつた。日曜ごとに芝居見物や遊山に行つて呉れたのも父であつた。高等女学校を終え、ミッシオン・スクールの英語専修科へ入学の日に行つて呉れたのも父であつた。私がせねばならない用件は皆んな父が代りに果して呉れたので、私は年百年中サーピスをされて生きて来たのであつた。路郎との縁組が定まつて、ハウスワイフの立場に置かれた私は急にサーピスをする側になつたのであるが、俄か仕立て

の仕事に追駈けられている時などは世間並みの会話のやりとりはまどろしいようでもあつた。元氣な路郎は午後九時頃からでも、道頓堀や新世界あたりまで出掛けて行つた。子供の鎖に繋がれて居た私はそう手輕には出て行けなかつたが、夏の夕暮などは、子供供で涼みがてら駅の柵の外へ立った。往き来する電車の灯りには都会の匂いがした。観樂地帯へ人々を運ぶ灯りは次々と立樹の影へ消えて行つた。其灯りが消えた時の淋しさは暗の空へ花火が消えたように淋しかつた。

止めます」とあつさり答えたので、当分の外れた院長は、「まあ、そんなに云わんでも」と然りを戻しかかつた事のあつたのを憶えている。院長は或日、お供を連れて私の家へ訪ねて来られた。そして私に「こんな家に住まなくても、もっと良い家へ、住めばよい」と暗に、事務長の職に本腰を入れるなら優遇するぞと云わんばかりの色彩をはのめかして帰られた。私は万事路郎の意志の働く範囲で暮しているのだから、院長の親切は唯聞き置く程度で済していい。病院へ帰られた院長は、「あの妻君は

馬鹿か」とあたりの人に云うていられたそのうだが、人間は馬鹿と云われる位気持の楽な事はない。利口に見えるために苦勞したり、煩悶したりしている人が世間にとれだけ沢山いることか、路郎は生きんがための職業と、川柳とを天秤にかけて、常に均衡を保っているが、どちらかを選べと云えば一も二もなく川柳と答えるであろう。前述の話は其サンブルともなるエピソードである。

其後路郎は川柳の社会進出と、質的向上を思うのあまり、遂に本職を捨て、金にもならない川柳一本で立つことに決心した。一番読者の多い大衆雑誌でさえ、如何にすれば読者にアトラクティブであるかを競うが如く、多種多様の雑誌は書店の店先で、濃厚な色彩によつて、或は新鮮味なタッチによつて購読者の眼を捕えようとしている。此競争の烈しい中で、薄べらな短詩型専門誌の発行と、川柳に関連ある仕事などで安心の出来る所得のあろう筈はなかつた。加うるに路郎には其当時五人の子供があつた。きまつた職に就いていて、孜々として働いても、子沢山の渡世は決して楽ではなかつたのだから、路郎の此企ては、恰もロンプスのアメリカ発見に類するものであつた。此のアメリカ発見の舟は、みすほらしい荒蕪を敷いた和船なので、絶えず天候に気を配らねばならなかつた。乗組員は私達夫婦と、子供達である。勿論子供達は目当があつて上船したのではない。父が乗つたから続いて乗つたのである。いつまでも

のサービスは頗る血のめぐりの悪いサービ  
スであった。漱石の「明暗」に次のような  
箇所がある。

「吉川は少し意外そうな顔をして、今迄  
使っていた食後の小楊枝を口から吐き出し  
た。それから内隠袋を探してたばこ入れを  
取り出そうとした。津田はすぐ灰皿の上に  
あいた鱗寸を擦った。あまり気を利かそう  
として急いだものだから、一本目は役に立

たないで直ぐ消えた。彼はあわて、二本目  
を擦って、それを大事そうに吉川の鼻の先  
へ持って行った」

私のサービスはこれである。其くせ無暗  
に気を揉んでいるのだが、あまり効果の上  
らない気の揉み方である。路郎は子沢山の  
上に、こんな厄介な同伴者をつれていて  
同伴者は今も尙、舷に凭れている。晴れた  
日も、嵐の日も、驚く事を知らないロボッ

トの様に、同じ姿勢で、同じ顔付きで遠く  
を眺めている。めざす彼岸は近づいて来た  
が、次へバトンを渡すまで路郎の意志力は  
嬰孺として続くであろうと私は思ってい  
る。編集者から何か書けと云われたので、  
たゞ漠然と私の古い記憶を辿って、とび  
／＼に思った事を綴って見た。年代が多少  
あと先になつてゐる点もあるがその点は  
諒とされたい。(本社不朽洞会・洞友)

## 一日逢わねば

— 明治時代からの柳友として

### 岸本水府



某月某日  
多忙な  
水府・路郎の  
両先生がそれ  
ぞれの会の吟行に  
招かれて  
阪急の駅でバツタリ。  
ヤア／＼と  
云うところを  
パチリと誰かが  
撮つたもの  
どちらも京都市

石から、藤乃五郎、  
水府先生、路郎先生

路郎君が七十になる——おどろいた。  
青年だつた明治時代の顔が頭にこびりつ  
いてゐるから、人の見る眼とちがつた「若  
さ」が私には迫ってくる。(路郎君からみ  
た私も、これと同じような感じがあるかも  
知れない)

明治四十二年頃から知り出して、四十  
四年ごろがその交りは絶頂だつた。そのこ  
ろ大阪には関西川柳社の会より外になか  
たが、特にその中の路郎、青明、五葉、半  
文銭の四君と私の五人は、文学青年として  
肝胆相照らす間柄となつてゐた。この交り  
が実をむすんで「短詩社」となつた。雑誌  
「短詩」は二号より出なかつたが、その結  
束は固かつた。結束というとむつかしいが  
川柳の上のつながりは固く、つきあひは、  
いつも笑いがただよい楽しいものだつた。

五葉君の句だつたか、  
われ彼を彼われを訪う日曜日

という句は、正にその辺の消息を物語るも  
のであつた。一日逢わねばあほうみたいだ  
つた。議論もした、百句会もやつた、徹夜  
もした。川柳の事務所をつくらう、そろえ  
のゆかたをこしらえようなど空想が空まで  
のびて行くようだつた。その中で路郎君と  
私は月の内半分は逢つてゐた。一緒に当百  
庵で、晩酌の中へ割り込むようなこともあ  
つた。

一番傘の出る大正二年前後、路郎君は東京  
に居た。大阪を去る時路郎君から私への留  
別の句は

いつまでも若かれ長髪刈らであれ  
この短冊は今も持つてゐる。私から路郎君  
へ送つた送別の句は控えがない。大阪駅へ  
見送りに行つたが逢わずに空しく帰つたと  
日記に残つてゐる。

間もなく路郎君は帰阪した。大正四年だ  
つたか、名古屋から帰阪した川上日車君と  
意気が合つて「雪」を発行、川柳革新に乗  
り出した。私は「一番傘」。しかし路郎君と  
の交りに変りはなかつた。ただ、あのころ  
のようなひとりの者時代とちがつてお互に忙  
しくなつてゐた。

最近、古写真を出してみた。いわゆる  
「あの頃」を見ると、路郎君と私だけにな  
つてしまつた視がある。川柳をつづけてい  
ることが「若さ」を保つていてくれている  
にちがいない。

(番傘川柳社・主幹)



# 情熱は續く

——父の一面を語る

西村 梨里

編集局の二三夫さんから「子として」父を語れとおおせつけを頂いた。

さてとなるとあまり近すぎてよくわからないと云うのが本音ではあるが、長年編集の仕事をしていた私には折角の企画に穴が出来ることを思うと、何を書いてよいかわからないままにもペンを握らずに居れなくなった。

そこで子として父を語るといふ極限された立場に立たずに、とりとめもなくスペースを埋めたいと思う。

一口に云えば父は川柳のために生まれてきたような人で七十才という長い年月の間には、職業上の変化、生活上の変化はあつても只一つ川柳への情熱だけは、十七才の時から今日まで休みなく持ち続けて来たことである。長年川柳の社会的向上のために苦闘を続けて来たことは私よりもよく知って居られる方もあると思うが、作家としての

苦しみについては、存外知っている方が少いのではないかと思う。私は今ここで父のその云う面について考えてみたいと思う。

一般の川柳家が趣味人であると云う点でも作家としての苦しみというものが、川柳家には少いのではないかと考えられるのだが、専門家としての父が、作家としての生命を持ち続けることの苦しみを一番よく知っているのは私達家族の者であろうかと思う。人間生活と云うものが誰にも大差なく年と共に感激性をなくしてゆくものだが、そう云う意味でも高年輩となつて尙詩人としての生命をたもつてゆくことは至難であり、大きななやみでもある。或る時はもうしたいら立ちを如実に感じることもあるが、兎も角川柳家としての第一線を七十才の今日までゆすらずに来た父は決して平凡な人ではない。

三十才を出たばかりの私よりは、はるかに

にもものごとを感じ易く烈しい性格の持主である。父の旧作に、

君見給えほうれん草が  
伸びている

と云うのがあるが、気のつかぬ間にはほうれん草が伸びていたと云うことでさえ、これだけの感激を持つ父でこそ今日の路郎があるのだと思う。何時だつたか、川柳雑誌社の主催で阿波踊りに四国へ行つたことがあるが、帰りに姫田夕鐘さんが船着場へ送りに来て下さつた。陸と船とをつなぐ幾本かのテープ……船が離れるにつれて次々と切れ少なくなつて行くテープの敷、その中に父と夕鐘さんをつないだテープ一本だけが、最後まで切れずに残つた。父はこのテープを一しょうけんめいにたぐり寄せ無事に船の中にかい込んでしまうと、全るで少年のようにさもうれしそうに、にんまりと笑つて最後まで切れなかつたことを非常に喜

んだ。そして今度はそのテープをていねいに元通り巻きはじめた。この子供のような喜び方と根気には、私もいささかあきれたものであるが、以前雑誌の表紙画を描いていた米田さんも感心されたことである。私だつたら「終いまで切れなかつたわ」と云つてその場にテープは捨てられたことである。うと米田さんに話したら、「僕は恋人のテープだつたらさうしたかも知れないがね」と云われたことがあつた。

父は子供好きで、私の子供もよく可愛がるし、私達が赤ん坊のときにもよく入浴させてくれたそうであるが、私達がもの心付いてからはむしろきびし過ぎる父だつた。子供が中学に入るときにも入学の手続なども自分でさせる程で、子供を甘やかすという所は少しもなかつた。

また父が門下を大切にすることは非常なもので、我が子より大事なのではないかしら？ と云うことさえある位だ。然しそれ以上に父を大切に下さる門下を沢山持つている父は本当に幸せ者であり、私も子として只々感謝している。古稀とは——古来稀なる長命——だそうであるが、健康で今日を迎え、多くの良い門下に恵まれた父を心からよるこぶと共に皆様に厚く厚く御礼を申上げて筆を置く。



# 愛の鞭は厳し

— 恩師を語る —

中島 生々庵

先生は大変かたくなに見える

生地のみ、「麻生路郎」なるが故である  
と私は私なりに解釈して居る。

私達にとって身動きならぬ程白と黒との  
区別が厳しくて頑固でワンマンの存在であ  
るやの事がある。然し決してその頑固とか  
ワンマンとかが今日の言葉で云うところの  
ドライなそれでは絶対ではない。目に涙もろ  
い涙を一ぱいたためての頑固さであり温かい  
腕で抱きしめてのワンマンであるのであ  
る。正しきに徹する非妥協性とその信念の  
強さが熱涙の裏付けによって生地のみ々の  
恩情に迄変化し先生の御人徳の体臭となっ  
て私達門下生に迫って来るのである。

先生の夢は大きい

我れ世界の川柳家たらんと若い時から云  
つて居られたと承つて居る。古稀を迎えら  
れた今日否、喜寿だるうが米寿だるうが、  
「燃えに燃えあがる情熱」に乗せて先生の  
夢は益々大きく生々若鮎の如く烈々太陽の  
如く将に儒夫をして立ちしむるのである。

先日エレンブルグが見えた時「旅人」「福  
寿草」「私達」の三句集を「川柳とは何  
か」に添えて贈り、その席上御自作の三句  
を御説明なされた由。先生は二十数年前か  
ら川柳の外国語訳を真剣にお考えになり、  
故笠原路生教授と共に親しく手を染められ  
た事も承つて居る。エレンブルグは精説と  
且つ出来れば翻訳印刷の労もとる事を約束  
したそうである。先生も可なり御満足の御様子で  
「川柳の生命たるリズムを外国語で伝える

先生御還暦の思い出

我橋筋のオメガで御還暦祝賀の集りが持  
たれたのは昨日の様な気がするが十年にな  
る。予想を遙かに上廻つた盛會に世話係  
目を白黒さしたり当時の電力事情で懇親宴  
の最中停電となつてロソクの灯で祝盃を  
挙げたり、その雑然たる中に参会者一同の  
親しみと愛情がみち溢れてほんとうに心か  
ら御健祥を寿ぐ雰囲気はひし／＼と感ぜら  
れた事が今日でもはつきり脳裡に浮んで来  
るのである。真つ白い麻服の先生の後につ  
ゝしまやかに霞乃奥様が続かれて会場に入  
つて来られると満堂破れるばかり、やがて  
「六十一まだ情熱は燃えに燃え」と云う世  
紀の名句が発表せられてあれから十年であ  
る。先生は益々お元気だし奥様も一寸もお  
変りがない。芽出度い限りである。先生は愛  
妻家と云うよりも私に云わしむるならば敬  
妻家と申上げたい。先月私の三男が御夫妻  
で掘こたつにお並びになつて居られるのを  
スナップしたのを拝見しても一分の不自然

さもなく文字通りのベターハーフであらせ  
られる。宜なる哉我が不朽洞会員は殆ど全  
員愛妻家揃いで一俤親を呈して居る。もう  
間近い御夫妻の金婚式を門下生一同は首を  
長うして居る次第である。

門下生に対する

愛の鞭はきびし

川柳人としての或は社会人としての人間  
を陶冶すると云う意味での門下生に対する  
先生の愛の鞭は些かの躊躇なく打ち落され  
る。仔獅子を谷に蹴落すその落された仔獅  
子であるが門下生の大勢の中には先生の愛  
の鞭が必要以上に強すぎるかの様に受取る  
仁が時として生じるわけである。私は先生  
に対する門下生の姿を長い目で見て居ると  
面白い流れとなつて一つのほぼ定まった方  
向に力強く流れて居る事に気付く。私はそ  
の流れに従つて時間的に三つの時代を分け  
て見て居る。第一は陶酔の時代、第二は不  
安の時代、第三は尊崇の時代である。門下  
生のすべてが先生の人徳と云うか、作句の

態度と云うか一度は必ず無条件に惚れ込  
み陶酔する。そしてそのまゝ第二の時代を  
経験する事なしに第三の時代に流れ移るの  
が大多数である事は事実である。然し先生  
が余りにもアタクの抜け切つたお人柄のため  
に——気取り屋さんでない事に一種のたよ  
りなさに似たものを感じたり、或は情と理  
に徹する恐ろしく強い大きな力の持主であ  
らせられるために圧迫感の様なものを感じ  
たり、とにかく先生にピントを合せるの  
に多少とも時間と努力とを要する仁が出  
来て、第一の時代に受け取つて居た「麻生  
路郎」に対し何となしに満たされぬ不安  
若しくは懷疑に近い面さえ生ずると云つた  
時代を経る人もあるわけである。そう云つ  
た御仁も結局は第三の心からなる尊崇の時  
代と云うものに落付いてゆくのが普通のユ  
ースである様である。而もこの第二の時代  
に相当悩んで来られた御仁である程、先生  
を尊崇思慕する念は、より徹底し、より強  
力であると私は見て居る。その理由として  
「麻生路郎」が五十年一日の如く巧まれない

事は至難中の至難であるけれどもたとえ句の解説に過ぎない程度であつてもソ連人の中に川柳が判つて呉れる人が出来る糸口が今度の事で見出された様な気がする」と云つて居られて夢よ今一度のお言葉をお続けになり「古稀の祝がすんだら米国やソ連までもゆきたいと思うからその節はよろしく頼むよ」と云われている。

## 先生は大変

### リアルな方である

大胆にして細心と云う昔からの言葉は先生のために造られた感じさえする。川柳家と云うものが感情的な情熱一点張りでは駄目である事は論をまたぬが先生の御性格の裡に想像を絶した冷たいリアルが流れて居るのも当然とは云え、私達の心を動かすものがある。交叉点を渡る際御自身がその交叉点に到着される迄に「青」になつて「青」には足を踏み出すことなく「一度黄」になつて「赤」になつてこんど「青」になつてから歩き出されるのが常である。門下生がいる／＼私生活の事で先生に御相談を持ちかけるのが可なり多いがそれに対する御指示等も全く抜かりのない完璧のもので何時も頭が下る。この正月、梨里さんの御難産に際し前日迄に関係方面の電話番号書抜きを完全に整備されてあつたため、さしもの危急時に当直医、医長、手術室、パトロール、救急車等々掌を指す如く数分の裡に芽出度くゴールインしたあのお手際はよくこの間の消息を物語る一端である。アルロー

て居るとこのゾンデがたえず私達にふれて来る。

## 先生は有名な読書家である

「近頃漱石を初めから系統的に読み返して居るよ」こんなお言葉を承つたのはたしか昨年暮れだつたと記憶して居る。待たされる応接間、選句の合間の会場等で一寸の間でもあれば御愛用の横長の茶皮ケースから「漱石」をとり出して読んで居られる。多分御家庭でもそうであろうと想像して居るが心からたのしげにふか／＼と読んで居られるお姿を最近ちょい／＼お見受けする。先生の広く深く詳しく洋の東西を問わぬ読書力の旺盛なものにはたゞ／＼舌を巻いて眺めるばかりであるが最近の「漱石」には御自分の長い川柳生活と余程ふれ合つた点がある御様子で漱石の若い時代の詩情豊かな天下無双の写生文が、社会百般の事から、生活の事に転じやがて「明暗」に迄移りゆくその変化が先生の川柳生活五十余年の年令的变化と大変相通するものがあつて面白いのだとお話になり御自身の御近作が興味や技巧を離れ淡々水の如き域にあらせらるゝ事も御指摘になつて「漱石」にひかれてゆくお心持ちを時にふれてはお話下るのである。之れは私達門下生に対して本の読み方味わい方等を身もつて御教示下さつて乱読の弊をお戒めになつてのお言葉であると頂いて居る。

## 先生の御健康をおもう

私達が朝夕心を痛めるのは先生の御健康

である。七十年の歳月を常人の十倍百倍酷使して来られたその健康の源はどこにあるか。藪医竹庵の医学では到底説明は出来ない。問う人あらば先生は即座に「精神力だよ」とお答えになるだろう。燃えて燃えて燃え揚つて何物も焼きつくさずにはおかない精神力だ。之れは明らかな実証がいくつでもある。然し私達門下生が先生の御健康を御案じ申上げる取り越し苦労は全く無理無用であろうか。先生は近來お眼がお疲れになる。何とかして余りの劇しいお仕事や睡眠不足、わけても小さい活字に視力を費される事を御心配申上げて居る。又近來はお好きな酒量も減じて来て居る。これは先生が御健康に注意されたり、或は気分的にたのしいお酒だけをのんで居られる結果の様にもお見受けして居る。地方支部等へ御出席に際し、その地方の方々が千載一遇のおもてなし下さるのは勿論結構であるが旅のお疲れや揮毫講演等御氣遣いに加えての過重サービスは心して頂きたく切に思うものである。

## 私達門下生の悲願

一年の一月一ヶ月の一日でもいゝから先生にはんとうに心安らかな生活の憩を差し上げたい。これは曾て先生の川柳生活五十年祝賀の際の企劃の一部でもあつたのである。その第一は先生をあてもない浪々の旅に出して上げた事、第二にその旅のお帰りを静かな方丈に一机を備えてお待ちして居る事。そこから湧き出るであろうと

ころの玉句のかず／＼……考えて見る丈でも胸が躍る。決してこれは私達の夢物語りではない。

## 大巨星にも百年の事がある

御遺曆がすんだら古稀だ喜寿だ米寿だと祝酒に浮かれて常日頃は先生お一人にばかりぼんやり甘えて居ていゝものだろうか。誰しもふれたくない事年ら必ず一度は先生にも百年の時がある。今日のままでいゝのか。数年も前から私は折ある毎に若い不朽洞会員諸子に提して居るところがあるが私達門下生がほんとうに先生を尊崇し、先生のみ心を心として居るとしたならば今日からしつかり思いをここに致して備えおく事が先生への御報恩の道の一つであると確信するものである。

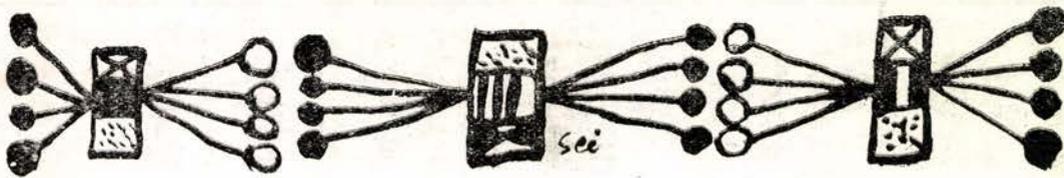
(本社不朽洞会・特別会員)

## 飛燕往來

★尾崎方正医博(ニューヨーク)より

一 路 郎 宛  
明六日(編集註、六月) スペンソンへ飛び其処から英国に入ります。ワシントン、フィラデルフィヤ、ボストン、ニューヨーク、パフアロー等私の歩いた処では黒白入り乱れ大きい人や小さい人、種々雑多です。背の低いのも沢山街に見られ卑下することはありません。

ナイヤガラ大きな滝であるけれど、  
国境の橋タキシード七百円  
シネラマに映る日本は富士雲者  
自動車も見る日本は富士雲者  
ニューヨーク黒人街をどうする気  
一ヶ月堅い歩道へ左様なら



大阪府 中島生々庵  
人前は赤字赤字と仰せられ  
年上と見せぬ養子の気が疲れ

修学旅行

豊中市 戸田古方  
周防灘今日は海豚もぬぬ日和  
千客萬来神父泰然自若なり

大坂府 西尾 栞  
酒だけは一人前に呑む俣  
御近所が舌打ちをする家が建ち  
遮断機の向うに信貴の花曇り  
見送りの時間をきいて遂に来ず

箱根にて

大阪市 市場 没食子  
宿の下駄履いてカメラがうるうるし  
経営の合理化それが減だった  
古稀の路郎先生へ  
まだ隠居さしてもらえぬ柳の根

西宮市 若本多久志

飯代も少しはいれてと母のぐち  
嫁もろてやれるサラリー何時のこと  
苦勞せいと云うてはみたが親心

我が娘だがもう十六で抱けもせず

明日知れぬ命へ宝くじを買い

啄木が金持だつたら詩にならず

齢五十こゝらでホームラン打ちたいな

電話口二号宅からとも云えす

請求書呑んだ覚えは二三本

人間ドックから儲けたい電話かけ

お女将さんがうるさいのよと断られ

この女初手からものになる素振り

冗談にしとく男のする顔

ホノルル市 前山北海

執刀の朝を静かに聖書読み

ワープライドショーでツレーささげて来

日本語で二世へ通じぬじれつたさ

浦島の村が町から伸びて市に

同権の女シガーへ手が延びす

ホノルル市 内藤草一郎

容貌がよんどころなく本の虫

癖だろか灯の色にふと誘われる

女手に育ち文士になるつもり

引退後行く気フランス語を習い

嫉く資格ないわと哀れ寝たつきり

性分にされて気兼ねのない浮気

都々逸もこなせて二世見直され

スコッチがどうのと日程呑めもせず

慣れ過ぎた指札と云う意識せず

すばらしい人気バトロン邪魔になり

握手する程度でキッスとはなりぬ

東京都 宮田不二

海の魚獲るに制限ある世とか

筆持てばすら〜書いて話下手

偉い人か知らぬが解説のもどかしさ

ホノルル市 築山快夢起

帰化してもLADYFIRST気に喰わす

帰化市民天長節へ遠く居り

友人七十にて再婚す

柔肌へ老らく悔いはなしと云う

ホノルル市 白砂旋風

雨降りに働いてまで貧乏し

盆踊り外人の手も月に投げ

酒飲めと云わんばかりに雨が降る

故郷に電気もないが帰国する

アメリカとロシアの芝居幕がなし

政治家は縁もないのに焼香し

大阪市 須崎豆秋

飼主も土佐犬らしい顔になり

酔ってても五円の釣はちゃんとり

年寄の日だけ年寄手を引かれ

値段書き見ながらケチな呑みっぷり

蠅取りの名人となるほどに閑

平熱を感謝すること忘れてた

猛獣とおもい女侍べって

腕時計動かなくてもいゝのんよ

ホノルル市 羽佐間柳葉

立話師走の日脚気がつかず

御馳走の味は胡坐を組んでから



敵味方持たぬ男の頼りなき

俺の齡桶なら輪替えする時分

母親の意見初手より泣いてする

大阪市 福田 安夢

せんせいは老けずほくには子が二人

龜はもう水盤の中と覚悟する

テレビ・8ミリ・冷蔵庫 夢果、なく

百五十八万円のダイヤの前で三十秒

雑踏は生きてる耳かき売りの女だけ残し

大阪市 正本 水客

水引をかけて貰いに母の居間

はもの皮買ってアベック世帯じみ

不機嫌さ宿の浴衣を裏返す

手掴みで特価のおかき呉れるなり

宝物殿かぎの音から時代めき

大阪市 丸尾 潮花

ひとさけた障子を猫にあけられる

撥おいてからの師匠は恋にふれ

月のある窓さえ閉める恋をもち

大阪市 北川 春巢

バラ気狂いにされて日に焦け雨に濡れ

板囲い競馬のピラは見逃さず

筆不精ですと見舞はよくしゃべり

駅前二二程味の店

岡山県 浜田 久米雄

御出勤犬猫鶏に見送られ

借金を取りに女の二人連れ

ストして証拠工場の煙出す

悠長な人だと思ふ三味が洩れ

りようけんの狭さはかすれ声になり

猿を見る人間の眼にあるゆとり

大阪府 菊沢 小松園

親戚はみんな甲羅に身を堅め

地方紙にほめられたので金が要り

出口にも中央がありうろたえる

サイレンを聞いても養子事務を執り

生意気を云うて結局生きただけ

病院は静かなこと思いにしに

金森翁方にて 出雲市 尼 緑之助

蛙なく菜種の里を一望下

酔い足らぬペンで聴いてる遠蛙

スコップと砂利も五月の音となり

新婚の二人朝から目玉焼

南北氏を偲ぶ 大阪府 水谷 竹莊

あの世でも洒落でえんまを笑わす気

洗濯機買うことにしてつけさせる

通天閣タッタ一度でいゝ所

紐まで付けて定期券落しとる

はした金等とは持たん同志なり

商品と知らず扇風機は廻り

兵庫県 小西 無鬼

荒浪も越えん船出のドラが鳴り

故里はいゝな小川のせゝらぎも

肩のこる本はほこりで白うなり

職階に押えられない主義をもち

すじ道が違うと金を出し渋り

長男結婚

大阪府 富岡 淡舟

お茶汲みに来たんでないと云う素振り

山口県 長野 井蛙

母の日もやっぱり母の仕舞風呂

官判汚職の記事にあわて出し

まだ喋り足らぬと見えてマスクとり

一律の賞興に勿体つけてくれ

呉市 林野 甞光

売れ残りだろろうよあんな奴に来て

春へ春へ娘の足が落ちつかず

顔役の順を新任うなすいて

一財産のカメラを肩に通動し

春風に誘われ一升提げて出る

病床へそれと知られるノックをし

イヤリングはすして白衣の人となり

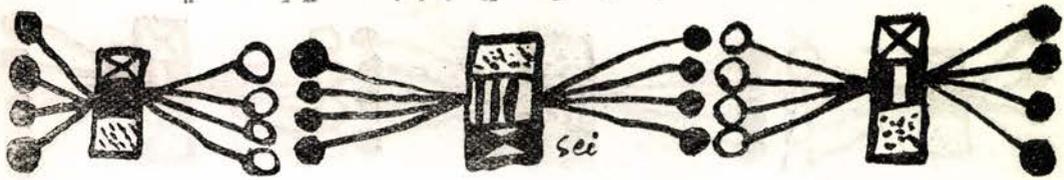
アルバイトにしては人相わる過ぎる

人伝てに聞く愛人の酔虎伝

ママの嫉妬のことにも触れた綴方

政変の裏も知ってる名妓なり

岡山県 直原 七面山



鳥取市 河村 日満

母の日を母は畑にゆきたがり  
ゆっくりと歩いてくれも母の歳  
食堂で母素うどんを通させる  
昇給の倍ほドスタンドで祝い

吾柳新雪両君不朽洞入会

下手糞でよしついでに行けついでゆけ

大阪市 西 いわを

ウエットで御座いますわと仲居さん  
スマートにエロの話を流しとき

岡山市 大森 娛 句 楽

わらび狩り老いてけわしき山となり  
童心を呼ぶいたどりやぐみいちご

兵庫県 若林 草 右

落書も国宝と云う古さ持ち

降魔の剣持った鐘鬼に虫がつき

台所の匂かいでる借電話

大阪市 足立 春 雄

設計図父ちゃんピアノをどこにおこ

床柱引き上げ時に気を使い

タクシーはつっけんどんに走り出し

熊本県 有働 芳 仙

あやまりに来た生徒等の瞳に負ける

附添の足をひらいた肩を借り

二号だと誰が我が子に云ったやら

下関市 石川 侃 流 洞

ざわ／＼と家鴨が霧を押しして来る

説明のつなぎをガイド唄にする

餞別を出すばかりの生字引

尼崎市 長谷川 三 司

突出しの南京豆は撰って飲み

爪染めて米を研がない暮しする

親の轍踏む気か不甲斐ない舞台

ボロ布団なるほどなあと税吏言う

広島県 山田 季 賛

欲得のない転寝に電話鳴る

愛情が底に流れていて吐鳴り

ええことを云うがなと背叩かれる

倉敷市 木村 千 容

幸福に酔うておのれを見失い

巻頭言肉となる字と血になる字

絶対安静実は昏睡状態で

彫刻のあそこ中々味が有り

甘えたい子の気むげにも叱れない

倉敷市 田垣 方 大

ナッパ服折ザシ技師の顔になり

貸浴衣よくぞ男に生れける

ビール呑む椅子悪友は逆に掛け

漬物の指図も母の旅便り

石川県 那谷 光 郎

狂言と見えぬ家出へ母は折れ

こうすれば家族やないのと肩を揉み

寝巻着の母は明治の柄でいる

石川県 野村 味 平

二十世紀強者の無理がまだ通り

弟子叱る情熱古稀へ持ち合せ

大正の恋を映画でなつかしみ

大阪市 木村 水 堂

倉敷市 水谷 谷 水

盛会さ呼ばぬ芸者も来て騒ぎ

はたせるかな下ライ十日で出戻った

銀行に借りがあると大きく出

税務吏に吞ませた借を忘れてた

倉敷市 楳原 一 善

強いこと云うても男を頼りにし

ドライの娘すねて甘えてケロロとし

信念を通せば左遷又左遷

木堂の偽筆を古物屋が寝かせ

バラソルの指図のまゝに漕ぐボート

花一輪水屋の上に見るゆとり

岡山市 岡田 夜 潮

バラソルは賽銭箱にもたせかけ

病人を訪えば病人映画館

くじ引きの席順ボスが末座なり

保険屋の笑顔が見えぬ齢となり

今にして思えば遠慮の恋なりし

心境を話せば判る母なりし

おきまりのけんかでなくてラジオでした

同窓会に招かれて

禿げたのは長寿の相と負けぬなり

玉島市 白井 三 林 坊

憎らしい程客弁にそつがなし

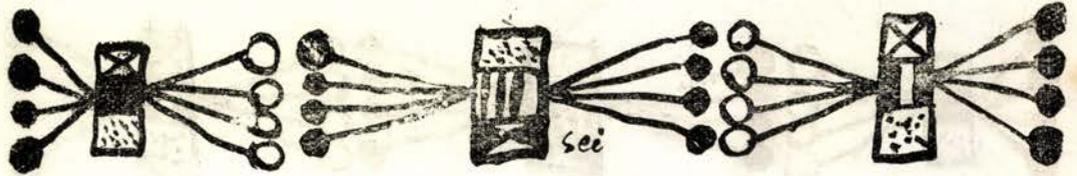
顔色を見い／＼泣くか親に似て

逢えばたゞもうかるかとは淋しいよ

ガミ／＼と云われたまゝで停年さ

岡山市 本田 恵 二 朗

あの時の助言で甦きたのを忘れ



大阪府 真鍋 一 瓢  
 こんな子を生んだと誇るように抱き  
 惚れられた礼に酸っぱい顔をした  
 公僕は借りて置くと帰りやはり

大阪府 松川 杜 的  
 お茶席をみどりの風が通り抜け  
 年上の平へ社長は気が疲れ  
 老妻の強味は三味が一寸弾け

阿蘇にて  
 大阪府 佐野 白水  
 記念写真真煙とともに写される

大阪府 後藤 梅 志  
 かけがえがないとは死んでからのこと  
 消防の火の見の方があとになり  
 万一の時は書類ばかり蓄め  
 最短をゆく暗殺も悪くなし  
 凶悪な心がきざす二十一

倉敷市 藤井 春日  
 手術室看護婦志願逃げ戻り  
 自家用車やたらにお送り致しましよ  
 やれ〜と飲んどりや往診云うて来る  
 あら嫌なおすしばくつくところ撤られ  
 アチャコはんにされてしまうたお人好し

岡山市 津田 太 棧  
 志ん生に似てるかそうかなと思ひ  
 五行本ほぐして貼った二号郎

サラリーのごとは訊くまい大宮司  
 阿呆んだら云うて内職の上をはね  
 初孫がチンボコ摘んで写つとり  
 放哉の句碑に割籠を解く遍路  
 菜の花が霞んだ果は海が鳴り  
 末席を芸者の裾が掃いてゆき  
 ロケーション霞のように消える役

米子市 小西 雄々  
 持つ者の強さを示す核兵器  
 離縁の荷夫婦枕も持つて去に

吹田市 橋本 幸男  
 宿直のくせに麻雀してるとは  
 チャルメラを聞く宿直の淋しすぎ

堺市 高崎 雄声  
 砂ほこり浴びに弁当までもつて  
 春が来たけど一家がふさぐ入試もれ

大阪市 吾郷 玲人  
 中国の地理も識らないチャイナ服  
 兎の餌持寄る騒ぎ幼稚園  
 トン／＼の収支と云うのに家が建ち  
 はにかみやだった子闘争委員長  
 U字転回して拾われた客となり

岡山県 永松 東岸子  
 詩吟では鹿児島弁と思われず  
 日丸をたんすの底に見つけたり  
 税務署に勤めましたと小そうなり  
 発車間際になって男の顔が見え

倉敷市 野田 素身郎  
 万障繰合わして来たにおごられ

混雑へ美人負けすに押返し  
 男と女いつまで友達としておれる  
 知っていて声かけるまで振向かず

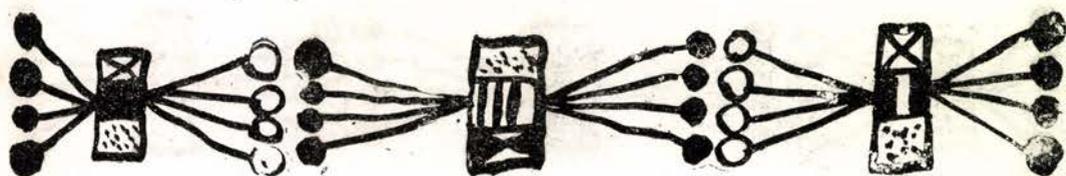
大阪府 川端 東 醉  
 鼠の糸切れたる如し梯子酒  
 酔うて寝たこれも妓か夜が明けた

大阪府 木村 十 悟  
 名譽毀損ちゃんちゃらおかしい生活振り  
 売られてく牛見送つてゝめしが焦げ  
 武者人形今年は毀す兎に育ち  
 勘定がすむまで女将逆らわす  
 下馬と御見受け申し、啖可  
 書かれざる特ダネ地獄の沙汰も金  
 デザイナー今年はこゝをちよん切つて  
 百円は百円でいゝ籤はやめ  
 自由にはなつても発たぬ籠の鳥

大阪府 伊達 堰子  
 信号が好かんと大阪へ来たがらす  
 はっかけを速る尼さんも春の顔  
 帰えろうとするのへ香具師が睨みつけ  
 エレンブルグを聴く

大阪府 不二田 一三夫  
 通訳がハハハと一と足さき笑い  
 抜てきは師匠を殴る役がつき  
 うまかった水はかいなで口を拭き  
 共犯のシャベリが先きに捕かまった  
 赤いシャツ着ているほうが男なり  
 七十のおしゃれはちよんとペレー帽

兵庫県 酒井 ひか 平



拍手へ社務所の障子少し開き  
鮎料理妻は見向もして呉れず  
芦屋マダムの匂いに目まいする  
飲むだけで手拍子一つ打つでなし  
隣人は大学教授窓を閉め

名古屋市長 尾越 鳥

三匹は蝶も喧嘩のように舞い  
踏切は人が死んだで済んでゆき  
俺も社会党だと弁当箱をさげ

大阪府 深見 雅堂

再開の工場蠶蚊に取巻かれ  
カーテンを開けてアベックまぶしがり  
つつ立ったまんまで寄附と対決し

京都市 松下京 一樓

落日やなあと父さん暢気なり  
こんなになるまでと医者を呆れさせ

宇部市 津 秋 六花

女史と云う妻の帰りへ風呂をたく  
後添の趣味にダイヤル委しとり

神戸市 野村 初市

駅弁へさしつさゝれつお茶がゆれ  
こんなにも勝気になった不倅  
箱根バスこゝらは籠で通りたし  
一週間和服吊つとく共稼ぎ

神戸市

新市庁シルバグレーに暮れてゆき

大阪市 金井 文 秋

このへんで効くのに意見まだつゞき  
神主の慾を信心聞いて来る

平凡な服しか女房こしらえず

岡山県 戸田 喜 楽

退職の決意静かに墨をすり  
団体で泊った宿の名も知らず  
街角に今日は違った色の羽

岡山県 池田 古 心

猫の手も借りたい時に生み落し

東京都 石居 高 志

云い訳を許して女満ち足りる

日光から鬼怒川温泉へ

混浴じゃないぜと先につかつて来

大阪府 早川 清 生

大阪弁板につくとは俺も老い

遠足の日を使丁さん背広で来

漫才師老いげら〜と笑わせず

たとえ嘘でも納得させてほしい妻

若勞しに嫁たのでしょうか仏様

大阪市 武部 若 菜

表情のつめ度さにんにく匂う町

給料も呉れずに酒の匂いする

車車流れ作業のように来る

葬儀屋の活弁調に気がほぐれ

堺市 辻 圭 水

検札が顔も一度見るほどの美女

有名人だからゆっくり寝てられず

石川県 中松 恒 雄

うなだれているのを検事叱咤する

借金は二号へ貢いだだけ残り

春よ春官服脱いで見たくなり

滋賀県 中島 可 十

運勢があたりドライもチト気にし  
不満言わず何でも出来て出世せす

大阪市 児島 与 呂 志

一円玉ひろうに車掌あわてない

口答えする子へババがにや〜し

岡山県 野々 口 美 舟

夕やけこやけ背の尻が重い

お別れへ元気でネが声に出す

神戸市 小浜 牧 人

定職を持たぬ酒場のベレー帽

異議ありと唱える説も決めてあり

ナイターへ誘うた方も風邪を引き

天理市 菱 田 満 秋

隅っこにほったらかしの生字引

放射能の害を傘屋も強調し

金要らぬ事確めて賛成し

二号さん少し値切つてあなどられ

編みかけはこんどの彼にやるでしょう

税務署の凄味もきかす但し書

兵庫県 前川 左 文字

一本のビールへどつと来た仲居

春風へ小さな声が消されがち

岡山県 池上 知 恵 美

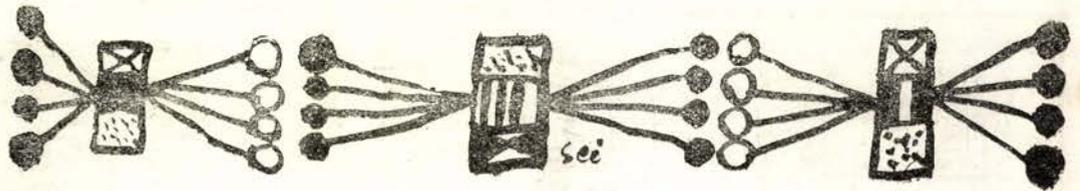
山藤へ雨はむらさき色に降り

負け惜しみ云う淋さを女持ち

お先祖を忘れぬだけの土地を持ち

シャッターへ橋まで入れる慾もち

大阪市 橘 高 薫 風 子



妻の日記も子供等のことばかり  
泊る気になって外したイヤリング  
ポケットの小銭ならしてホッピング  
金策へまた人相が損をさせ

下関市 中村九呂平  
来るたんび道頓堀で足踏まれ  
白足袋をはいて余計な気を使い

山口県 多田ほなみ  
労資ともゆすらす朝の飯にする  
我が指針師の短冊の温かし  
生活の糧とはいわず婚をより

奈良県 宮口笛生  
まねきんの和服買う気もなくさわり  
ベビー服一人選

大阪府 榊本 露 児  
知事さんにはめられていてわーんと泣き  
さすが造幣局欠伸してても硬貨出来

大阪府 池戸 桃 村  
新任の所長もやっぱり謡曲派  
主任だけ仕事している五分前

倉敷市 藤井五茶  
手をとくだけの役あり新議員  
メーデーの蛇尾はボソソ付いて行き  
出世主義どこで消えたか満四十

倉敷市 岡野風の子  
ゴム紐の様に融通きく男  
社長にも頭の髪があつたのか

大阪府 西川 晃  
髻半分落ちたも知らずサンドマン

えげつない事云うといて気にしなや  
ごてるから役持たされたとは知らず  
お悔みに愛想笑いをして下さい  
落ちぶれてなつかしそうにやってくる

釜ヶ崎に住んで  
客観的に見てと都会の良い理屈  
パチンコにせつかちらしい顔並び  
入墨してない方が見貴分  
今さっき出て来たんやと丸刈りの

×× 同舟近詠 ××

松山市 前田 伍 健

漫画では首相西遊記のお顔  
造船所普の教数みんな金  
お答え致します丁重にして要を得ず  
憲法がどうのこうのと細のれん  
万才の好きな車掌の軽い口

大阪府 麻生 葎 乃

尾崎方正氏へ  
夕焼は日本と同じ旅の空  
昔男ありけり恋は花火のふる如く  
脱俗の身には八卦も用はなし

長野県 高峰 柳 児

勇退へ社宅の明け渡しも迫り  
花吹雪物乞う肩へまともなり  
暗給与裏には裏のあるを知り  
ばさ／＼の髪で美談の母撮られ

賽銭箱神主時々眼をのぼし  
家伝葉煤けた戸棚をがたつかせ

和歌山市 秋 月 宏 方  
白髪染してもくたびれとるお顔  
烏口鉛筆行った道ばかり

大阪府 石田 沐 天

スクーター袈裟は五月の吹流し  
船底の客は移民のようにゆれ  
御用記事よませ講読料は取り  
まだ生きて居るのに灰を被らされ

今治市 長 野 文 庫

十五六判を捺すのに何故汚職  
半生は意のままだった遍路笠  
開業を急ぎ電話が間に合わず

大洲市 米 沢 暁 明

幾らでも女はあると第三者  
均一の店の話題も裏長屋  
ブライドが邪魔とも知らぬ嫁さおくれ

新児童ウエイオリン・サークル

講師 麻生 アー ト  
奈良県生駒町本町二丁目一三番地  
生 駒 教 室

TEL306バン  
西宮市仁川町五丁目七番地  
くるみ幼稚園

TEL638バン甲  
★教室新設については新児童ウエイオリン・  
サークル生駒教室へ御相談下さい

# 川柳家の二十四時

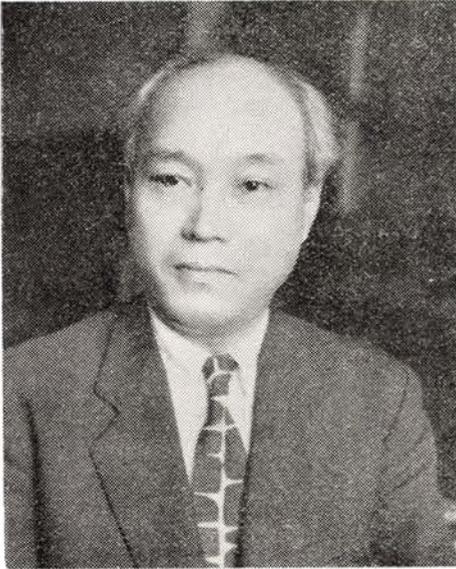
諸大家の真夜中の夢から、晩酌の鏡子の故や食卓の皿の中まで覗かせて頂いたら、諸先生の生活断片史として後世これが貴重な文献となるかも知れない。  
—編集局

(14)

## 東京都 山路閑古

- ★一時——起きていることもありません。大抵原稿のメ切に迫られて夜更しするのです。
- ★二時——起きていることもあり、原稿の為。
- ★三時——この時刻には殆んど起きていたことはありません。
- ★四時——ぐうぐうです。
- ★五時——ぐうぐうです。
- ★六時——一度起きて小便します。そして又寝ます。
- ★七時——週に数回この時刻に起きます。学校の講義の為です。朝は米食です。
- ★八時——満員電車の中です。東京駅で下り、新聞の朝日と読売を買ひ、風食の時読む。
- ★九時——講義開始。学生は二百名内外、マイクでやる。講義は無機化学と有機化学。
- ★十時——講義中です。
- ★十一時——講義中です。

- ★十二時——尾食、サンドウィッチ(ハム二個、チーズ二個、ジャム二個)、それに牛乳一合、三
- ★十三時——実験開始。助手や学生を相手に実験指導、研究実験など。
- ★十四時——実験中です。実験は化学実験、研究は天然染料。



- ★十五時——実験中です。小生は大学教授である為やむを得ないことです。これをやらないとおまんまにならぬ。

- ★十六時——実験終了後は、研究読書。
- ★十七時——これよりパチンコ開始。パチンコの盟友は高橋邦太郎、文章この間に練る。
- ★十八時——パチンコ中です。楽しいかな。何も忘れて。

- ★十九時——パチンコ中です。そろそろくたびれる。(毎日二百個かせぐ。元手平均百円)
- ★二十時——帰宅。夕食はパチンコの前に一杯呑み、軽食をとりパチンコの後に正式に夕食をとる。家内が待っているの、パチンコは内所に行っている。但し賞品を持って帰らないと娑宅の疑いがかかる。
- ★二十一時——この時刻、原稿猛烈に書く。
- ★二十二時——原稿執筆中です。
- ★二十三時——原稿執筆中です。
- ★二十四時——入浴します。一応寝ます。

- ★二十五時——この時刻、原稿猛烈に書く。
- ★二十六時——原稿執筆中です。
- ★二十七時——原稿執筆中です。
- ★二十八時——原稿執筆中です。
- ★二十九時——原稿執筆中です。
- ★三十時——原稿執筆中です。
- ★三十一時——原稿執筆中です。
- ★三十二時——原稿執筆中です。
- ★三十三時——原稿執筆中です。
- ★三十四時——原稿執筆中です。
- ★三十五時——原稿執筆中です。
- ★三十六時——原稿執筆中です。
- ★三十七時——原稿執筆中です。
- ★三十八時——原稿執筆中です。
- ★三十九時——原稿執筆中です。
- ★四十時——原稿執筆中です。
- ★四十一時——原稿執筆中です。
- ★四十二時——原稿執筆中です。
- ★四十三時——原稿執筆中です。
- ★四十四時——原稿執筆中です。
- ★四十五時——原稿執筆中です。
- ★四十六時——原稿執筆中です。
- ★四十七時——原稿執筆中です。
- ★四十八時——原稿執筆中です。
- ★四十九時——原稿執筆中です。
- ★五十時——原稿執筆中です。
- ★五十一時——原稿執筆中です。
- ★五十二時——原稿執筆中です。
- ★五十三時——原稿執筆中です。
- ★五十四時——原稿執筆中です。
- ★五十五時——原稿執筆中です。
- ★五十六時——原稿執筆中です。
- ★五十七時——原稿執筆中です。
- ★五十八時——原稿執筆中です。
- ★五十九時——原稿執筆中です。
- ★六十時——原稿執筆中です。

## 鳥取市 大西八歩

商用で近在を廻るのが月の内半分以上であるから、私の二十四時間は旅行中の記事にした。帰り泊り掛けでは、大分話が違って来るが、宿屋の飯は川柳同様三十年の馴染があるから、新緑の作州地の旅館で書くことにした。

★一時——人間万事塞翁が馬、明日は明日の風が吹くと、いどの

んびり寝入っている。その寝顔にもたまには晩酌の匂いがまだほのかにただよっています。

★二時——宿の枕にも親しみが湧いて、旅愁等というウエット染みたものは一年の内秋風の吹く頃ちよっと感じる程度、この頃は旅先の夢も我が家の夢も余り変わりありません。土地の風景や方言の面白さも、旅の初めにこそ珍らしけれ、二

本格的品質

アサヒビール



十年三十年と過ぎ去った今日、その土地土地の方言で応答出来る位旅ずれて来ました。

★三時—七時 一番列車で次の土地へ行く、合等四時から五時の間に起きる事もあります、元未横着者の私ですから、年間適じて僅かな事、大抵七時頃まではぐすり寝ている後生案です。階下や廊下を通る隣室の客の足音で眼を覚まします。

★八時—焼のりに生卵、豆腐かなんかの味噌汁と、宿の朝食は大抵きまっています。作州では裏の畑でとれた蒨の甘煮とか、山の芋のとろろ汁、大川から主人自ら釣って来た川魚が、旅の味覚を楽しませてくれます。

★九時—十一時 そろそろ今日

所済ませ、次の土地へ向います  
★十三時—十六時 列車所用時間三十分か一時間。窓外の景色も殊更珍しくありませんが、新緑の此頃はさすがに、谷間の清流をのぞき込む藤の花とか、岩山の松の緑の下を彩るつつじの赤が、自然の配色の妙を極めて旅人の心を慰めてくれます。  
★十七時—十九時 今日最後の商売に全力を傾け、六時か七時頃今夜の宿に向います。  
★二十時—二十三時 元気で働いた汗を入浴ですっかり落し、室に戻れば夜食の膳の上にお酒が一本、主を待っています。夜食後の二、三時間に私は人生を想い、それをいかにして用柳に結びつけるかを考えます。年と共に反省の心がルーズになって行く事を淋しく思っています。  
★二十四時— 兎に角今日も生きている事を感謝して就床致します。

はし もと ろく う  
大阪市 橋本緑雨

★一時—夢の世界です。

★二時—まだ夢の世界です。

★三時—この時分に小便に起き

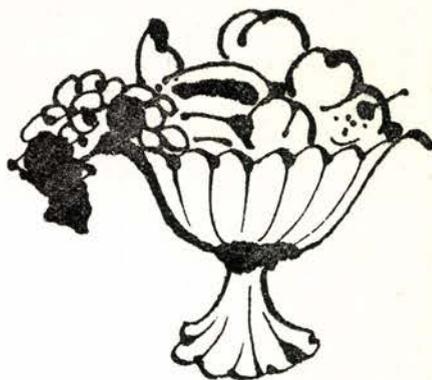
ます。

★四時—まだ夢の世界です。

★五時—眼をさまして寝間で当

日の予定を考える。  
★六時—床をはなれます。洗面  
歯磨はライオン潤製、牛乳石鹸を愛用しております。朝刊は朝日新聞を待つて読む。六時半に朝食、めしは二杯、それに味噌汁。  
★七時—出勤はバス、地下鉄、路面電車を利用します。途中二三の営業所を視察。  
★八時—九時 事務所着、社員の出勤者との応対や、電話問合せ等で多忙を極めます。  
★十時—十一時 来客との応待と書類の作成で、ゆっくりする間もあります。  
★十二時—定食です。別に好き嫌いはなし。酒は一杯も呑みません。すこしでも呑むと顔が真赤になるから……。  
★十三時—局の出納課へ。  
★十四時—十五時 来客の応待等でおやつなどとりません。  
★十六時—五時の退所時間まで来客の応待がつづきます。  
★十七時—十八時 五時十五分が退所時間ですが、理事会議等で、時間どうり退所出来ない。  
★十九時—夜食の時間は一定せず。途中呑む機会が多いので、自宅ではあまり飲みません。  
★二十時—老信、夕刊、写真に関する目録、雑誌等毎日数種来るので目を逆します。  
★二十一時—二十四時 ラジオは疲れているので余り聞かず、寝床で週刊誌や文春など読んでいる間に眠ってしまふ。





# 酒とろり

— 最初が友 最後が友 —

川上三太郎

したたか安酒をくらったために死んでしまつたり死にかけた話はずいぶん聴いてもいるし見かけもした。ゲンに私などもこの世とあの世の間をさまよつた事が二三度ある。敗戦直後新橋のヤミ市の屋台で何とか正宗という一升瓶からコップにいつでもらつたが、ゴツクリやると当時ガソリン臭いのはすでに慣れていて、これはそれに加えて妙な五寸釘を甜めているみたいなカザがしたので

「オヤジ、これ大丈夫だろう」

と何の気なしに訊いたら水滸伝の魯智深みたいな屋台のオヤジ、大きな才細あたまをハスツかけに傾けて

「さあ、ねえ」

と言やがったのには驚いた。バクダンというやつだ。これにあたる目がつぶれて死ぬという一石二鳥のあつぱれな酒だ。すでにゴクリと半分がとこやちまつたのだ。エ、ままよと（この心理は酒をのま

いやつには解らない高遠なものだ）ゴクゴクとみんなのんで往來に飛び出した。そして今夜は眠つたらいかんと決めた。眠つて眼をつぶつたらそのまゝあかないなんてのはイヤだ。ましてやそのままオダ仏なんてのはキライである。このキライなものに近寄らないようにするには、夜あかしで飲んで歩くに限るといみじくも思いついた。二三軒まではおぼえている。バクダンでないのを選んで歩いたため出費莫大であつたがそれが気にならなくなつた頃から

◇酒とろりおもむろに世がはなれゆく  
(三太郎)

といつたような仕掛けになり、ついにメチールとは別なはなれかたをして前後不覚と相成つた……フト気がついたら何と上野駅の荷物受取所の縁の下で横になっていたのである。ハツと立ち上がった。靴もはいてある。オーバーも着ている。上衣も大丈夫だ、よく身ぐるみ剣がれなかつた。とた

んに眼が見えるのに気がついた。つぶれなかつたのだ。更に死んだのではないと考える行き着いてホツとした。どうも順序が逆さまのようだが、上戸というやつはたいがいこういう風に気がつくのである。そしてそれまでは随分妙なお酒も飲んだが、爾來そのク正宗だけでは敬遠した。

◇メチールとメチールの間を縫う生命  
(三太郎)

これはその時出来た即興である。然しこれは空前でも絶後でもなかつた。もう一つ空前がある。関東大震災より以前の話だから大正十年頃かな。私がある小さな新聞社の学芸部長をしていた頃である。学芸部長といつたつて部下は一人もいない。自分で歩いて自分で書いて自分でミダシをつけて工場へ渡す学芸部長である。その時したたか安酒をくらつた（あたしはよく安酒をしたたか實際は今でもくらう）揚句、当時私の巣は品川にあつたので

山の手の環状線に乗つた。ところがあいつは東京―上野―池袋―新宿―渋谷―品川―新橋―東京―とこつちが黙っているといつまでもグルグル廻っている（だから還状線というのだ）あいに私は酔つぱらつてこつくり、うつうつとしていたために、何回或は何十回グルグル廻つたかおぼえはないが、フト耳に

「たかたのーばば」

と聞こえた。途端にドアがあいたのでパツとホームへ飛び出した。品川と聞こえたのでパツと飛び出したのなら話はわかるが高田の馬場でパツと飛び出したのだから、話はわからない。ところが上戸のエ、マ、よという心理を今度は裏返しにした気持である。

パツと飛び出したところがちがつた。私の足と胸は車体とホームの間にスボリとハマリ込んだ、とたんにパイと笛が鳴つて電車が動き出した。私の胴体は電車とホームの間にはさまつてキリキリと廻つた。その儘ストンと落ちれば即死である。ところが私はオーバーのポケットに両手を突っ込んだままパツと飛び出したので、私の両脇がホームの端と電車の端につかえて胴体を支えていた。

ギョツと妙な音がして電車は停まり、私は駅の人に首筋をつかまれてゴボウ抜きに引ツコ抜かれ、駅長室に連れて行れた。

「どうもムチャだね、君は」

名前を訊かれたので名刺を出したらまたネヅられた。

「とにかく学芸とかの部長さんじゃないか

君け  
「へい」

学芸だつて部長だつてこういう時にはこ  
ういう声より出ぬ。それからあととは三十五  
六年も経つたから忘れた。これで空前の分  
は済んだと思つたらまだある。従つて当分  
絶後にならぬらしい。

◇二日酔いづくかに呼吸を整える

(三太郎)

麻生さんに古稀のお祝の日が来た。私は  
心から悦ぶ。戦前、若い頃私は随分麻生さ  
んとお酒を飲んだ。大阪へ行くと必ず麻生  
さんと会つてお酒を飲んだ。そうして麻生  
さんの家へ泊つた。時には麻生さんとお酒  
を飲みたいために大阪に行つたことすらあ  
る。それをいぢいち書いたら空前ばかりあ  
つて限りがないのでそれは又の日に譲り、  
取りあはず馬鹿々々しい以上を麻生さんに  
お目にかけて笑つてもらおうのである。私は  
嘗て斯う書いた事がある。

私は、まづ

友

と書き、それから以下、順に

親

兄妹

妻

子

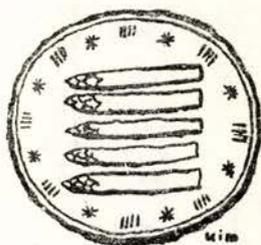
孫

そしてまた最後に

友

と書いて私の日記を閉じた。

麻生さんがこの友であることを許してく  
れば幸甚である。(川柳研究社・主幹)



# 北極星での一席

東野 大八

もう二十年近くも前のことでした。亡く  
なつた柳三門と、東京の銀座裏で、こんな  
論争をしたことがあります。

なんでも彼のやつてゐる、「川柳クラ  
ブ」の句のことが、問題の中心だつたらし  
い。

「金つばのたいこ焼みたいな句は、もう  
句じゃないよ」

と私がこんなことをいうと、ムキになつた  
彼が「ではどんな句がいゝんだい」とつゝ、  
かつてきたので、されば、これからはじま  
るような、次の世界を約束する様な句だ、  
たとえば路郎の

「君見給え ほうれん草が  
伸びている

といつたようなもんだ、と感じたことがあ  
ります。

当時、私は大変な文学青年で、ロシア文  
学にかぶれてシラミをわかすやら、モーパ  
ッサンにいかれてオカシナ病気をもちやう  
やらで、チヨーガーのニヒルとアンニョイを  
自虐的に楽しんでゐたというわけだ。志  
賀直哉だ、芥川だ、といった調子で、路郎  
とか五呂八だとか呼びすてにしたものであ  
りました。そうした最中に、ほうれん草が

めつきり気に入つて、ポパイのようにイサ  
ミたち、川柳界をうけて立つようなハリキ  
リ様でした。

そんなわけで、島の内のある句会に当時  
顔を出して、路郎というアコガレの相手を  
拝見に出かけたものです。本当に若い可愛  
い私でした。

四国大洲の水郷川柳社の同人諸兄は、今  
もって川雑派であることも、大陸から引揚  
早々の私にはうれしいことでした。

蒙盟での岩崎柳路さんは、川雑のカンカ  
チで、よく二人して番傘派の山崎小鮎さん  
と柳論をくり出したもんです。

ジャナリスチックで、文学青年的な若  
さにみちた路郎先生と、大阪の北極星で、  
たのしく牛鍋をつゝいた三年前のあの日は  
私の今も生々とした柳界の思い出です。妻  
と二人で、後日この北極星に泊りましたが  
あなたは懐かしい宿かしらんが、こうヤカま  
しい宿では、家の方がましです。と女房は  
おかんむりだった。これも思い出のおまけ  
になりました。

お金をためて、先生ともう一べん心ゆく  
まで飲みたいですよ。

(本社洞友)

## 季節とからだ

医学博士 杉 靖三郎

初夏に多い

ビタミン

# B vitamins

「B足らん」といえば、誰でも小説「細  
雪」を想い出すほど、当時は流行したも  
のです。このB足らん：潜在性B欠乏  
症：は今でも相当多く、ことに初夏から  
梅雨にかけて目立つようです。身体がだ  
るく疲れやすいのが特長で、いつたいに  
Bの欠けた白米を主食にする、日本の風  
土病とさえいわれています。

そこで、この時期にはビタミンをたつぷ  
りととること、とくにB<sub>12</sub>は冬季の数倍も多  
く補給することが、だるさ、やつかれを防  
ぐ、もつとも大切なことになってきます  
ビタミンの補給には、ポボンスをおの  
みください。

**ポボンス**に含まれているビタミン  
は、10ミリのB<sub>12</sub>をはじめ、A・C・D・E  
など13種が、きわめて高単位に配合され  
ています。ポボンスにはその上ミネラル  
(鉱物性栄養素)が8種も配合され、ビ  
タミンのはたらきを助けて、ますます効  
きめを強くする役目をして、います。

ポボンス

二錠 三三〇円・五錠 五五〇円 一〇錠 一〇〇〇円

小粒ポボンス

三錠 三三〇円・五錠 五〇〇円 一〇錠 一〇〇〇円

大阪市道修町 塩野義製薬株式会社

## 過ぎし日

そして

来る日も

更に 石曾根民郎



観光静岡全国川柳大会が昭和二十七年五月十一日に開催された。それが取り持つ縁でお互い選者として私は路郎さんと久し振りで逢った。十日夕方、榎田竹村さんの家で選者たちが落ち合い、それから雨のなかを宿舎へハイヤーで運ばれた。その夜、先輩たちのいろいろの話につとめて私は聞き手になっていた。路郎さんはあまりしゃべらなかつた。始終微笑を湛えて盃を重ねていた。そんなとき私にぼつり／＼とこんなことを話された。「大阪から静岡まで急行で来るといふんだけれど、私はわざとひとつ／＼小さな駅にまで停まる普通列車でやってきました。ちょっと長い旅だから前の人も、横の人もとき／＼変わる。それがよその人だから話題で賑わう。お年寄りだと余計話題が豊富だ。地方のひとたちの風俗を知ったり言葉を聞くには急行では駄目だ。私は普

夏であつた。みな呑んでるぞビールが敵るぞ夏 路郎

そしてこの本のうしろの方に「川柳雑誌」の広告が出ており、それから購読するようになった。私の句が旧号（らっぱ）で本格的に「川柳雑誌」に掲載されるようになったのは翌年七月号からで、それまでは満を持してなかなか放たなかつたらしい。今から考えるとその頃の自分の慎重さがいじらしく思われる。それから精勵して毎月投句をした。句評にも自分の句がとりあげられた。一層倦まなかつた。その当時の社友に推薦され「近作柳樽」欄から「第一線」欄にうつった。昭和六年八月号の表紙に槍ヶ岳を背景にして私の登山姿を載せていた。殆ど本いっばいの写真で、個人的に表紙を飾つたのは君くらいだと路郎さんから言われた覚えがある。

「川柳雑誌」百号記念の「川柳の夕」が昭和七年五月七日に大阪の朝日会館で催されると聞き、思いついて上阪した。朝早く大阪に着き、玉出本通の路郎さんの家を訪問し初めてここで逢つた。二階に通され、「川柳の夕」で講演することになつて川上三太郎さんにもや／＼ばり初めて逢つたのである。

今でもそうだが、三太郎さんに対する印象は風貌に於て茫洋たる感じが私にひらめいた。午後七時

までには会場へ行くよと三太郎さんは漫才を聞きに盛場へ行かれた。田舎者で無案内だから、会場に行くまで私は路郎さんに食いついていた。円タクを拾つて会場に着いたとき、運転手がどうしたわけか、法外に料金を請求したらしく、路郎さんは規定通り支払うだけだと言ひ、偉い剣幕で運転手をなじり、私を引張つてずん／＼入口に向つた。成程、情熱家だ、爆弾児だと言われるわけはこゝだと思ひ、実はちよつとこわかつた。でも私は遠来の客として充分もてなしを受けた。

上阪を約せば 円タクを値切る手筈も添へてある

その頃の句である。路郎さんはお酒が好きで、いくつも酒の句があるのでそのとき私に

酒の香の男となりて会ひに来む

という句をものし、再会を約していたのであつた。私はこのとき二十三歳、酒というものを知らず、女を知らず、今度逢うときは酒の香にひたつた顔で逢いたいと願つたわけだ。だが、四十八歳の此の頃やつと酒のうまみ、酔うときのおのれの虚しさがわかるようになった。

酔眼に灯がまた／＼げば人生か さかしらに言葉の花火散る酒で たましひの抜けゆく安堵 あつて酒

といった句が出来るようになったのも、路郎さんが酒を愛する作家であり、これにあやかりたい気持がいづつも私の胸にあつたからなのである。

「川柳雑誌」の社友で滋賀県甲賀郡寺庄村に住んでいた平井蒼太という人があつた。憂鬱な、また病的な、頹廢的な、それで妖しい色／＼ほさを凝めた特異な作風で名があり、私は異常なほどにこのひとの作品に魅せられていた。

薄暗く寝顔の白きいらだちに 蒼太

わが生命南京玉となつて散れ 陶器の肌をなでるときめき

江戸時代の賤娼、女角力といつたぬめ／＼した研究を手掛けて風俗雑誌に執筆していたが、私はこのひとから随々と生理的な目覚めを凶解入りなどで教えられた。私は長く童貞であつた。蒼太君はそれを知つていて私をいたわつてくれた。昭和八年四月の陽春、京都駅で桃源堂主人のペンネームで知られた山本定一君と三人が集り夜の京都をあさつた。祇園あたりのダンスホールに蒼太君と寝た。猥褻好きな私たち二人を山本君が行きつけのつれこみ宿に案内してくれた

のである。思い過ぎをしては困るが蒼太君と私はソドミーをしたのではない。

浮世絵に纏る自嘲を共にせむ

と(平井蒼太君へ)の前書きまでそのときの想い出を私は詠い上げています。それから二人で大阪に足を延ばし、路郎さんを訪ねた。蒼太君がしゃべりすぎたせいもあつたが、私も案外口下手だから黙って聞いていたのがいけなかつたのか、「君はどうしたのだ、こゝまで来て何故僕に話しかけないのだ、意見をかわし合つてお互いの胸中をあかすのがいいのであつて、君のように牡蠣そのもので黙りこくつてばかりいでは駄目ではないか」と一喝、大いにどなられてしまった。気の弱い私、すつかりしよげてそこに居ることが非常につらく、はる／＼松本から大阪まで訪ねて来たのに、旅の疲れやおとなしい性行すら慮からず、こゝもむきになって叱られたのではたまったものではないと私はせつなかつた。しかし待てよ、これはや／＼ばかり自分がいけなかつたのだ、遠いところからやつて来たからには路郎さんとし／＼話をしして、川柳の勸向とか川柳の全般について、いち早くいろ／＼知ろうとしなければならなかつたのではないか、黙つていてはそのいとぐちすら見出せない、これは私が短慮だつた、自分ながら恥ずか

しいと悟つた。こうしたことがあつて直情径行、何の銜もない人なのだとしみ／＼思つたのである。

「川柳雑誌」創立十周年記念で東京進出「東京句会」がその同じ年の昭和八年十月十五日浅草の並木俱樂部で行われ、私も「川柳雑誌」側の委員で上京した。君は東京の柳人の顔を知つておく必要がある。受付をやり給えと路郎さんに言われ、着到簿に書く人の名と顔を見くらべ、この人がさうだつたのかと名と顔を知るには非常に役立った。堂々たる体軀で、あたりを払うような人がやつて来た。着到簿に自分の名を書こうとしたらボキンと鉛筆の芯が折れた。力を入れすぎたのか、もう一本で井上剣花坊としたゝめた。あゝこの人かと見上げた。翌年九月十一日に逝くなつたが、思い出して一期一会のおもかげを追うばかりであつた。

それから昭和十一年九月二十一日に路郎さんが初めて松本にやつて来た。たしか東京からの帰途だつたと思う。折柄、私が市内で川柳展覧会を開いていたときだつたので会場を見ていたゞき、川柳同好者には集りを願つて座談会をした。なか／＼感銘の深い話があり、それが川柳の仲間では長く話題になつた。その日は相憎、雨で

徳利ひとつ乾さば旅路は師にはるか  
と私は作つた。路郎さんは雨の松本にて  
遠く来て信濃に山のない日  
なり

このように松本の印象をききみつけられた。その夜、路郎さんを浅間温泉に案内し同宿した。ねざめては湯の香の窓へ師をさそひ  
という句が出来た。一旦私の家に寄つて貰い、家の者たちにも逢つていたゞいた。色紙や短冊に揮毫をした。ちゃんと自分用の書き馴れた筆を幾本もトランクに入れてあつた。

師の汽車よひとしほ秋を縫うてゆけ  
そして別れた。その後、私は松本で川柳愛好者を糾合、「川柳しなの」を発刊し、大いに普及につとめた。昭和十二年三月号から題字を路郎さんに書いていたゞきこれが長く続いたのである。私は昭和五年から昭和十五年までの川柳作品をまとめ句集「大空」とし、昭和十六年十二月に刊行した。二百部限定であつた。序文、題字を路郎さんから書いていたゞいた。これが何よりの私の句集となつてゐる。その以後の作品を「山彦」と題し、出刊したいと思つてゐるが仕事の都合でなかなか印刷出来ず、しかしいずれ出すときにはまた路郎さんにいろ／＼お智恵を借りたいと虫のよいことを考へてゐる。

私は川柳を「川柳雑誌」で学んだ。そして育てられた。あきらかに川柳不朽洞会員であるにも拘わらず、作品は勿論、執筆にも御無沙汰をしてゐる。申訳ないといつも思う。私がさゝやかであるが「川柳しなの」を主宰してゐる関係上(これがいたつて遅刊がちで迷惑をかけてゐる)それを口実にして疎遠になりたがるのである。しかし路郎さんと逢うことは稀であるけれど、私はあくまで川柳を開眼してくれた師と仰ぐことに躊躇しない。私は「川柳雑誌」に句は出さなけれど、せめて「川柳しなの」に発表する私の句を見ていたゞけることによつて、私がつゞけてやつてゐるのだと誇らしげに提示したい気持があるのである。私があちこちの川柳誌に依頼されて書き、またおこがましくも選者になつて旅立つことがあつたが、路郎さんは黙つてひろい心で私を許して下さい。それが実に有難い。

古稀を迎えられた慶事に私は涙ぐましいものすら感じ、昭和四年の頃の、私の川柳の目覚めを追懐する。路郎さんにはほんとうに長い間、じつと見つめて貰つた温い

お茶の街用は 白龍露 波の 詩雲松 茶露茶 抹玉煎 お茶の宇治園 心齊橋大丸百貨店前 TEL(27)3489 (しなの川柳社・主幹)



# 新川柳鑑賞

麻生路郎

である。

〔四一八〕

裏街も水が流れて京に住む

(水客)

観光都市京都の静かな生活を目のあたりに見るような句である。裏街に流れている清らかなこの水も、平安朝の昔から流れている水なのである。

〔四一九〕

大阪銭湯

下駄に鍵衣類も鍵に気が疲れ

(無鬼)

都会ではウツカリすると物が無くなる。銭湯のなやみは下駄がなくなる。衣類がなくなる。一々弁償しては商売にならぬ。そのため番人をおけば人件費が高つく。そこへ生れたのが下駄函のカギ、衣類入れのカギ、雨が降れば傘入れのカギとなったのである。都会人にとってはそのためゆつたりと湯に浸ることが出来るのであるが、馴れない人にとっては気が疲れるかも知れない。一つの発見である。

〔四一五〕  
はからずも等とやきもきし  
たくせに (生々庵)  
会長に推された人が就任の挨拶に「浅学非才の自分がはからずも云々」とハンコで押したように使う「はからずも」の語で情景を躍動させている。会長になりたくてあんなにやきもきしたのを忘れたような云い草に苦笑を禁じ得ないことを詠んだもので稀に見る皮肉な句である。

〔四一六〕

菜の花の中の工場は閉めて

あり (栗)

ところは場末か、郊外であろう。田圃の中にボツと工場が建っている。工場の周囲は菜の花の真ッ盛りで、いかにも春らしくのんびりとした

電化してみたが坐つて飯を食べ (多久志)

(多久志)

台所風景をごく平易に詠んだ句であるが、なんだか、自分たちの生活が常にムジューンだらけで尻こそばゆさを感じたのである。そう思うて振りかえると畳の上に椅子をならべて事務をとっているのもおかしく「電化してみたが」の上八の措字がピタリと来る句

〔四二〇〕

巖丈な男が泣けば喜劇めく

(淡舟)

弱虫が泣くのに不思議はな

## 古稀祝賀

中島生々庵  
中島小石

大阪市南区饅谷  
仲之町二〇番地

## 不朽洞

▼常任理事会  
六月十五  
日(土)午後  
六時から南区  
三休橋の中島  
生々庵居で開催。路郎先生の古稀祝賀準備に関する打合せ其他を協議した。当夜の出席者は路郎先生好郎、多久志、梅里、文蝶、小松、関、恒明、春菜、没食子、一飄、腹子、紫香、いさむ、古方、一步栗の諸氏。

## 会から

▼常任理事会  
六月廿五日(火)  
午後六時から南区三休橋の中島生々庵居で常任理事会が開催され、古稀祝賀の準備と協議を行うこととなった。

## 大会迫る

いよ／＼七月七日  
の川雅川柳まつりとしての古稀祝賀川柳大会の日が迫って来た。柳縁につながる人達は万障を繰合せ

## 新会員紹介

六月入会  
野田一念氏(名古屋市)正会員  
方大氏推薦

## 八杉風車氏は家事の都合で五月

退会された。

## 七月の本社句会

は路郎先生に川雅川柳まつりの特別課題をお願いするので毎月の兼題がなくなりま

## 不朽洞カッパ

は腹乃先生の兼題「福」の天位に贈ることに

## 古稀祝賀の準備と協議を行うこと

となった。

## いよ／＼七月七日

の川雅川柳まつりとしての古稀祝賀川柳大会の日が迫って来た。柳縁につながる人達は万障を繰合せ

## 新会員紹介

六月入会  
野田一念氏(名古屋市)正会員  
方大氏推薦

いが、誰れが見ても弱虫に見えない巖丈な男がポロポロ眼から涙をこぼして泣いているのはあまりみっともないものである。それこそホントの弱虫なのであるが、からだがかッシリしているだけに喜劇めいてうけとれるというのである。たしかにうなすける句である。

〔四二一〕

次々と阿呆ばかりの来る日なり (晃)

どんな阿呆が来るのか判らぬが、なるほどそんな気がする日である。自分もその阿呆の一人であることは云うまでもないのである。そんな日が続くことが、その人にとっては意外に幸福なのかも知れない。こんな句は句のウラに味があるのを噛みしめて見ぬと味は出て来ない。

〔四二二〕

うちの子がトツブにくぐる塀の穴 (草右)

親と云うものはうれしきものである。或は馬鹿なものである。子どもが塀の穴をくぐってあそぶのにも、トツブを切っているということがうれしいのである。そうした親の

心理を巧みにつかんだ句である。しかも情景が目に見えるように描出されている。

〔四二三〕

運転手と云う見知らぬ男へ生命をあずけ (安夢)

お互いは何等の考慮も払わずに、自動車に乗っているが考えて見れば随分危険な話である。何処の誰だか見知らぬ運転手、運転が上手か下手かそれすら知らずに平気でのちをあずけていることをふっと思つたのである。神経衰弱でなくてもそんなことをふつと思つたものである。そうした心理をうまくつかまえたのがこの句だ。自由律の句としての妙味もある。

〔四二四〕

ハンサムの人から女給先に酌ぎ (草一郎)

女給がお酌をするのに、無意識のうちにもハンサムの人から先にお酌をしていたと云うのである。ただそれだけのことであるが、軽い穿ちの句として興味がある。斯うした心理の探求が手際よく果たされるところに川柳することの面白きは尽きない。

〔四二五〕

的確に且つ迅速に金銭が減り (不二)

カネがゲン／＼減ると云うことは誰もが経験し過ぎるほど経験しているのに、使えば無くなることに何んの不思議もない筈だ。ところが斯うして句にされて見ると一種の魅力を生ずるのはどうしたわけかと云うと、「的確に」「且つ迅速に」と云う漢語で、しかも調子のよい表現の力によるのである。何んでもない題材を生かすのに、調子や表現の仕方が、かなり強力な役割を果していることの証差としてこの句などいい例であろう

〔四二六〕

飲んじやいや嬉しいことを言うて呉れ (春日)

愛人か、新妻か。どっちらでもいいだろう。「そんなに飲んじや、ダメじゃないの」と云つたって、飲まなくてはならない時代がやがて来るのである。そう考えると若い時代や甘い時代を、うか／＼と過ごしてはならない。おだてる訳ではないが出来るだけ甘い味を噛みしめておく必要がある。若さがほとばしつてるような句だ。

社の黒板

★北国新聞社主催の北国川柳大会は九月八日(日)正午から北国会館で開催される。本社からは路郎(北国柳壇選者)、霞乃、白柳子、多久志、葉、緑雨、二三夫、鬼醉その他の諸氏が出席する予定である。京阪神その他から出席を希望される方は連絡をされたい。北陸方面の出席希望者は本社又は小松市大和町川柳小松支部、石川県大聖寺町永町四八川柳大聖寺支部へ連絡されたい。

古稀祝賀

西尾 葉

大阪市南区西賑町三〇  
電話南⑤五九六三番

若本 多久志

西宮市津門西日町五〇

川村 好郎

大阪府泉北郡高石町北四六五

品質優良

**先カペン**

TACHIKAWA PEN



大阪府東区常盤町一丁目十一番地  
立川ペン先株式会社

タチカワペン  
タチカワゼム  
タチカワ画  
タチ



## 雪の頃

— 私と路郎 —  
川上日車

との間に一つの曲り角がある。その曲り角を意識にとめず一直線に歩みつづけるのも、透徹した一つの道ではあるが、自己に厳しい執着をもつ者にはそれができない。そこに青年期の浮氷が横たわる。路郎と私を手を携えて「雪」を発行したのは、まさに此の曲り角に立つた時であった。

くろぐると道頓堀の水流る 路郎  
行く末はどきどき火の如し 同

こうして路郎の眼は次ぎ次ぎと人生のあらゆる角度に拡がっていった。

道頓堀の水の流れは誰の眼にも映る。だがその印影はただ事象そのものに過ぎない。いまここに示した路郎の句には、水の流れに秘められた人生の謎を、究明しようとする自己の意識が擦ける。この意識こそは文字の枠外にあって、句そのものを深く味う者へのみ与えられた捨棄の恩沢である。事象を意識の上に深く捉らえるか、捉えないかは自己認識の深淺によって定まる。これが作家として起つ場合、最も重要な楔だ。

かくて自己の内攻の推移に倅しつつ、路郎と私とは「雪」編集に心を砕き、異なる二人を一人格に結晶せしめたのである。これが「雪」創刊の動脈であった。

不可思議と思うのは、時が経つという一事である。時が経つということは、時の移るに随って知人が一人ずつ減ってゆく事を意味する。時そのものを極く大刻みにみれば、知人の逝くその節が時の知らせである。そして自己の死に絶える時、この時

計はとまる。

大正四年、「雪」の初号を出してから、早や四十余年を経過している。この四十年の時の流れのうち、かつて同人であった幾たりかは冥土へ旅立っていた。「雪」もまた十八号きりで廃刊した。しかし死んでいった同人も、廃刊した「雪」もそれで満足している筈だ。あの時よくも「雪」を出しておいたと思う筈だ。殊に路郎と私には、いわゆる青春文学という懐しい烙印が刻みつけられている。同人悉く逝くとも「雪」の一冊ぐらいはどこかに遺っているかも知れぬ。それが吾々人生の最もよき記念となる。

さて故人となった同人を掃り起すと、松村鬼史、宮林董哉、藤原海魚、それよりすこし後れて洋画の小出橋重、牧野虎雄という順序になる。このうち小出と牧野は句の上ではなく「雪」の挿画を描いてもらっていた。尤もその頃は二人とも発棘たる青年時代で、現在ほどの声名はむろんなかった。それは小出と牧野の画を頒布しようとして十円そこそこで会員を募ったが、誰れ一人応ずる者がなかったのでも判る。けれど二人の画は「雪」のあるかぎり、いついつまでも、遺るであろう。その画はきわめて放佚なものであったが。

鬼史は、鬼史の句集を上梓しようとしたが本人が固く辞退したので、それではというので重載の句集「冬の土」を出した。これは五百部刷って僅か三十部たらずの売れゆきで、残りはどうとう製紙会社の釜の中へ溶けこんでいった始末だ。それが四十年経った今日、やっと希望者が現われるのだ

蘭蝶の新内に「縁でこそあれ末かけて」という出語りの一と節がある。これは男女

のいきさつを唄ったものだが、路郎と私もまた、詩藻の縁で交りが結ばれ、ただ「末かけて」とまではゆかなかつた。それは女性と男性との相違からで、互が男同志だったからである。そして今日では路郎の先輩なり、柳壇の声望からいえば、「路郎先生と私」でなくてはならぬ。さりながら、私にも路郎先生と呼べば、路郎もさぞ際々と思うだろうし、私にしても越し方を想うとそんな他人行儀はとりたくない。第一、そう事が革ると書きたいことも書けず、つい心にもない虚る事を書く。それでは路郎にすまぬ。やはり「路郎と私」で昔どおりの気持をつづけたい。

路郎もようやく年を積んで古稀の齡を重

ねまことにめでたい。けれど私の眼にのこるものは青年路郎であって、古稀のそれではない。それほど此の頃の交友がいまなお強い印象を残している。新内での「末かけて」は現実面ではあとかたもないが、過去の残影によって初めて甦る。これこそ「末かけて」どころか、永世かけての契りとなる。蕪村に句あり

春雨やもの書かぬ身の哀れなる

古川柳には、古川柳独特の味いと響をもっている。私たちは久しくそれに浸って川柳作家としての播種期を過ごした。だが少年期はやがて迎える青年期の前提である。少年期に「紅い」と映ったものは、伝承的「紅い」であって自己の発見した「紅い」ではなかった。ここに少年期と青年期

から、董哉もさぞ地下で苦笑を浮べていると思う。

そこで現在生き残った同人の消息を、ここで少し洩らしておく事も、いつかは亡くなった同人のあとを趁うのだから、これはあとに残った私の義務だと考える。

まず伊藤鯉魚だが、八十の年輪を重ね、すこぶる健在で、名古屋の名士として美術界、俳句会の指導者であり、その派の権威者でもある。「雪」時代には、鯉魚独特のカットに妙好の筆を揮い、画家、俳人の眼を奪ったものだ。最近の消息に

「久々で鬼史に逢ったような感じで、鬼史の川柳をなつかしい思いで読んだ。鬼史の川柳というものを余り知らない私は、同君の川柳を知ったのは初めてであるが、読みゆくときどことなく句気というものがあるが、私には触れてくる。月斗と遠ざかったのは、川柳というのではなく、もともし鬼史は詩人、月斗は起業者、鬼史と合う筈がない。子規さん当時はおたがい一生懸命であったからだ。

折口さんの江戸時代の文学のなかにほんの少し川柳の生れた当時の事があるが、成程そうかと思われる。今の句と同様、内的にすこし力というものが無い。なにかが遊離しているというわけだ。絵にしても彫刻音楽にしても、今日の日本はすべてにおいて迷い切っている。祖国を思わないものによいものは生れぬわけ。今の日本人は祖国を、忘れすぎている。祖国のよさを一日も早く知らせる事が肝要だ。

〔註〕鬼史の川柳とあるのは「番傘」誌上掲載の「柳珍堂の句境」を讀んでの感想

(柳珍堂は鬼史の別号)

とあるが、なかなかもって健かで活動力にも満ち満ちている。同人のうち最後まで残る一人かも知れない。

兼崎地燈孫は山口県徳山で弁護士をしてきたが、脳溢血を起し、今ではひたすら静養につとめ、書道の研究と俳句に没頭している。その消息に

「小生はどうも健康がわるく十分の活動ができず、静臥している始末。生きていければ何とかなると頑張っています。董哉の事、期待しております。併し今日董哉の事が世の中に出る事を思うと矢張り董哉が成長しつづつある事を思います。鬼史、鯉魚さんも同様、唯だ両翁については誰も書く人なく、又ひっかかりもなくなつたので淋しいことです。とにかく何か書いておいて下さい。橋重、溪仙そうした人達も故人。一度お会いした鍋井克之さんは健在のよう。いつか月斗翁の宝塚句会に参りましたね。月斗さんにはその後、下関でお会いした事があります。大阪鉄眼寺の「子規忌句会」雪同人主催の事など想起。あの時

ただ一つ初汐に浮べり 鬼史  
生ま子の泣く声こゝろ曼珠沙華 董哉  
いづれの芭蕉葉も裂れくも 地燈孫  
など作つたのを覚えています。精進あげに「播半」へ行った事も。

鯉魚さんも何かお書きになるとよい。昔話も書いておかぬとなくなりませう。近作

我が月日は失意に暮れつ浅蜷汁  
鍋の香や「どぎ」を煮る火の近し  
皆開く鼓むらさきに蜷汁

一生を顧みて夢の如し。何もできませぬ。句はあいかからず作っております。京大の法科を出て、放哉にもならず。誓子にもならなかつた俳人地燈孫こそ、まこと、人生を味いつくした人と思う。その人格に至つては、人は知らず私は絶大の敬意を払つている。

作曲家、信時潔は、東京にいて健在。楽壇の指導にあつてゐる。雑誌「心」の同人として折々音楽の事を書いてゐる。その消息

「古典」への親しみは、私の場合、バッハやモーツァルト、ベートベンへのそれとなつてゐるようです。そして新しい曲を評価する尺度にしています。「六厘坊の放屁の事は記憶にありませんが、さすが彼らしい不敵さですね」

去年の春、湖辺の風光を見がてら訪ねてくれたが、とても音楽家とは見え、村夫子然たる風采に深い親しみを新たにしました。

東洋哲学専攻の石浜純太郎は、関西大学の教授で、モンゴル語を教えている。大阪名譽市民という、石浜にとつてはいつでもよいらしい肩書を持つてゐる。健在。手紙に

「日東句集」ありがたう。開巻第一句の「いつまでもおなじ着物きてる恋」を讀んで昔日の感を急に思い出す。「酒すこし飲めば淋しくなるものか」は下五

「淋しくなるものぞ」と覚えていて何處か友人達に聞かせた事があつた。君は僕よりおませだと思つていたがおませよりは革命児だつたんだね。「心邪なく初秋の指冷やかに」の句を見ると近作を時々みせてほしい。やはり僕よりませている

に違ひない。機会があれば一度お話ししたい。

これで「雪」同人の過去、現在はすんだ。最後に路郎と私だが、路郎は「川柳雑誌」の主筆として川柳界の第一人者、押しも押されぬ人となつてゐる。ここに哀れをとどめたのが私である。卒中を病んで半身不随のまま戸外へは一步も出られず、ただ読書と筆とる事に終始してゐる。

蘇東坡の詩に「廬山の真面目を識らざるは、ただ身、この山中に在るに縁りてなり」とある如く、麻生路郎の偉らさを知らぬのも、あまりにも路郎と親しかつたからである。廬山の山容に日夕没してゐる者は、遂に廬山の全貌に接することができないと、同様なのであらう。(完)

カットは筆者の注文中で「雪」当時誌上を飾つていた伊藤鯉魚氏の作品である。

編集局





# 川柳第二教室

## 作句指導

戸田古方

### 研究題「新顔」「刀」

六月号は私の都合により休講いたしましたして申訳ございません。扱今月は「新顔」と「刀」、もう一つで三題断と云う所です。新らしきものと古きもの、「日本の歴史を作る日本刀」という私の句があります。戦争当時日本刀は正に古くして新らしいものであります。た。「刀」から匂う日本の伝統。世が世なら刀で喰える家であり

花車

「ご」「お」の仮名書に救われています。封建の残滓はまだまだ無くなっていません。

帯刀の武士が世そつな門構え

湖島

刀には未練もあつて日本人  
ほんとに民族の郷愁でしょうか  
打粉して拭いて刀をどうする気

柳叟

御家室にもならぬ刀の仕舞い場  
戦時中隠しおおせた刀の匂い  
「刀」は「刃」と句調を整えましよう。

武者人形刀の折れたのも飾り

まだ今年も武者人形の刀抜き

「まだ」は「また」でなく、

「まだ」なればこそ、刀を弄ぶ子

竹切れを持てば丹下のかまえず

玩具の竹光だけでなく、もつと

禿げちよるの刀を持つは切られ

名刀は今便利な竹を割り

周甫

しかし  
魂を鉄に注いだ刀鍛冶 水鏡子  
銘刀を打つ腕余生鎌を打つ 美舟

刀は武士の魂、その刀を作る魂を今に生かす。それを主題にしたこの二句、二つ並べると優劣を附けたくなるもの、簡潔な前者は名詞止めからきて情緒に乏しく、やや冗長な後者は説明的な部分が目立ちます。

新顔の方にも  
馴れるまで新顔もちと猫かぶり  
猫被っている新顔の目の動き 静歩

英文法の「動名詞」のような名詞止めの仕方を感じは柔かです。川柳は附け句から出発したのも、動詞連用止めの多いのもそのためでありませう。しかし連用止めでなければならぬものでもなく、そうする方が作り易くもあるのです。俳句の切字は味嘆的、天地自然と一つに触けこもつとしますが穿ちを多くもつ人間詩川柳は理性の堅さを連用止めで緩和しているのです。

新顔も交えて初の委員会  
村諷子

新顔のひげがもの云う委員会 寸女

同じ委員会でもいばっている新顔とかしこまっている新顔と、後者では髭が、前者では「初の」がきめ手になっています。

それから「新顔」は四音で中七

下五には置きにくく冠句のように並んでしまします。

聴診器新顔らしく  
ない手つき 南牛子  
職場替え俺も当分  
新顔か 堅持  
友達もなく新顔の  
砂いじり 錦花

返答に困る新顔電話口 丹謡  
上五にくる言葉は第一印象、下五もそれに負けません。それに比べると中七はじわりとしゅみ出る味をもちます。が何しろ短い句のこと、心理的な区別はむつかしく、まあいってみればそう云うものでしよう。

新顔の胸につきぎあだな出来  
みちる

新顔のところで歪止つてる

新顔のことなど土工気にかげず  
初甫

新顔の話題にしてる女事務  
南天

新顔が容姿端麗嫉妬の目  
真奇

白糸中で  
岩貝めて親類にも送る

先舗 松前屋昆布



大阪・心 斎橋  
電話 (75) 九〇八四番  
電話 (75) 三四八四番

あとの五句は上五の「新顔」と下五の名詞止めとがつつばり合意をした如く些かドギつく、却って動きの少ないものとなっています。しかし、新顔というが家には二男二女 静観堂

大阪ガス株式会社指定店

水野風呂

工場 豊中市産業道路筋  
バス北桜塚停留所前  
電話 四〇八六番

販売部 豊中 駅南半町  
電話 四八八二番

電話 四八八二番

あたりにありますと、老新顔の悲哀というか、それ程のギョチなさは目立ちません。  
名優の素顔にあった刀傷 実男

佳句といつていいと思います。さうであろうとすうであろうと里の母

古川柳

世を捨てて先ず淋しいは膳の上

古川柳の名詞止めは上五をやわらかくして調和を考えています。早鐘に和尚を見れば猿轡

古川柳

辻斬を見ておわします地蔵尊

古川柳

ぶっ そうな句には上五、下五の名詞もむいていろいろです。名優の素顔の刀傷などこの書類に入るのでしょう。

一新入社

と「新入社」で「新顔」を表現しているのも一つの手です。

ニューフェイス心臓ばかり八等身

ニューフェイス裸を見せて売出され

八頭身、心臓の句は少々道具立てに食傷気味。押える所は押えるべきです。

阿呆と鉄は何とやら、刀は兇器

人を害し、又人を生かします。聖心を失ってはなりません。

ペンだが刀笑って見る映画

どうせチャンバラでしょうが。平和論矢張り店には刀あり

白眼視するインテリよりこの刀

屋さんの方に好意がもてます。顔役の床に村正らしきもの

核兵器一たび抜けば村正の

狂人に刃物となつてはなりません

### 祝吟 杏林川柳会

子や孫にはにかむような古稀祝い

河村 瑞川 七十年さあこれからの猪口をつぎ

川柳の栄えと共に古稀祝い

古稀となりまだこれからという若さ

安岡 珊枝 郎

騒がれてしよう事なしに古稀祝う

年だけは古稀情熱は燃えつづけ

中島 小石

古稀の寿へ弟子がよっぽどふけて見え

私しやまだ青年ですよとコップ酒

宝刀の一声待つて御家芸

錯刀近頃猫も寄りつかず

物差が虎徹になつたかくし芸

駄目八

辰始

猫に馬鹿にされる日本刀ではないと思ひます。日本刀の精神は日本人にとつていつまでも新顔、錆

恵二

本人にとつていつまでも新顔、錆

剣舞の御家芸よりはつきり物差

「研究課題」旅行吟又は写生吟

## 金泥集

麻生 霞乃 選

課題「祝」

お祝はもうやめといて五人目や  
祝日へあつたはずだときがす旗  
ジルバマン習う主じは古稀の人  
大鯛が届きお祝派手になり  
祝電にしとけ手紙は邪魔くさい  
下心あるお祝へ気が疲れ

カネ

あやめ

メ女

小石

河豚王

阿茶

ぶさいくに肥えて全快祝され	美喜	酒達者からだも達者古稀の人	とよ
全快を祝う我が家の灯があかく	奈良子	ひぐらしも声を細めて聞く祝詞	知恵美
師の古稀を祝うわたしも弟子の端し	一栄	孫弟子と云わしでもらう祝賀会	沙智子
金屏風めでたい酒のほか知らず	きさ子	祝宴の末席下戸は固くなり	風の子
割ほり着で祝いの猪口を受けさせ	陽子	短冊でことほぐ友の結婚日	綾女
古稀祝賀門下総代派手に立ち	千代美	古稀と云う師に若さあるたのしみ	清子
御祝儀だからと盃もたされる	花代子	古稀祝う人ともみえぬ顔のつや	俊江
まだ呑める楽しさ古稀の友同志	若菜	布哇からも祝電が来る古稀の人	徳子
祝酒お師匠さんの座がきまり	貴洲	丹頂の鶴にも似たり古稀の人	悦子
放射能雨でも祝うている農家	たつよ	古稀祝う人とも見えぬ若さにて	ふみ子

## コーヒの味

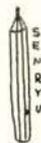
モダン

川柳 心齊橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい



(旅で作った句、吟行で作った句、日常の写生句など)  
切 七月十五日  
発表 九月号予定  
投句先 豊中市本町三丁目二〇一 戸田 古方



慈愛をたゞえ終始不変の師情に接する人をしてこの師あつてこそその感を深くせざるを得ない。二十世紀の今日にしては実に国宝的存在だ。義は師弟情は父子の川雑社の人たち自重されよ、人生七十古来稀なり、先生御夫妻の弥栄を切望して筆をおきます。

### 年をとらぬ人

福田妄夢

漢のお宅へはじめてお伺いして先生にお目にかゝつてからもう十五年、御津八幡の会場での先生。松坂クラブで手をとる様に指導されていた先生。吉野の蛙飛び神事にお供したときの先生。みんな十年以上の昔である。そしてこの間久し振りにお宅へおじやまして、しみんくといろいろなお話を伺つていて、大変ふしぎに思つたことがある。それは先生が一向に年をとらないことである。発表される句と同様に若さにあふれておられる先生。自分がまだ独身の昔にかえつた様な錯覚を感じ乍らおいとしましたのである。

### 私達の恩師

宮田不二

在阪中、特に警報下に路郎先生の教導を賜りました当時の小生は香林さんの川雑淀川支部句会。松阪俱樂部。それに川雑本社句会と

殆んど無欠席で勉勵させて頂きました。先生並に諸先輩とゲートル姿での吟行西田卿楽さんの解説で葉草と含らるる野生植物を訪ねて山中深く踏み入り何代目かの殿様の東屋での句会。狐の面を集められて居た殿様が矢立を御使用になられて居たのも印象的でした。又お酒供養へも古方さんと共にその末席をけがさせて頂きました。竹久夢二多かくのモデルだ。たと云う女性の席で先生と酒を楽しんだこともあつたかに憶えて居ります。もうあれから十二、三年先生に御無沙汰致して居りますがいつも川雑誌上で先生の吐息を身近に感じて居りますので一寸とも離れて居るような気が致しません大阪で先生とは金魚の糞の存在を忝つした頃が今更感銘にたえません。

### 想い出

石川侃流洞

一月二十三日、八年振り路郎先生を迎えての川柳大会実現。俺の勤務の日に次々とけしからんと苦情を持ち込む者。めつたに休めることもないのに、いゝ日に太宰ときめてくれたとほめる者。いやはや事務局はテンテコ舞い。

八年経つた今日、先生ほどの位老いられたかなというのが一致した前評定。

ところが案に相違してちつとも変らない。むしろ若い様な気がしたのには驚いた。《皆んな一致した観察》先生の兼題選には必ず「天」と物凄く張り切り方だったが、助講師という名の幹事役のような世話役のようなものを当局から頂戴して、投句はまかりならぬで全く悲観。

そこで大宴後の楽しみを計画。半休氏、かうたる氏、井蛙氏等リレー式で何やらボソボソ。会場の相談である。夕食のテーブルを囲んで間もなく半休氏立つて先生を御案内、繞いてブレイキ役とかの文蝶氏の席があく。計画成功、川柳荘なる赤とん坊氏経営の料亭にいるとの電話で、オットリ刀で馳せ参じると、文蝶氏の姿が見えない。どこかで飲んでるだろうと先生至極あつさり。

### 大阪は親の家

三嶋美笑

恩師と云うものはなんとも云えない味のある人間のような深い情があつていゝものである。路郎先生にはとくにその点強く

感じるところが多い、私は先生のことを親爺だと思つています。大阪へ行った時も親の所へ行ったような気持ちでわがまを云つて帰ります。道楽息子ほど可愛いとかいって、先生の温かい心を何時も忘れたことはありません。私も先生に親孝行をしたいと思つて居りますが、まだまだ御世話になる方が多いようである。

### 深いえにし

八木摩太郎

私達の恩師！ 麻生先生が、最近私のところへ御越し下さつたのは、生憎私も徳子も不在の時だった。

私の年頃の娘に、今時家柄がどうのこうのとそんな事を云うていたら結婚なんか出来ないよ。何時でもワシのとこへ云うておいで、摩太郎の頭を何時でも押えたる。昔は長女を妻にする事がムツカシかったが、それでもワシは河盛芦村の長女の蔑乃をもらつたのだからと蔑乃先生との新婚当分のくさり話を話された。今時の子供は、さっぱり歩かんよ。歩くよと云うことは大事なことだよ。私は明治三十八年に大阪から浜寺まで兄貴と一緒に、捕虜を見に行つて、帰えりの汽車賃が五厘足らんので、大阪まで歩くことにし、乗れなかつた。半端の金で西瓜を買つて、兄貴と半端の顔で、西瓜をかたがて歩いたよ。その足が役に立つて三重県へ疎開するとき、車に家具や本を乗せ警報下を歩いたんだと

ウロコ印 武田薬品

# 体力をつくる

強力…総合ビタミン剤

## 強カパンピタン

錠 (30錠・100錠) ほかにミネラル入M

大阪市道修町 武田薬品

の話。聞いている娘の方が、日本全国麻生先生と云えば、山越え谷越え、遙々逢いに来る人の多い、柳壇の大家が、こうも自分の前で、気軽ににお目にかゝつて、昔話に、しかも弟の就職の事で、来て下さつて、父も母も留守に、こんな先生ならこそ門下生が、慕うんだと話を聞きながら思つたこと。私は留守中の出来事を娘から聞いて、今は亡き、柳路氏が先生から聞いたときに、内蒙古の熱河から撫順まで、初めての飛行機で飛んで来た劇的のシーンや、その当時の松代さん等の事を思い浮かべて、目があつくなつた。

思えば思う程、路郎先生、蔑乃先生と、私のつながりは、深い縁にしてはあまるまいか。

# 部隊 柳川 ハワイ



舟 曉 · 起 夢 快 · 麗 花 魔  
Z Y X · 海 北 · 風 旋

## 一浪と山芋

### 古川 魔花麗

「日本に帰ったら君達には手紙の一本も書かないぞ」と云い置いて、日本に帰って行った一浪老であつた。あれからもう五六年も経過したが、今に一本の手紙も来ない。正に言行一致である。風の便りに聞けば、郷里新潟の田舎で健在であるらしい。

こちらに居た時には鳳梨会社に

勤め、仕事の合間に鳳梨畑の空地を利用して、夕顔や山芋を作つて居た。私は山芋が大好物でロハ組の最上の顧客であつたが、一浪老も私に芋を呉れるのが一番好きじゃあつた。

日本の自然生の種類で、自然生とつくね芋の合の子見たいな芋で直経五六寸、長さ四尺位の大きなものが出来る。芋は非常に折れ易いので、掘出すのが並大抵の苦勞ではないらしく、時には一本掘るのに三十分、四十分とかゝるもの

珍らしくない。私はそう云つた大きなものより、小さいものを欲しがるので、よく一浪老に文句を云われた。彼はその大きな奴を自慢したいのだが、私は反対に小さいものを所望した。それは古い芋はアタが強く、若い芋にはそのアタが全く無いからであつた。

彼が私に呉れる芋は目方にして百斤あまりあるので、私一家では何ヶ月掛つても食べ切れない。それで向う三軒両隣から知人の家を配り歩いて大いに感謝されたものである。人の午夢で決事と云つた形であつた。

山の芋を食すると非常に精力がつくと云われて居るが、その真偽の程は私には分らない。が然し私は掘り立ての若い芋をおろし金にかけ、だしを吟味してホーレン草のしたしなどにぶつけて一杯飲むのは特に美味しい。

また東北地方では盛んにやつて居るらしいが、トロロ汁と云うものがある。私は東北人でないので本當の作り方は知らないが、味噌汁の中にすつた芋を入れて暫くおき芋が温まつた頃に箸でかき混ぜて食べるが田舎くさくて仲々面白い。こうして色々と芋のことを思つて居ると一浪老のことが次から次へと想出せる。今頃は日本の自然生を盛んにやつて芋の効用を説いて居るかも知れない。

一浪と芋、何だか妙な取り合せだが私には芋も一浪も終生忘れることの出来ないつかしい想出である。折角一浪の健在を祈る。

## 僕達の結婚式

### 築山 快夢起

現在ハワイの日系人間に行われている結婚式は、既に二世三世の時代でもあり、凡てが米人並で仲々派手に定法通りにやつて居るけれど、僕達の結婚當時は何と云つても彼は半世紀前ではあるし、型も順序も好い加減なものだつた。

今では当人同志の婚約リングから始まって、芽出度い披露宴まで大体定められた方式によつて取進められて居るが、あの時代は何事も和洋混交で、僕はリバー街の美以教会でN牧師によつて司られたのだが、牧師さんも其方は余り解つて居なかつたし、此方も勝手不案内のまゝ、「万事お願します」で任せただけだから、今から考えて見ると滑稽千万なものだつた。

愈々挙式となると、誰の指金か知らぬが、花嫁が二人の少女に花籠を持たせたのを先導に、父親と共に中央通路をマーチに合せてやつて来る。花婿さんの僕は左側の通路を燕尾服姿で媒酌人のI氏と共に聖壇へ向けて進んだ。

「二つのもの一体となる、神の合せ給うもの之を離すべからず」と云つた儼かな誓約を夢うつゝの様子に聞き、リングの式が済んで聖壇を後にする段になると、普通は会衆起立の中を新郎新婦共に腕を擁して式場を退出するのだが、僕の場合は如何したのか、前方に居たI夫人が僕に「早く出なさい、早く出なさい」と急ぎ立てたので僕は其儘花嫁の後へ残し、早足で会堂入口まで来てしまつた。

可哀想に花嫁御寮は誰に導かれてでもなく、一人ぼつちで入口まで運歩を運んで来ると云つた工合で、此辺の調子の悪かつたこと、今考えても冷汗もので、よく當時の思出話の一つに出たものである

## 又アヌ、パリ

### トネル開通式

#### 市岡 曉舟

ヌアヌパリと云えば布鞋を知る程の人で直ちに頭に浮ぶのは、昔カメハメハ大王がオアフ島へ押寄せて天下分け目の大戦に乗り越えた、海拔千五百呎の断崖絶壁の地であります。

その奇岩巨石で埋め尽す屏風岩を切抜き、ホルルと裏オアフ一帯の交通を円滑にする一ヶ所のトネル工事を請負つたのが、二世のジェームス田中請負師だつたので、同胞として爽に痛快です。

さしもの難工事も、数百万弗の巨費と科学の粋を集めた現代式機具で起工三ヶ年後の去る五月初旬目出度く完成しました。此のトンネル開通により、軍事的は勿論、ホノルルと裏オアフを結ぶ交通のスピード化が驚す恩恵は莫大でありましょう。

抑々ヌアヌバリーの旧道は、數十年前の市郡技師長、後年度々ホノルル市長となつた故ジョン・ウイルソン氏が設計し、曲折蜿蜒一哩半に及ぶ車道でありました。

けれ共ホノルル市が膨脹し、今日の如く十五万台の自動車交通の要路としては、余りにも狭隘且頗る危険を感じる為、窮余の策としてトンネル開通案を政府で可決して入札に附した結果、前記田中氏が落札して工事を請負いました。工事は無事故で円滑に進捗完成し榮冠は燦として若き二世の頭上に輝いたのであります。

回顧しますと、去る開通式の日布哇王朝の古式に則り馬上悠然先頭を切るヒーロー田中の堂々たる風貌が、知事その他のお歴々を圧するかに感じられたのは、私だけではなかつた様です。頭張れゼームス・フレイフレイ田中。トンネル開通式を見て感じた儘。

アメリカと

ユーモア川柳

白砂旋風

世界の移民地でありますアメリカ

カは、歴史と伝統と文化を全く異にした、世界各人種が雑居してあります。従つて今日のアメリカは、此等全世界を網羅する各人種が各々其の祖国の文化と民族的特徴を持ち寄つて、アメリカ民主主義の向上と其の完成に努力と前進を続けて居ります。

嬉しくなれば泣き、悲しくなれば又泣き、勝つて泣き敗れば又泣き、何んでも泣くことの好きな悲劇好みの日本人に其の反面笑いの文学川柳が喜劇の役を演じて、此のジメジメした空気を一掃して呉れますことは何んといふ皮肉なことでありましょうか又何んといふ愉快なことでありましょうか。加うるに又何んと良くもビツタリと自然的に調和のとれて居ることでありましょうか其れは日本人の持つ民族的特徴であり、天才である調和性のためであり、此の調和こそあらゆる日本文化のシンボルであります。

欧米人も日本人二世三世も同じ肉食を主とする人々の特質としまして、先ず活動的であり、社交的であり、積極的であり、楽観的であり、其れに快活で笑うことが大変好きであります。そこに可笑しみの文学川柳がその可笑しみの面において、彼等と気脈を相通じ意気投合する共通性を持つことになれば、可笑しみの文学川柳がやがて世界から愛される日の来ることが約束されて居るのであります。

風竹氏を想う

前山 北海

麻生路郎先生の「新川柳講座」に身辺雑詠の例句として紹介の宋朝は近衛首相に似た活字

八ボの田さかさ見落す給料日  
三人の知慧で読めない伏せて置け  
インテルよヨコシ浮かぬが生きる道  
けふの歴史を書いてケムに帰る  
の五句は、戦前のホノルル日布時事(戦時中布哇タイムスと改題)社副支配人兼広告部長、風竹、古川茂生氏の作品、活字に人一倍親しみを感ずる氏ならではの句、

煮かへされ活字七生御奉公  
も又巧みな誇張法で詠んである。  
一九三二年九月十日、ハワイ初めての川柳会、ウイロー社が風竹氏を生みの親として産声を挙げ、円為替暴落の時事吟を詠んだ。  
何々坊の狂句調は、芥子粒の清水米花氏、更に麻生路郎先生の指導で脱却、個性の句風に変じ、吟社は川柳雑誌の支部となつた。  
日布時事の記者時代、風竹氏の句集「川柳忠臣蔵」の序文を書き氏の生んだハワイ島我蛙田吟社を

氏の病後指導する柳縁が続き、戦後氏が出版編集を手伝われる頃、私は渡日した。在阪中復活句会の寄せ書を送つてくれた氏は、一九四八年四月二十三日長逝された。昨夏帰布、句会で風竹氏のウイットに富む座談、時に真面目に語る搜談も聞かれず、淋しく感じるハワイ新聞界の逸材、風竹氏は明晰な頭脳で縦横に企画し、タイムス戦前の幾多事業を推進した。随筆、野球通、日本語放送の開拓流麗な英文、明解な翻訳でも知られた。戦時タイムスの編集者中、氏から翻訳に懇切な注意を受けたのも、私の忘れ得ぬ思い出となつたウイロー社の創立二十五周年記念祝賀を控へ、生みの親風竹氏の遺志を生かさねばならぬと想う。

不朽洞會員寸描

x y z 生

古川薨花麗氏 ホノルル屈指の趣味人、切手蒐集は戦前から有名戦後新聞検閲官で渡日、帰布後放送に活躍、今はキング醬油の販売に敏腕を發揮、ユニークな句風は社中の異彩、選句に一見識を持つ  
内藤草一郎氏 創立以来の同人戦後の大患で聴覚を失ひ、専ら川柳に打ち込み、作句精進は随一、回想の花柳吟と人情諷詠の草一郎調で好評、句会出席を唯一の愉しみとし、席上筆談で悦に入っている  
三輪晚翠氏 趣味から本業に発

展の洋蘭園を愛息と経営、米大陸へも輸出、戦後丹精の逸品を毎年日本の洋蘭展へ出品、ハワイ洋蘭の声価を高めている。ウイロー社創立以来の同人、柳俳両刀使い、  
築山快夢起氏 ウイロー社の名幹事、ホノルル日系基督教会連盟の書記、円満な人格者で世話人として適役、一昨年夫人と日本へ旧婚旅行、夫婦陸し短歌も作り吟行もする。人生達観の句を詠む。  
市岡曉丹氏 K G M B 放送局日語部のアナ、ラジオでは廿の扉と世論の響、テレビでは芸能を担任して好評を博し、今秋のウイロー社二十五周年記念祝賀大会の企画を練っている。今は川柳一本槍。  
白砂旋風氏 フェア靴店主、接客の閑にも店の一角を覗んで作句句はヴラエテイに富み、観察は奇抜、社会問題に一見識あり、それが雑詠の旋風調となる。原稿も半寸角の大字で書く旋風式である。

羽佐間柳葉氏 ウイロー社の古参同人、青年時代から川柳、俳句短歌、新体詩と何でも御座れの文芸人、新聞の新年号文芸では常に好成績で入選、最近の句には悟りきつた人生観を詠む傾向がある。  
前山北海氏 戦後新聞検閲官で渡日、再渡日で七年滞留、一年余り全国川柳行脚をして昨夏帰布、旅行案内社で米大陸及び日本の観光旅行の世話をしておる。日本柳壇を語つては柳人の奮起を促す。(写真はホノルルのワイキキ海浜)



# 大正時代の 記憶から

梶元 紋太

私が、初めて川柳界を知ったのは、徴兵検査をうけて不合格ときまつた年だった。兵隊に行かずともよいなら、早速、生業につかねばならぬ境遇だったので、大阪で覚えて来た菓子製造販売を始めて

ささやかな生活を持ったのである。それと同時に、近所の知合に教えられて、同町内で開かれていた神戸川柳ツバメ会に出席した。

私は明治二十三年生れだから、徴兵検査は四十三年に受けたことになる。柳誌「ツバメ」を見るとハッキリするのだが、記憶では曖昧なので、覚え易く大正元年と今まで云っている。とにかくその頃なので、明治三十八年、川柳久良俊社、柳樽川柳会が設立されて現在の川柳界の嚆矢となつた年からもう七、八年経っている頃だった。

東京方面では、久良俊、剣花坊の川柳中興の祖争いが華やかな時代だった。横浜の安藤幻怪坊の「新川柳」が「短詩」に改題して川柳界とは離れたものになりかけ

ていた。久良俊社の「五月鯉」はもう出ていなかったと思う。岐阜の「青柳」も終ろうとしていた。名古屋の「鯉鉢」は盛大に発行されていた。

近藤節坊が「寸句」を唱えたことに、記憶がないがもう済んだあつたようだ。剣花坊の「川柳」も記憶せぬが「大正川柳」は鮮やかに私の眼に映つた。

大阪方面では、小島六厘坊はもう故人になつていた。東京から帰つたと云う藤村青明が神戸にいてこれも初めてツバメ句会へ顔を出して歓迎されたその日の会が、私の初めての本会だったことをあとで聞いた。

青明の「短詩」が発行した「わだち」もあとで見せて貰つてその新しい傾向と、今眼の前にある青明の作品との変化の大きさによく質問したものだったが私に解らせたくないままに亡くなつた。

京都柳界は、後藤千枝、藤本蘭華、両氏、楽山、六好其他の時代だったと思う。木田溪花坊氏の京都時

代は私は知らない。知つたのは大阪であつた。神戸は「ツバメ」一誌になつていて。前田青岸、中村一山、田中白丈等が中心であつた。下関の「ヌエ」も私の知る以前であつた。そんなひよつとこの私に、大正二年「番傘」が発行された。

私の知つた頃の柳界は、柳多留尊重派と新興川柳とで、相言荒れたあとらしくあつた。尤も止んだ訳ではなく、続けられていたのであるが、私の周囲、関西柳界は大體傾向を同じくしていた時代でなかつたかと思う。私は「ツバメ」と「番傘」とで勉強した。それで済んでいたのでまず平穩だったのだからと思う。

その頃、全国柳界を牛耳つていたのは何と云つても東京柳界で、それも久良俊、剣花坊が若かりし頃であつたからでもあり、地方柳界がひよわかつたからでもある。大阪柳界もそのひよわな時であり、私はは恰も誕生早々のよう

な気がした。そんな中で、前の時代を知らぬ私は至極平和に育つた。

「ツバメ」の時分に、先輩連中がよく大阪にリードされるな、神戸は神戸で独立するのだと云うていたのを覚えている。それは安りに選者に頼んだり、御光臨を乞うたりせぬように仕様と云うことらしかつた。私にはそれがよく分らなかつたが、人をたのまず自立するという先輩等を頼もしく思つた。

神戸だけで足りず私は大阪の旬会へよく通つた。「番傘」一本の時代で、今度亡くなつた南北氏の出現で、目立つて隆盛になり、楽しい旬会であつた。そのうち溪花坊氏の「絵日傘」が発行され、小田夢路氏等の何とかいう後に番傘に合併したのが出るようになり、賑やかになつたが、大體似たような旬風であつた。そこへ、日車、半文銭、路郎、柳珍重、松窓その他の人で「土団子」だの「雪」だのが出て、その新しい旬風を示されたのには面くらつたものである。

やがてその時代も済んで、大正の終り頃に現在の「川柳雑誌」が出た。それまでの関西柳界、いや全国柳界は、社会進出運動などを唱えていたけれど、月刊は殆んど守られていないし、小型の誌型が多く、趣味的な気分が覆われているものだが、川柳出現を期として面目一新、教段の飛躍を遂げた。

川柳の功罪を論らうと思へば出来るが、我々の受けた恩恵の大きさは率直にこれを認めなければならぬ。「雪」が出なくなつて間なく「川柳雑誌」が出たので、川柳の将来は「雪」の如くにあることを予想していたが、作品の方は

それほど飛躍しなかつた。然し、川柳に対する態度に就ては、常に柳界をリードした。柳界は驕然とこれに従うたと云うべきである。

(走り書ではあるが、路郎氏の古稀祝賀に際して、昔を憶うて書いた。私も「ふあうすと」に関係しているが、川柳、番傘というモデルケースを身近かに持つて、常によき示教を得ていることを感謝している。五月二十日)

(ふあうすと川柳社・主幹)

人 法 療 医

## 明和病院

西宮市上鳴尾町(阪神電鉄鳴尾駅北五分)  
電話(西宮)5910・5911・3934

内科 外科 整形外科 産科 婦人科  
小児科 耳鼻咽喉科 眼科  
皮膚泌尿器科 放射線科 歯科

各種保険取扱  
優生保護法指定医  
兵庫県公立学校職員結核検診  
指定医  
入院随時 夜間休日分晩手術に応じます



# 興起めでたし

## 前田 伍健

昔は人生五十年から割り出したのか男女七才にして席を何んとか十五六才で一人前の元服とか芭蕉その他が四十代で既に翁と称せられるなど今の時世で考えるとおかしい程である。今は六、七、八十才は青年期か壮年期で九十才から

## ・小西無鬼

私が常に人に語る言葉の一つに「親は寝て居てもいいから長生きして居て貰い度いと思う」と何回か人に語った私の気持である。養子の私は両親として四人に仕えた訳だが養父母は昭和二十年前後に薨い、実母も同じ様な頃に見送られた。路郎先生御夫妻は吾々の親であり、川雉の柱である。だから何としても長生きして居て頂きたい。

幸に七月は古稀を迎えられて益々御元気に川柳の為全国各地に出向かれる。恐らく米寿も亦また、く間に来てお祝する楽しい日が目に浮ぶ様だ。それ迄に我が籐山支部も、大発展を遂げ優秀作家が雲の如く現れるであろう事を想うと何だかロケットで月世界へ旅行でもする様な気持になつて来る。

## ・酒井ひか平

デカンショの町丹波籐山は人口二万に足りない小さな城下町である。

町のまん中のお城、その濠端や桜並木など爽にロマンチックで、代名詞鬼のさき山、なんて凡そ縁の遠い、云わば女性的な風景を誇る公園都市である。懐古派には、武者屋敷のれんじ窓や、仲間折助の小部屋付長屋門など、ステージでごまかしたイミテーションと違ふ本物なのである。

滴る様な緑の樹々、柔らかな水の色など、青春「籐山」の情緒も格別、都心を放れて、一日、二人切りの小旅行を楽しんで頂くに実に恰好の町なのである。宇野浩二作「春色梅の段」なんて云つても新しい人には判らないかも知れないが、兎に角、小説の背景になりそうな数々の風景に恵まれた明

間を永く務めている。かつて南画の師であり友でもあった手島石泉さんは九十六才まで生きた、これ等の人々はみな意気壯であり心又潤達であつた。

麻生路郎先生の如きはこれ等の人々の通り正に青壮年で古来稀なりの古稀でなく私は「興起」の一段階だと思つている従つて柳界の為め社会の為め一層光輝の大灯台としてこの興起であり光輝のお祝いの町だと私は保証して置く、此の町に小学校中学校と高等学校が二つ、大学が一つ有ると云えば一寸教育部「籐山」と看板をぬり換えてもよきそうに思われる。

デカンショの町籐山は昔、小京都と呼ばれた事もあるそうで、その故か、大芋川の清流で産湯をつかつた女の子は、誰が誰と云えない粒揃いの美人が多い。レディファストの当今此の事を強調しておきたい。勿論此んなかんきょうに恵まれた土地の川柳人は幸福である。

「さき山の無鬼」さんと云えば誰だつては、えむ、それ程ユーモアたつぷり人徳圓滿な指導者なのである。副将ひか平君は好人物で世話焼に重宝、異色、無鬼氏はアマボクシングの猛者南米生活の経験もあり視野も広い。白猫児君は

はめでたく湧き上つて来る百年もそれ以上も是非御長命を祈つてやまない私が拙ずい絵をかく関係から世間普通古稀の祝いなどによく頼まれてかくのは七十の七に因んで七福神とか七番即ち梅百合水仙など七つのもめでたい花やら或は榮貴万年と芙蓉と桂花をかき又不老長春の松とバラの花などがある。昔からの言葉に柳に雪折れなしとあるが川柳の柳に風雪幾十年の先

現在青年活動のリーダー雄弁は県下有数である。文平君は野人。情熱的な作家であり。永衝君は中央柳壇への全權大使。初老の枝葉みのる両氏は第二の薺花候補であり、小菊初穂文子よし子富士子さん等の婦人作家はすでに金泥集の常連として佳句を発表されて居る。凡志君の軽味は逸品、越山一雨一風喜天君等の若手は将来性のある作家でピチ／＼とした若さが頼母しい。川柳の鬼、家沢薺花氏は昨今野に下つて居られるが再起を期され、田代尋四氏はちよう然と色っぽい句を作句されて居る。

生はよく耐へ且つ進み頭髪の白きを見る時、私は目頭が熱くなる思いがする今日七十才を迎えられし尊さに自ら頭が下がる「よくぞ、やられ進まれた」先生いつまでも御元気で柳界の記録を作る御長命を願いたい興起、興起、興起、祝福、福祿寿とめでたい字に心を打ち込んで先生の興起万歳を三唱する。

(本社・洞友)

## ・前川左文字

「さき山の無鬼」さんと云えば誰だつては、えむ、それ程ユーモアたつぷり人徳圓滿な指導者なのである。副将ひか平君は好人物で世話焼に重宝、異色、無鬼氏はアマボクシングの猛者南米生活の経験もあり視野も広い。白猫児君は

## ・前川越山

小西無鬼さんから川雉の事そして麻生路郎先生の今日までの並々ならぬ苦勞、川柳に生き川柳を今日に至らしめられた業績を承わり涙の出る程感謝した。籐山の春の大会で初めて路郎霞乃両大先生へ

## ・西田初穂

右稀とは見えぬ斗志と川柳に情熱をかけた師の一門下生としてあります。川柳のもつ味、彷彿としてわく心のゆたかさはえがたい尊いものと思つています。いそがしさに事よせてはと少しでも精進するようつとめねばと思つています。最後にます、両先生御健康にて川雉の栄えます事を祈り致します。



# わるき帖から

鬼才路郎の句風

## 堀口塊人

その人すら忘れていたような古い作品を、ひそかにひかえておいて、あなたにはこんな句がありますよ、と、びくりさせて喜ぶくせがある。わるき帖と名付けている。見知らぬ人はなつかしく、知る人には、さらにしたしみを増す。このような私のいたずらメモの中に、路郎先生はどんな姿で現われてくるか。さてこれからのこと。

気短かに髭を取って若旦那銀髪、猫背、しわのある童顔、近來ますます風格をましてきたが、如何に先生なればとて、はじめから七十であつたわけではない。和服姿の若旦那の頃もあつた筈、ただ、気短かの、ことばにその人が

出ているのがおもしろい。大正二年の作、今の人々に、しつけ、がわかちであるうか。

立話宿替をした事も言ひ先生の作としてはあまりに平淡なようであるが、立話の外がわやちを写したのでなく、話の中味のあらわして明暗をつけた、きめのこまかいところが、わかりますかお立会。

千日を後戻りする懐手

いまの歌舞伎座のところに楽天地と称する明治趣味ゆたかなる建物があつて、食満南北つくるところの、連鎖劇、即ち活動写真を応用したる新派劇はなやかなりし頃の千日前である。演ずるものは山田九州男、大井新太郎、栗島狭衣な

ど。これはその頃浅井五葉先生激賞の作品であるが、絵看板をちらとながめて後戻りする若き日の作者はいささか酔うていたのかもしれない。

思ひ切らせた筈が心中

十四字調の鋭どさに鬼才路郎のある一面が出てくる。だが、どうして、どのように、納得さしたのかしらないが、世間体や義理の重圧に対する抵抗が、たつたこれだけの中に現われている。近頃こんな句風は少ない。大正三年の作。

飴売は何処の子供か抱き

起し

その頃まだ紙芝居はなかつた。飴細工はあつた。そこから、白飴や赤飴のはかり売や朝鮮飴のちぎり売があつた。もちろんお客様は子供である。市井の風物と人情のある句、お人好し路郎が出てくる。

私生児は母、縹緞と父の才

いよいよ世でていよいよ奇である。きりよう、の漢字があるかどうか、よしありとしても読めるかどうか。私生児の性格をチラとみせてその父母のロマンスにまでさかのぼつた十七字の力はおどろくべきものである。四十五年後の今日と雖も通用する作品である。

一番の渡しを渡る豆絞

山崎と水無瀬宮との中間の淀川堤から出る渡し船は今でもやうてい。申州で一っぺん乗りかえて、再び舟にのらねばならぬ。この中州は谷崎潤一郎の小説「芦刈」によって有名であるが、サイクリング流行の今日、たづねる人もあるまい。むかいは橋本である。板の小橋を渡れば遊女町のまん中に出る。売春禁止法によって最近はどうにも変りつつあるかしらないが、以前は、この渡船でわたつて一夜の夢をむすんだ若い衆が、ふたたび船の中の人となり、土堤の遊女ときぬぎぬの別れをおしむありさまは、珍らしくもなかつた。

その時の頬冠りの豆絞を詠んだものかどうかはしらない。大阪松島遊廊も川に面した家があつたから、そこらあたりの早朝の風景であつたかもしれない。どちらにしても路郎先生が若かつたことだけはたしかである。

履歴書に楷書を書くも久

し振り

大正四年の作、この頃でも、久しぶりに毛筆をもってこまる、と言ふ句はさらにみられるが、この句の作られた頃は毛筆が当然とされていた時代である。否、万年ペンがあつたかどうか頗るあやしい。斯うした理解の下に、楷

ゼネラル・モーターズ・コーポレーション  
ポンテアック・ボツクスホール直輸入販売店

# 尼崎自動車工業株式会社

尼崎市昭和通り二丁目四十八番  
電話大阪 代表 3308

書、の意味をさとらねばならぬ。粉煙草にいゝ智慧の出る筈もなし

たばこと言えば、きざみ、のこと、きざみと言へば、刻み煙草のこと、さうきまつていた。だから特に、巻煙草、と言うハイカラを意味する言葉があつた。たばこ言へば、シガレットのこと、きざみと言へば、きつねうどんのあげのきざみのこと、先生七十年の生涯には、ちよつとした市井の言葉にもこんな変遷がある。刻み煙草ものこりすくなくれば粉ばかりになる。火付もわるい煙管もつまる。何だかわびしい氣持がする。

### 抱車夫先の女房が逢ひに来る

今の自家用自動車運転手、昔は人力俵が多かつた。その俵夫には極道者も少くなかつた。捨てたのか、別れたのか、離れたのか、そのいきさつは、わからないが、逢ひに来たのは、未練か、金か。複雑な人生内容は、泉鏡花に書いてもらつたらはつきりするかもしれない。

これ等はいずれも大正初期の作品であるが、どうしても明治の匂いがする。しかも、それぞれの作品にじっくりした情緒が、感じられるのは、単に私のよき時代への感傷のみであらうか。それとも路郎先生の人情味がこもつているからであらうか。

古稀をむかへられた先生の川柳生活は昨日や今日にはじまつたものではない。その事が、これ等の作品によつていささかでもうかが

## 我がお路いちゃん

— 画のうまい人 —

### 西島 ○ 丸

どこを、どうして、どう思つたのか、忘れたが、私は、路郎サンを、私より、年上と思ひ込でいたせい、か、路郎古稀祝賀号云々という、葉書を貰つた瞬間、ああ、もう路郎サンも七十七になつたんだなあ、と、慶びの念にうたれた。

次の瞬間、だが、待てよ、古稀といふのは、七十だなど、錯覚が、元へ戻つたトタン、あ、な、あ、んだ、麻生サンは、僕より若いんだなあ、と、今度は、浦山しきさえなつた。

久しく逢わないが、とにかく、路郎サンの初対面の印象は、校長サンのように、六ヶしい顔をしていて、おつかない人だなと思つた。ところが、だんだんお交際を願つていこううちに、江戸子同様、馬鹿に、ものわかりがよく、サバけていて、察しのいい、苦労の積つた人だなあ、と、考えるようになった。 本当は苦しいんだらう、其の苦

えるならば筆者望外のよるこびである。

(昭和二十二年五月十九日出版の東中にて (さつき川柳社・主幹)

難の中に、平気で、雑誌を続けていゝ。男の意地も、ここまでくれば、たいしたものだ。 東京では、背中に文字が入つた柳誌が出ない。私は、悲しい、情けないと思つて、独りで泣いていゝ。

それは、言へば、いくらでも理窟がある。しかし、男は、骨が

### ある日の恩師 — あれこれ

#### 尼緑之助

先生との初対面は昭和八年の秋、お宅に伺ひし元氣な御夫妻からあたたかい御歓待に預つた事を思い出す。

又初めて、ろ、屋へお立ち寄り願つたのは今市町にいた頃

戦後食糧事情最悪の頃、現在

無ければ、いけない。路郎サンは成る程、顔も骨張つてゐる。しかし、其の「骨」が、仕事全体に通つてゐる。其が、私には、浦山してくたまらない。男が一つ仕事を、はじめた以上、その骨が大事だ。是は何人も、仰ぎ、尊み、真似ねばならぬ事である。

路郎サンは、あれで、なかなか、画がうまい、私にも、描いてくれたので、額に入れて書斎に飾り、珍重していたが、焼いてしまつた。その画を見ても、その内心の洒落た性格がすつきりと出ていゝ。

路郎サンは、筋が硬いから、或は、知らぬものは、一寸、判らぬかも知れぬが。どうしてスイも甘

いも判りぬいてゐる、おじさんだ、だが、イヤなもの、イヤ、という人は、なかなかない。私は、人が何と言つても、路郎サンは、

#### ゼスチユア合戦

#### 黒川 紫 香

○ 恐縮したこと

先妻が亡くなつた日、まだ何

好きだな。やはり、強情なトコが似てゐるかも知れぬ。 ところで、そろばんを扱つて、逆さにしたとして、今まで、路郎サンの、川柳に尽した功績に対して、誰が、何んという事が出来る。一寸、真似手はあるまい。仕事というものは、あげつらいは出来る、しかし、果して、自分がその通りやつてやれるかと言つと、そう問屋が、やすくおろすまい。 私は、あくまで、路郎サンに心酔する。路郎サン、路郎サンと心易く、よくない事も言つていゝが、なにしろ、手を出して、なぐるうにも、遠い所にいゝので、そこはそれ、安心して悪口も言える。

お互に、百までも生きましようや、お路いちゃん万歳！ (冊二、四、冊)

処にも、通知をしていない、てんやわんやの最中に、路郎先生の見舞を受け、非常に恐縮感激しました。 ○ 楽しかつたこと 北支部の頃、同好の者と宝塚で先生を囲んで、一泊を楽しんだ時、興重なるに従ひゼスチユア合戦がはじまり、其の時の先生の「ゼスチユア」が優秀且つ見事であつた事が忘れられませぬ。

## ある日の恩師

## 河豚の毒素

## 須崎豆秋

二十年前前のはなしですが、千日前で友達と河豚を食べていたところが急に胸が悪くなり出し「やられた」と直感したので、なにがなんでも路郎先生へだけは今生のお話を置いて置こうと思立ち、木枯の吹きすさぶ夜の十三間道路を駆けつまるびつへ道を吐きながら玉出のお宅へかけつけましたところ、先生が「なんじやい豆秋青い顔して」と聞かれますので、実はかくかく、しかじかと申し上げると、笑いながら「一杯やれ癒るわ」と言われるもんですから、末期の水のつもりで呑んだんですが、何の変哲もなく命に別条ありませんでした。

しかしそれ以来河豚の毒素で頭が少し変になったと見え、ちよいちよい無作法なことを仕出かしては先生へ御迷惑をおかけしていることは誠に汗顔の至りです。

それにしても昨年の暮れに私が不朽洞へ復帰の際にお伺いした折には先生が「菊池寛の父帰るッじゃなくでッ子帰るッじゃからのう……」とおっしゃって迎ええ下さった寛仁なるお言葉には、

頭目が熱うなるなどという形容を通り越して頭から足の爪先までジンといたしました。もう河豚はコリコリです。

## 洛北の海老

## 山川阿茶

二三年前の秋南区医師会のお茶の会が主催で洛北へ行った事があって勿論先生も同行された。三千年の前の茶屋でお弁当を喰べたが秋晴の景色はよし紅葉は美しいし空気はいいし相当の距離車でゆられて来たので空腹だし三拍子も四拍子もそろっていた確か私が塩焼にして持って行った海老がとてもお気に入りだった。あなたで少し残ったのを霞乃先生と梨里さんに喰べさすのだと持った帰られた。その後何かの折にはあの海老おいしかったなアとおっしゃる。海老は洛北に限るよってな御言葉が出るようにさえ思う。

向が強くなったのも師の影響か。酒の座で師の柳論を聞きながら「アソ」と、半畳を入れれば、ギロリと眼鏡の奥を光らせニンマリ笑うあの目がとても好きだ。あの瘦せた体で、学生角力の選手だったとか、恐らく若の花のような、手取であつたろうと思う。

私も骨皮筋衛門で子供角力を、やっていたが肥州山ではないが、起重機式に釣り出し専門だったのだらうと、想像してうれしくなる。

広島のこと、丹前にスリッパでハイヤーに乗って、民情視察と出掛け、飲み屋のおかみをうれしがらせたり。徹夜で飲み明して、翌朝迄続いて盃をかたむけている所へ、新聞社がインタビューに来た、写真を撮ると言うので、丹前をもうはだぬぎにして、ワイシャツと上衣だけで、「いい男にとつて呉れよ」。には記者も面白がって、対談が打ち解けた庶民性。NHKの録音も昨夜からのアルコーで脱線せねばいいがとハラハラしていたが、そんな心配を吹き飛ばして論旨堂々には今更のように心のかたさを知らされたもので、深夜交番から飲み屋へ、連絡

電話をさせたり、師に対するエピソードはつきない。

## 純綿の握りめし

## 浜田久米雄

戦争中のこと。たしか十八年のはじめ寒いころぼくがまだ広島にいた頃だと思ふ。路郎先生霞乃奥様とがちょうど用で広島におられる息子さんに面会に行かれる途中、打合せてはくは郷里よしなが駅から汽車に乗ることになった。これを聞いた母が先生が通られるなら弁当を差上げねばならないといつて、そのころ田舎の人だけがたべていた純綿のにぎりめしに卵焼きをどつさり作ってくれたので、持って汽車に乗った。満員列車の中でうまそうにたべておられる先生夫妻の横でぼくは制服制帽ゲートル巻きで立っていた。今から思えばまことに阿呆らしいことだが、その時分の純綿は大したものであつたように思う。十四年前の恩師の姿であつた。

昭和五年頃金沢の川柳大会で一度お目にかかったきりで、戦後北極星の階段のところにあつた川雑連絡所を訪ねたが先生と二人でお酒を呑んで初めて、お座敷よりも繩のれんの雰囲気が好きだ先生、保守党よりも進歩党の好きな先生には庶民的な生活が性に合うのかも知れない。酒のお好きな先生、近頃は霞乃夫人と差向いで杯を傾けられる先生、酒には人に負けな

い私は（三合位が関の山）先生とお酒の席が何よりも楽しみである。

## 酒談義

## 国弘半休

B「勿論ひげはあります……」先生の愛欲編に

へお父さんは川柳々々言ってるよというのがあります。

A「川柳家には毒舌型、ユーモア型探究型等あるようです」が

B「私の主観で申上げて甚だ恐縮ですが先生の場合、お若い時代が毒舌型最近では探究型に古稀という年令的ユーモアも含めて慧眼型とでも申しますか」

愛妻家と言ふよりサイノロジーと言つては、失礼でしょうか？

愛妻家と言ふよりサイノロジーと言つては、失礼でしょうか？

飲む程に酔う程に、妻を語るに、熱が入つて来る。小生も最近その傾

向が強くなったのも師の影響か

酒の座で師の柳論を聞きながら「アソ」と、半畳を入れれば、ギロリと眼鏡の奥を光らせニンマリ笑うあの目がとても好きだ。あの瘦せた体で、学生角力の選手だったとか、恐らく若の花のような、手取であつたろうと思う。

私も骨皮筋衛門で子供角力を、やっていたが肥州山ではないが、起重機式に釣り出し専門だったのだらうと、想像してうれしくなる。

広島のこと、丹前にスリッパでハイヤーに乗って、民情視察と出掛け、飲み屋のおかみをうれしがらせたり。徹夜で飲み明して、翌朝迄続いて盃をかたむけている所へ、新聞社がインタビューに来た、写真を撮ると言うので、丹前をもうはだぬぎにして、ワイシャツと上衣だけで、「いい男にとつて呉れよ」。には記者も面白がって、対談が打ち解けた庶民性。NHKの録音も昨夜からのアルコーで脱線せねばいいがとハラハラしていたが、そんな心配を吹き飛ばして論旨堂々には今更のように心のかたさを知らされたもので、深夜交番から飲み屋へ、連絡

電話をさせたり、師に対するエピソードはつきない。

昭和五年頃金沢の川柳大会で一

度お目にかかったきりで、戦後北極星の階段のところにあつた川雑連絡所を訪ねたが先生と二人でお酒を呑んで初めて、お座敷よりも繩のれんの雰囲気が好きだ先生、保守党よりも進歩党の好きな先生には庶民的な生活が性に合うのかも知れない。酒のお好きな先生、近頃は霞乃夫人と差向いで杯を傾けられる先生、酒には人に負けな

い私は（三合位が関の山）先生とお酒の席が何よりも楽しみである。

B「勿論ひげはあります……」先生の愛欲編に

へお父さんは川柳々々言ってるよというのがあります。

A「川柳家には毒舌型、ユーモア型探究型等あるようです」が

B「私の主観で申上げて甚だ恐縮ですが先生の場合、お若い時代が毒舌型最近では探究型に古稀という年令的ユーモアも含めて慧眼型とでも申しますか」

愛妻家と言ふよりサイノロジーと言つては、失礼でしょうか？

愛妻家と言ふよりサイノロジーと言つては、失礼でしょうか？

飲む程に酔う程に、妻を語るに、熱が入つて来る。小生も最近その傾

向が強くなったのも師の影響か

酒の座で師の柳論を聞きながら「アソ」と、半畳を入れれば、ギロリと眼鏡の奥を光らせニンマリ笑うあの目がとても好きだ。あの瘦せた体で、学生角力の選手だったとか、恐らく若の花のような、手取であつたろうと思う。

私も骨皮筋衛門で子供角力を、やっていたが肥州山ではないが、起重機式に釣り出し専門だったのだらうと、想像してうれしくなる。

広島のこと、丹前にスリッパでハイヤーに乗って、民情視察と出掛け、飲み屋のおかみをうれしがらせたり。徹夜で飲み明して、翌朝迄続いて盃をかたむけている所へ、新聞社がインタビューに来た、写真を撮ると言うので、丹前をもうはだぬぎにして、ワイシャツと上衣だけで、「いい男にとつて呉れよ」。には記者も面白がって、対談が打ち解けた庶民性。NHKの録音も昨夜からのアルコーで脱線せねばいいがとハラハラしていたが、そんな心配を吹き飛ばして論旨堂々には今更のように心のかたさを知らされたもので、深夜交番から飲み屋へ、連絡

電話をさせたり、師に対するエピソードはつきない。

昭和五年頃金沢の川柳大会で一

度お目にかかったきりで、戦後北極星の階段のところにあつた川雑連絡所を訪ねたが先生と二人でお酒を呑んで初めて、お座敷よりも繩のれんの雰囲気が好きだ先生、保守党よりも進歩党の好きな先生には庶民的な生活が性に合うのかも知れない。酒のお好きな先生、近頃は霞乃夫人と差向いで杯を傾けられる先生、酒には人に負けな

い私は（三合位が関の山）先生とお酒の席が何よりも楽しみである。

B「勿論ひげはあります……」先生の愛欲編に

へお父さんは川柳々々言ってるよというのがあります。

A「川柳家には毒舌型、ユーモア型探究型等あるようです」が

B「私の主観で申上げて甚だ恐縮ですが先生の場合、お若い時代が毒舌型最近では探究型に古稀という年令的ユーモアも含めて慧眼型とでも申しますか」

愛妻家と言ふよりサイノロジーと言つては、失礼でしょうか？

愛妻家と言ふよりサイノロジーと言つては、失礼でしょうか？

飲む程に酔う程に、妻を語るに、熱が入つて来る。小生も最近その傾

向が強くなったのも師の影響か

酒の座で師の柳論を聞きながら「アソ」と、半畳を入れれば、ギロリと眼鏡の奥を光らせニンマリ笑うあの目がとても好きだ。あの瘦せた体で、学生角力の選手だったとか、恐らく若の花のような、手取であつたろうと思う。

私も骨皮筋衛門で子供角力を、やっていたが肥州山ではないが、起重機式に釣り出し専門だったのだらうと、想像してうれしくなる。

広島のこと、丹前にスリッパでハイヤーに乗って、民情視察と出掛け、飲み屋のおかみをうれしがらせたり。徹夜で飲み明して、翌朝迄続いて盃をかたむけている所へ、新聞社がインタビューに来た、写真を撮ると言うので、丹前をもうはだぬぎにして、ワイシャツと上衣だけで、「いい男にとつて呉れよ」。には記者も面白がって、対談が打ち解けた庶民性。NHKの録音も昨夜からのアルコーで脱線せねばいいがとハラハラしていたが、そんな心配を吹き飛ばして論旨堂々には今更のように心のかたさを知らされたもので、深夜交番から飲み屋へ、連絡

電話をさせたり、師に対するエピソードはつきない。

昭和五年頃金沢の川柳大会で一

度お目にかかったきりで、戦後北極星の階段のところにあつた川雑連絡所を訪ねたが先生と二人でお酒を呑んで初めて、お座敷よりも繩のれんの雰囲気が好きだ先生、保守党よりも進歩党の好きな先生には庶民的な生活が性に合うのかも知れない。酒のお好きな先生、近頃は霞乃夫人と差向いで杯を傾けられる先生、酒には人に負けな

い私は（三合位が関の山）先生とお酒の席が何よりも楽しみである。

B「勿論ひげはあります……」先生の愛欲編に

へお父さんは川柳々々言ってるよというのがあります。

- A 「お酒のことで何かひとつ」  
 B 「かねて献杯されない事は承知していましたがこの程酒豪の域を越えて酒仙に列せられたとは恐縮しました……という事は」
- ① 先ず酒屋を儲けさすような酒の飲み方をしない  
 ② 二次会は民情視察と出かける酒に酔っている方が頭がさえる  
 ③
- て記憶力が旺盛  
 ④ ユーモアが飛び出る  
 ⑤ 交番所が恐縮する
- A 「最近先生にお会いになりまして事実」  
 B 「今年の一二月二十二日から四日間広島鉄道管理局招聘の川柳大会に西下の際広島、下関と御案内申上げました。前掲の五ヶ条

# ななそじ

七十の句

## 富士野鞍馬

還暦から古稀と、人生は早いような気がする。路郎先生が今年古稀を迎えられた。益々御健勝に、川柳活動をして頂いている。まことにありがたいことで、御礼と御祝いを申上げる。

昔は、七十才という稀な長命とされて、何もしない隠居さんというのが常識であった。文政九年の古川柳に

七十にして立つ御隠居は  
 古来稀 ヒツメ

という句がある。肉体的に思い切った表現をしている。これより前、文化四年に、文日堂磯川、六十にして立つ御隠居は

頼母しい  
 がある。自ら精力絶倫を表白し、初代川柳没後の江戸柳界を牛耳って、九十幾歳まで活躍した。外に古稀の句は見当たらないが、七十の句があった。

七十匁不易にならぬ美し  
 さ 蘇竹

これは見合の観劇で、その頃の棧敷料が三十五匁であったから、二軒ということになり、婿方と嫁方と隣合いの棧敷で見合をしたが、その縁談はめでたくととのつた。という句である。これより一寸前めたいことである

見たり見せたりで一両十  
 尾上

はそのときの出来事をまとめたものです。尙お、詳しいことは大阪の文蝶さん広島伯峯君にお尋ね下さい。

燃える情熱  
 河村日満

酒とろりとろり大空の  
 がある。一匁は六十匁だから、これも七十匁で、見合観劇を詠んでいる。

今は、日本人の平均年齢六十五八歳というのであるから、古稀といっても、昔のように老化した日本人ではない。これは路郎先生を見てわかるであろう。

唐の大詩人、杜甫の「曲江詩」に「人生七十古来稀」の一句がある。これから「古稀」といって、七十歳を祝福する習慣が出来て、それがわが国へも伝来したのである。

昭和十三年、久良俊先生の古稀には、勅進帳の弁慶を演じてもらって、十六ミリに撮って、

古来稀なる軍国の春に活  
 き 久良俊

の詠句があったが、今は民主日本に変わっている。

七年後には喜寿である。それまでに葎乃奥さんの古稀が来る。お

ななそじのうち川柳に五  
 十年 鞍馬  
 (本社・洞友)

こころかも  
 路郎

とこんな句が詠める師だから大好きといえる大体に飲まぬ人は何かス様格式ばったところがあるようにで交際がしにくい、酔ったときの師は特に好きだ。手拭を櫓に唄に合せて舟を漕ぐ、所作こんなことが出来るのも酒が解る人だからだ。

トリトリと読まれ鳥取  
 しよげてい 路郎

ハハハどうだ、正にこの通り、そうしよげるなもつともつと宣伝をして大いに鳥取を知らしめるんだな、大阪の連中は鳥取に温泉が湧いているなんて知つたらんよ。こんなことを言ってくれるのも飲む師だからだ。酒を飲んでる限り師の生命と情熱は燃え尽きない。

長生きをしてやと恩師  
 また酌がれ 日満

倉敷に於ける  
 路郎師 田垣方大

所は天下に有名な倉敷市大原美術館内である。川雑倉敷支部員五名が路郎師を囲んである泰西名画に見いつていた。と向うから立派な紳士がお供を二人(之も立派な人)つれてふと路郎師を見かけ、「これはこれは」と丁寧挨拶をされた。路郎師「やあやあ」と肩を叩かんばかりに親しく。お話数分、くだんの紳士は吾々にも微笑

の会釈を残して別れて行った。方大「先生あれどなたですか」路郎師「なんや君あの方知らんのか、あれは此処の〇〇さんやないか」

方大「あ、あの方が〇〇さんですか」  
 かなある……」

お膝下の私達が知らんのに大阪の先生の方が……。私は一瞬自分が旅に來ているような錯覚にとらわれた。昭和三〇年新緑の頃の事である。

盲蛇におそれず  
 木村千容

私が川雑へ入門して間もない頃、老師が大原美術館見学の為め來倉された。その案内役を承つたのを機に、美術館の句を御覽願つたところ「絵などを素材にするのはまだ早い身近な生活の句からやり給え」と笑殺された。

今から考えずと冷汗三斗突に、盲蛇に怖れずとはこのことである。

## 太田眼科

太田良子

大阪市生野区南生野町  
 三ノ二六パーク劇場横  
 電話 〇八七四九番



### 路郎句碑

## 彫刻秘話

### 清水白柳子

昭和二十五年十一月号「川柳雑誌」の「窓口」に句と碑と私として路郎先生が書かれて居りますのを抜萃致しますと『僅か二三ヶ月の間に、私の句碑が三つも出来た。ジェーン颱風を誰もが予想しなかつたように、私の句碑が次ぎ／＼に三つも建設されようなどとは私は、勿論のこと、誰もが予想しなかつた出来事であろう。しかしこの出来事は颱風と違つて、誰の耳にも快よい響きを伝えた。そして颱風のように快速調で事が運んで、辞退する寸隙すら与えらなかつた』と。

○ 第一の路郎句碑は大阪の島の内三休橋の南詰を少しく西に入った南側、中島小児科診療院の後庭、藤の側の下に建設された。

○ 当時川柳不朽洞会の理事長中島生々庵氏の診療所新築に祝意を表して不朽洞会の有志から、路郎師の句碑が建てられたのである。句は小児科に因んで、旧作「すべり

んこ親は涼しいとこて待ち」が彫られて居る。その美事な出来栄えに、一同眼を見張る。この後庭が患者やその親たちの待合室の延長として用いられるところに、この句が特に選ばれたのである。『句碑の前方、一間ほどのところには、小型の天神の石像が置かれてあり、句碑から右へ四五尺離れたところには、生々庵博士の好みて丹塗りの春日燈籠が一基建てられたので、やわらかい情緒が流れている。燈籠の製作は会員清水白柳子である。(幹事記)』

○ 当時幹事としてすべてのことを運んだ、永田里十九が亡くなつてしまつた今日、建設の当事者として里十九と二人しか知らない事柄を少し書き加えて見たいと思ひます。句碑の材料撰定のために、里十九と二人で大正橋から小林町、境川、長柄、四ツ橋と心当りを探しまわりましたが、さてとなると帯にみじかし、たすきに長しで、理想的な材料がなか／＼見つかり

ません。長さがよければ巾がせまく、寸法があれば材質が気に入らずと言うようなわけで、段々日は追つて来るし、句碑の原書は里十九が届けに来てくれるし気が気でなかつた日が続きました。いつそ近くを探したら手に入るかも知れないと思ひまして、あつちこつち尋ねまわつた揚句、家の方へ曲る角の材木屋で、まあどうせないだろうと思つたが、尋ねてみようとする主人に突は句碑にするのだが、こんなものはないだろうかと話した処、一べん見て下さい、これならどうですと案内してくれた倉庫に二本もあるのです。その時は嬉しかつたです。早速里十九に連絡してそのうちの一本を使うことに定めたのが、あの句碑の材料です。材料が出来ますと早速今度は彫刻

## たそがの除幕式

### 菊沢小松園

に掛らなければならぬのですが当てにして居た職人が間に合わないのです。そうかと云つてだれでもいいと云うわけにはゆかないのです、それは平面に彫るのなれば多少楽なのですが、句碑の表面は生地肌のままで凹凸がはげしいです。とう／＼私が彫りに掛りました、一生けん命にやつたお蔭で当日に間に合はす事が出来たのでやれ／＼と思つた事を覚えて居ります。第一の路郎句碑の句を、私が彫刻した事は里十九以外には恐らく知つて居られる人はないでしょう。里十九が亡くなつて今日迄私だけの胸に秘めてあつたのですが、先生の古稀記念号に句碑のことを書く機会に恵まれましたので、初めてみなさんに知つて頂くことが出来るのであります。

○ 四辺の山なみは別に取り立て、高いのもなければ低いのもない何処までも続いた山の起伏が目届く限り幾重疊と続いて、我々の一同を除けば、誠に静寂な山村の黄昏である。海拔千七〇〇尺の此処大和三本松、上田翠光居前の路郎先生の第二の句碑除幕式の瞬間である。時は昭和二十五年八月二十五日。永い夏の陽も刻々と西に傾いて記念撮影のフラッシュの閃光

が幾筋もの稲妻となつて四圍の草むらさみを、樹間を去る。薄闇にふわりと落ちた除幕の白さが今も尚ほつきりと印象的に臉に残る。どつしりとした大きな自然石に深々と刻まれた先生の名筆  
名も知らぬ山の起伏を  
うれしがり  
頭を廻らせばこの句この所を得て一段と妙趣も湧く、この句碑を得てあたりの名もない山々も嬉しげ

お見合・御禮の

## 写真は五藤

肥後橋交又西電土二九〇〇

川柳浴衣  
価八五〇円 送費六〇円  
川柳雑誌社サービス部

### 古稀祝賀

- 大西迷窓  
松下蘇水  
建沼康之介  
竹村温夫  
赤川俊一郎  
渡辺左千子  
笠岡直喜  
川竹松風  
須藤俊江  
高橋蟠蛇  
若崎草舟  
金沢醉雀

にさえ覚えた。夕暮の除幕式も形  
式を破った川柳的なものだった。  
来会者三十余名、斯かる山村と  
してはお祭以上の賑やかさだと翠  
光氏が言つて居たのも満更御世辞

# 岡山県の句碑

## 浜田久米雄

岡山県久米郡久米南町（当時は  
弓削町）に路郎先生の第三句碑が  
できたのが昭和二十五年九月、和  
気郡吉永町に第四句碑ができたの  
が翌二十六年四月で、わずか半年  
の間に先生の二つの句碑が建て  
てから、早いもので、はや六年の月  
日が流れている。

第一句碑から第四句碑までの句  
はいずれも先生の代表句であるが  
特に第三句碑の「おれに似よ」の  
代表句がわが岡山県にあるとい  
うこと、これは岡山県下の川柳人  
として大きな誇といわなければなら  
ない。第三句碑は津山線、津山線  
というのは岡山から津山、鳥取へ  
抜ける中国山脈横断鉄道である  
が、岡山津山間の途中にある  
弓削駅（ゆげと読む）の駅前の鉄  
道用地に建てられてあるから、毎  
日この駅を乗り降りする旅客の眼  
にふれるのである。これを書きな  
がら弓削駅の乗降人員は何人かと  
思つて電話して見ると、最近の一  
日平均が定期を持つてゐる人が六

ではなさそう。  
祝賀の宴会に句会に膚に心よい  
山の冷気を満喫して東の白む頃ま  
で星空の下で語り明したのも忘れ  
得ぬ句碑建設の思い出である。

六〇人、普通切符の人が三七〇人  
で合計一〇三〇人となる。毎日千  
人も人の眼にふれてゐることに  
なるのである。川柳を作らない人  
でもわかり易いこの句の意味は自  
然とわかつて来るわけで、この十  
七文字が、数多くの人々の心に植  
えつける教訓的なものはとても銭  
金では求めることはできないと思  
う。

**古稀の賀**

村田 周 魚

矩越えて浴衣に風も新たななり  
頂上へまだ気の張りを持った古稀  
次々と年の祝に句も弾み  
き（うききょうあしたへ胆は太くなり  
齢富貴百万円の句も生れ

（きやり川柳社・主幹）

さて、第三句碑建設計画のとき  
の弓削駅長は第四句碑を邸内に持

義礼智信」であることを付記して

つ大森娛句楽さんであった。娛句  
楽さんはこの計画を聞くや駅前用  
地の使用について全面的協力を約  
し、これが実現については関係方  
面と交渉を続けて当局の許可を得  
てから熊山駅長に榮転された。次  
の第四句碑については早くから心  
にきめて第三句碑建立の翌年春に  
は早くも完成の運びになつたので  
ある。第三、第四句碑とも地元川柳  
人のけん身的努力によつて出来上  
つたのであるが、娛句楽さんの決  
意が預つて大きな力となつていた  
のでつた。昨年春三十七年の長い  
鉄道生活を辞してから、ある事業  
の責任者として忙しい娛句楽さん  
ではあるが、朝は句碑に送られ  
夕は句碑に迎えられて帰るうれし  
さ、先生を敬慕し句の心ずいにふ  
れて生活する娛句楽さんは健康で  
あり、事業も好成績である。句碑  
のおかげであり先生の余徳である  
といわなければならない。第四句

おく。  
近頃各地でいろ／＼な句碑がで  
きているようであるが、僕はやは  
り人間陶治の詩である川柳による  
句碑が人心を陶治するものである  
ことを信じて疑わない。かりに俳  
句によつてその土地の観光宣伝上  
の一つの資料のつけたりすぎない  
のであつて、その句によつて物  
を考えたり、後進を教え導くとい  
うようなことはできそうにもない  
と思うからである。

また句碑というものはそう簡単  
に建つものではないと思う。川柳  
の盛んな土地に必ず句碑が建つと  
は限らない。先生と門人とその土  
地との呼吸がびびりたり合つては  
じめて句碑が除幕されるので、こ  
の点わが岡山県はうぬぼれてもよ  
い程呼吸が合つていたと思う。あ  
の除幕式での感激はわれ／＼川柳人  
として終生忘れることのできない  
興奮のルツボであつた。備前支部  
の句会は娛句楽邸とぼくの家とで  
隔月に開いてゐるが、おかげで二  
月に一回は必ず先生の句碑を拝し  
てゐる。毎年四月には句碑の上の  
桜が満開で、その桜のまんに電  
燈をつけて夜桜句会をたのしむの  
であるが、句碑の上に散る一片の  
桜を仰ぎ見て、先生への敬慕の念  
を禁じ得ないと共に川柳するもの  
、幸福をしみ／＼味うのである。

**高級果実**

**上野商店**

（電話 館内23番）

大阪アベノ・阿倍野ビル一階  
（電話・77・3731~4）

古稀祝賀

国弘半休

広島市南蟹屋町  
鉄道宿舍七四ノ一

山田季賛

広島県安佐郡可部町  
大毛寺住宅四号

レンズに生きレンズに学び  
レンズを生かす

光学玩具製造卸

全国著名百貨店三十四店納入

**宮城産建株式会社**

本店 大阪市南区難波新地二番丁二九  
電話 大阪 七三二七番  
電話 南 五七二七番  
東京支店 東京都台東区万年町一丁目六  
電話 漢字 四九七三番  
大阪支店 大阪市南区松屋町四四  
電話 南 六〇五六番

路郎先生の古稀をお祝する記事  
を杏林川柳會々員各自が書く事になつておたのに皆さん流行医ばかりで御多忙なため一番忙しくない阿茶に代筆させると云う事になり光榮ある執筆者とはなりにける次第。

「ら／＼考へるのに青年の気持ちで情熱を燃しておられる路郎先生に古稀じゃ／＼芽出度／＼と老人扱いするのはどうかと思ふ。それで此席にも古稀の御祝詞なんか述べないで路郎先生に御薫陶を受けておる我々會員の横顔なり、会の模様なりを書いて御祝詞の代りとした。

本会は現在會員八名月一回第三次曜日午後七時頃より各會員廻り持ちの当番の宅で開催。兼題二題席題一題、淀川の鮎が多くて披露前から御馳走の催促が出る。勿論酒は御法度じゃありません。寒い時など来るとすぐ兼題も書かず「寒い寒い、すぐ温まる妙薬があるわんけど」と云つた工合、南区と云うより大阪でも屈指の流行医もだらしのない事。先生の選しておられる間から開宴。

御馳走は幕の内程度と定めてあるが誕生祝だ、子供の入学だ、卒業だ、息子の嫁貰つた、親の命日やと云つた工合におまけがつくのでなか／＼派手な事です。披露されて抜けると抜金をとられる。平が二十円、五客四十円、

入六十円、地八十円、天百円、一人で天地人にぬけた時は倍額と云う定め。しかしこの抜金だけは一人も文句を云わず「口ではしもた」と云うもの、皆ニコニコ顔で払う氣の合つたくせのない陽気な人々ばかりでにぎやかな事。

ころつと人間が變つて川柳の効果が一番あつたと云う噂。開業はしても学徒で生きぬこう 一哲

一伸：本名若崎将伸、医博、皮膚泌尿器科、温厚な性格、お父さんが通人であつた故か、若いのに似ず、アブレ氣のないお坊ちゃん型。ぬけんでもニコニコ。ぬけてもニコニコ。年増惚れのしそうな人。

坂町の月はネオンの上で満ち 一伸

# 杏林川柳會たより

山川阿茶編集

画をかく者、川柳を書く者、夜は川柳行燈を庭に吊し豆電燈をつけてパーティとしゃれる。唄も出る踊も出る、腹の皮がよじれる程笑つて飲んで食べて満ち足りて帰途につく。こんな楽しい会が月一回催されこゝ十年近く続いております。

太希志：本名平尾猛、医博、内科小兒科、患者が多すぎて閉口して居る。時々過労のため青ぶくれになる。若いがとても腹の据つた居合技五段と云う腕前、時々飛び切りよい句をひねり出す人。

伏屋にも一月一日の陽の光り 太希志

阿茶：本名山川初子、女医、皮膚科。芸人畑や色街に知り合いが多いので酸いも甘いもかみわけてる様で、そのくせいつまでも「こいちゃん」でぬけてる様な、阿呆

か賢かわからんと云う人があるがそれはお世辞であまり賢うないのが本当、父の七回忌に生々庵から頂いた句「七回忌昔ながらの不肖の子」これがびつたり。小唄と番唄は名取り、お花は師範代だと云うがお免状だけの話。

男みな阿呆に見えて売れ残り 阿茶

珊枝郎：安岡三四郎、医博、内科小兒科、堂々たる体軀白面の好男子親切だし昔は艶っぽい話をはきだめにはいて捨てる程あつたであろうと思われの人。土佐っぼの心の強い一面もあり、長唄は年季が入つて居る。路郎先生より二つ程お兄さんだが自転車で縦横に往診しておられる元氣者。

ある句を御披露すると、一哲：本名牟田哲三郎、医博、耳鼻科、一名長崎大学の学長、石部金吉のとても氣むずかし屋のユチョコチやつたのが、路郎先生の門下に入り川柳をやり出してから、

大望はなし只喰う事だ喰う事だ 珊枝郎

小石：本名中島寿代、生々庵夫人、生々庵が口の悪い阿茶に「あんたはえ、奥さん持つて仕合せやし大切にしなければ」と云われる程よく出来た人。お客さんも多いし随分五月蠅のやろと思つけど嫌な顔もせず、よく世話しはる、一寸出来ぬ事やと思う。画、茶、小唄、舞踊と夫唱婦隨で仲よく同じ趣味に多幸な日々を送つて居る。

舞扇持ては六十とはみえず 小石

生々庵：本名中島蓬太郎、医博小兒科、小兒科で大阪随一の流行医。生一本の人、氣儘な処もあるが氣のえ／＼親切な人。母孝行は有名。信仰心の強い世話好き、人の出来ぬ世話を焼いて腹立て、苦勞してる人。画は素人ばなれと云えば一寸お世辞かな。茶、小唄、踊なんでもこいの多趣味の人。

親馬鹿の汗のすべてを子に献げ 生々庵

瑞川：本名河村長治、医博、耳鼻科、二十二貫の巨軀福々しい童顔一番陽氣で一番にぎやかな人。瑞川と阿茶がぬけたらこの会もお通夜みたいになるやろと誰れかが悪口を云う。一哲が瑞川の来ぬうちに早う作りや、来たらやかましいでと口癖の様云う「妻のろ」やと書いての注文だから特筆して置く。画、茶、常盤津がやれるが、体に似ぬやきしい可愛らしい声、どこからあんな声が出るのかしらと思つて二度びつくりする。

おまえさん雨よと干物入れさせる 瑞川

ざつと以上の通り手前味噌で恐れ入るがお許しが願いたい。酒くせのわるいのはなし、交際はよしお人柄の寄合いで和氣アイアイの会合。テレビでも皆さんに見て頂きたいと思つています。

私達は路郎先生を中心にこんな楽しい会合をもつて川柳と取り組んでおります。希くば路郎先生の喜の字、米の字までもこの会合のつゞき事を祈つて筆をとめよう。

道券茶の香編集



写真説明 前列左より千太郎、茶崎、正柳、千早、やすえ、路、明、後列左より一穂、菫の香、城南、宗太郎の諸氏

師事は楽しい

伊藤 茶 仏

古稀の祝は盛大なものなのに、合言葉に不朽洞会員は今日を待ちに待った。  
先生も柳話等で「私も齢だから」の言葉をもらされる時もあるが、若い者をしのごお元氣は嬉しい。この次は喜寿の祝賀である。

路郎先生の喜寿祝いの年は、私も古稀の祝に当るのであやかりたい。

※

映画「雨情」を路郎先生から聞いて、この映画をみた。かつて師事もし、私のペンネーム「茶仏」の名付け親でもある野口雨情先生の詩情に私の想い出はつきない。

夢には色彩がない  
いいえ私の あまい夢  
ふわりふわり シャボン玉  
空の青さに とけてゆく  
こくりこくり 鈴の椅子  
ぼかりぼかり めくら判  
夢にや汚職は ないわいな

※

未知の人の句を味わうのと、一度でも接した人の句を味わうとは、大変なちがひがある。大阪、名古屋、東京と出張の多い私である。つとめて各地の句会に歩を運びたい。

身辺雑夢

ぬし・子の字

順境の友と逆境の友というのがある。順境にある時しか友誼の保てないもの、この順境の友は多い。求めずして周りに集る。逆境の友は甚だ稀で中々求め得ないのが通例だ。

清濁併せ呑むことは出来難い。清を愛慕すれば濁が憎悪されるからだ。清濁併せ呑むことに努力しようとは思わない。

三転・四転?

宮崎やすえ

いくつになっても年を取った気がしない人と人に聞かされ自分も云う。そういう年になって少し嘘があるように気づいて来た。  
人間晩年が大事だ、このまゝ人知れず世を去っても悔とせぬ。間違つた方向につまづきたくない。牛のよだれという言葉がある。三行のものを十行に水増しして知性振るうとすると鼻もちがならない。十七音字しか欲をもたぬ川柳人は付合つてみると深さが解る。

夢果てず

村井城南

年寄りはやはり昔のことを思い出す。「猫柳」時代に「川柳小松支部」に十二、三人居た頃、路郎先生の雅号名付親と云うものがあった。当時太公坊と云つた小生の雅号も、路郎先生により「太魚」と命名されたのである。その後、幾分遠ざかつたため、良心に問い「太魚」を名乗らぬことにして、本名の安衛(やすえ)にした次第である。いずれ「猫柳」は復活すると確信し、それを希うものは小生のみだろうか。

老柳人の夢

位守 正柳子

ある日の夕食後のひととき、六

僕の夢

万仲一進

とかく凡人の夢は大きく描きすぎでは、経済の針で破られるのが常。その点女は家庭へ入ると現実的になるようである。妻が今度の週末に近くのハニベ療養院へのハイキングを提案してきた。開眼式以来一度も行かず、その間多くの仏像が都賀田勇馬氏によって彫られたと聞く。数十体の御仏におわびかたがた長男の出産報告をと夢を描く。  
偉大なる夢を蹴破る子の目覚め

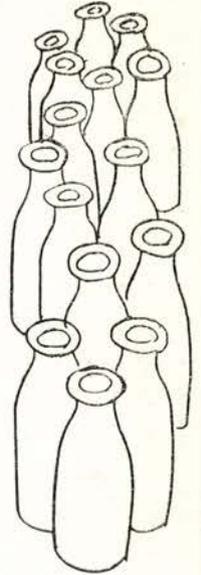
集い

関戸宗太郎

最近僕の会社内で川柳愛好者が増えつゝあることは嬉しいことだ。作句しては見せに来るので、僕なりに添削し批評している。川柳の三大要素についても質問に応じているが、深く突こまれてくるとわからなくなる。

ともあれ、会社内の愛好者がつと増え、一日も早く社内川柳大会の持てる日のくるのを夢みています。  
神様もおぼえきれないほど頼み

秘	戰
話	争



むかしばなし

## 偉大なる浪漫

岡橋宣介

わたしは明治生れで、今どきの若い人たちに比べると少々あたまが古い。だから昔が好きである。これは日本人がとて戦争好きであつた頃の、遠い遠いむかしばなしである。

☆

霧もここでは硝煙の匂ひに滲み汚れて古綿のやうな感じで、とんと情趣がない。山腹から遙かな谿谷へと風をはらんで、めまぐるしく流れては散り、ながれては散る。爾靈山から射出敵の火箭は、その霧の彼方にパッ！パッ！と花のやうに咲いては消へる。それが歡むと無気味な沈黙があたりを押しつぶしてつづく。山頂の一角に身を曝して、決したまなじりに、はるかかの爾靈山を睨んで今朝から歩哨任務についてゐる若いS少尉は、流石に永い緊張からの疲れに、さつきから少し苛々して

みた。

そのとき、コツコツと背後に誰か近寄つて来る靴音に、見廻りの将校だなど直感した後は、ただ訳もなく、そして誰にもなく「糞ッ垂れ！」と、訳の分らない忿懣がからだ中を駆けまはつてゐる自分を何うすることも出来なかつた。そして、依怙地に振り向かうともせず、ちこんちこんになつて真つ直ぐ前方を睨みつづけた。雨を孕んだ一団の切れ雲が、彼の哨つてゐる足下を払つて転がるやうに横なぐりに、はるかか麓へ墜ちてゆく。

靴音は次第に近づいて彼の背後で停つた。このとき彼は、こんな感情の坩堝のなかに身を震はせてゐた。若しも「敵の状況は何うぢや、しつかり見張つとるか！ほんやりしちや不可んぞ！」とでも言はれやうものなら、「何んでイ、コ

ン畜生、俺は一生懸命ガン張つてゐるんだゾウ、馬鹿にするな。」と、はげしい忿情を表すために、クツ返事もしてやらねえぞ、と待ち構へた。きつとそんなきつい言葉がうしろから飛んで来ることを覚悟して頭張つてみた。若い彼はそれほど真剣に、懸命に歩哨任務に固くなつてゐたのであつた。

かうして嵐のやうな激情と闘つてゐる彼の心を知るや知らずや、つかつかと彼の横に来て並んだ将校は

「この頃この辺に鶉が出るかね。」

と物静かに尋ねた。さいぜんからあれ程カンカンになつてシャチャョ張つてゐた彼は、この意外な質問に拍子抜けした。途端にひよいと顔をむけて、思はずハツとした。そこには思ひもかけぬ乃木將軍がただひとり、鶴のやうな瘦身を軍刀に支えて慈眼を彼に注ぎながら佇つてゐた。彼は最前からの心の剣幕もどこへやら

「はいッ！」

と、直立不動になつて了つてゐた。しかし、將軍の口から次に出るであらう堅苦しい質問を予期して、心の鏝は解かずじつと。すると彼の期待に反して、將軍はあらぬ方へ目をやりながら、それ以外に何も言はれなかつた。そして軽く会釈して彼の前をしづかに通り

越し、十歩の彼方に歩を進ぶと何思つたか、そこに咲いてゐた一茎の野菊の花を摘みとつて、鼻の先まで持つて来てしばらく眺めてゐたが、やがてその小さな一輪の花を大事そうにポケットに入れて、くるりと向き返り、彼の前を元来た方へコツコツとしづかに帰つてゆかれた。

しばらくして彼は、自分の耳を疑ぐるやうに頭を振つて見た。が、血腥さい風の中で、立哨の若いS少尉に訊いたものは

「この頃この辺に鶉が出るかね。」

だけであつた。いくさのことは片言もいへなかつた。そして野菊の花を摘んで、しみじみといつくしむやうに眺め入り、それをポケットに入れて帰つてゆかれた。ただそれだけで、この一瞬の出来ごとに聞き違いも見誤りもなかつた。彼は少しぼんやりせざるを得なかつた。

幾万の尊い生靈の犠牲にもたは陥落を見ない二〇三高地を目前に、銃後国民の心はひしひしと將軍の胸に迫つて来る。苦惱幾旬、頓に増えた霜髪、しづかにしづかに彼方へ小さく帰つてゆかれる將軍のうしろ姿を仰いで、彼はぐつと胸にこみ上げてくる熱いものを感し、思はず嗚咽を漏した。

「うん、さうだ！一再び振り返

ニツサン. ダツトサン. トヨタ. トヨベツト部分品販賣

## 東光自動車工業株式會社

大阪市上福島南一丁目一一六  
電話 大阪 5558番 (代表)

つたときは、もう彼の視野に將軍の姿はなかつた。彼は何か神々しいものに搏たれると同時に、この將軍の下になら喜んで死ぬる幸福感に浸りながら、はるかの爾靈山の空を睨んで滄茫と哨ちつくしてゐた。

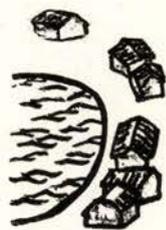
霧れ間に覗く銅盤の夕陽は殊に美しく壯嚴に見へ、一陣の烈風のあとに一茎の野菊の花は白かつた。

☆

これはわたしの八つするとき、地球の一角で起つた出来ごとを、十五年後に聴いたほんとうの話なのである。大分以前でしたから多少の齟齬はあるかも知れぬが、わたしが桜井忠温(当時少将)から直接お聴きした実話の一節を思ひ出して、ここに書き綴つてみたのである。若い少尉Sとはあのとときの桜井忠温少尉その人であることは勿論である。

こんな話いまだきバカバカしく、てビンと来ないが、異状なまでに激越な戦争という現実の埒端の中に、この悠久のロマンこそ人間精神不滅の在り方を示すもの、わたくしたち川柳人も日常のほげしい現実生活の中に、もとめてゐるものと一脈通じるものがあつてもよいと思ふ。(野村胡堂)

(せんば川柳社・主幹)



# 麻生先生と私

## 大島 濤 明

麻生先生が本年を以て古稀に達せられ、而かも益々お元気で川柳の振興と新人の養成に尽されていくことは、寔に目出度い極みで衷心祝意を表するものである。

麻生先生については大きな失敗の思い出がある。所有品を全部満洲に置き去りにして引揚げて来た私には、日記も句帖も満洲に遺して来たので、日時などハッキリ記憶していないが、麻生先生が初めて満洲視察にお出でになつた時のことで、多分昭和二年頃ではなかつたかと思う。

遙る／＼日本から来られると云う便りを受けたので、私は何程かのお手伝いにもと思つて、満鉄会社の満洲全線通用の乗車証を買つて送つたのであつた。而かもそれは私の友人で満洲日々新聞編輯長の本田澁花君に頼んで貰つた同君名義のバスであつた。

先生は朝鮮を経て満洲に這入られたが、当時安東県には支那税関があり、鉄道附属地警備の日本の警察署があつて、支那に這入つて来る旅客の荷物や身分を検査していたが、先生も勿論その検査を受

けられたが、ポケットの中から私が送つた名前の違うバスが発見され、それを悪用するものとの誤解からお叱りを受けられたそうである。

安東から奉天に着かれたが、當時大連に住んでいた私も、偶々奉天に出張していたので、ヤマトホテルに先生を迎え、この話を聞いて痛たく恐縮した、それも先生からバスを都合して呉れと頼まれたことなら兎も角、私が勝手に氣を利かして送つたものであつて見

# 車 福壽丸

心齋橋筋大丸前

電話③三三四四番

れば、何とも申訳のない仕儀であつた。

麻生先生に対する安東での検査

が厳しかつたのはバスの為ではなく、その頃日本では無政府主義だの、社会主義だの、尖端を行く思想が擡頭し、社会主義運動の先頭に立つていた麻生久と云う人があつて、警察は角袖を附し、彼の行動を監視していた。そう云う折柄であつたので、姓を同じする処から麻生久氏と間違えられた為であつたそうで大笑いしたのであつたが、当時の社会主義者に対する取締りは、今日の共産主義思想に対するよりも、もつと厳しく当局から忌憚されていた様相が思い出され、時代の変遷をまぎ／＼と追憶するのである。

古稀を迎えられたお歡びに、昔の失敗談を持ち出すことは失礼かも知れぬが、日本の社会主義思想の推移の一瞬に、こうした路郎先生が蒙られた笑話がひそんでいることも、今となつては聊か興味がないでもない、と同時に先生が三十数年前を顧みられ、更らにうんと若返つて頂きまだ／＼前途多難な川柳文学運動の先達として御活躍御尽力を願ひ度いものと祈念して昔を語り祝辭に替えるものであつた。

祝吟 濤明

祖父さんと言われて癪な程元氣

古稀と言う字がそぐはな  
い健やかさ

(川柳噴煙吟社・主幹)

設計・施工

# 九十建築株式會社

会長 石田正一

本社 大阪市南区千日前 大劇横(道風ビル)

TEL(64) 6071~4

和洋菓子

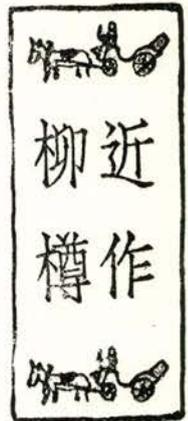
# 朝

# 日

# 堂

大阪南区市電戎橋御堂筋角

TEL(75) 7284



麻生路郎選  
北川春巢選

地上権の争い草の実こぼれるよ  
雞を死なした箱で兎飼い

宇部市

上林粗影

かき船の灯が招いてる久留美仏  
冷戦の仲から妻は飯にする

同

花屋の釣銭を想い出した精進日  
泥んこの土工泥んこの子を叱り

同

明日の支度よいかと漁村夕焼けり  
トルコ風呂汗たら〜で〜さがり

同

首だけでからかっているトルコ風呂  
税務署をへこませて出た空の青

同

補聴器で二人の話へ割って入り  
ばら展のばらは娼婦の美を競い

同

三十分進ませといてまだ遅れ  
シユ〜ットの二次会〜屋へはいり

同

お土産を一つ買うのに皆を呼び  
お師匠さんの足袋丹念なつぎの

同

質流れの会場奥様同士逢い  
安らかな寢息明日は叱るまい  
君と逢う日の半衿をつけかえる  
湯の町を出ればせわしい我家の灯

同  
同  
同  
同

小田紫草  
同  
同  
同  
同

潮花さんへ

君の瞳のなかで私の舞扇  
電子計算機を算盤でたしかめる

西宮市

同  
徳永 鬼美

風呂敷を扱げたま〜で死んでゆき  
墮す間を一姫さんとかくれんぼ

同

同

立候補よ〜ほど暇があると見え  
霊柩車のりたがるのを抱きしめる

同

同

むだ花ほどの役目で一生終らんか  
絹夜具をたよりながって母達者

岡山県

同  
太田 蓑流

棺に土かける女のイヤリング  
夜の汽車隣もポケット瓶を出し

同

同

せめてもの罪ほろぼしに妻を連れ  
日の丸は立て〜休めぬ菊作り

同

同

三十で割れば酒など飲めぬのに  
税のことになって無口が喋り出し

岡山県

同  
福田 祥男

煙り輪に吹いて春宵持てあまし  
ベテランと云われて閑職にし〜

同

同

孝行のしようのない程姑達者  
近代的設備を誇る留置場

同

同

貸切のカメラに大原女ボーゾして  
里帰り昔のお膳母在ます

福岡県

同  
岩田十三楼

惚れてない証拠に惚れて居〜云う  
疝借りて船頭さんが邪魔になり

同

同

出世して出られた家と大家云う  
だまされて自分の慾を振りかえり

同

同

魔業の気で税務署に休当り  
半眼を開き夜行の駅を読む

兵庫県

同  
永尾 永断

斗争の指令ビタミン打つて出る  
過去完了の人がのこ〜御奉公

同

同

風流な酒になるよに花が散り  
打ち開ける恋には丁度い〜緑

同

同

知識慾旺んにきびも又さかん  
卵割り損ねて心見透かされ

高砂市

同  
吉原 紅月

ある日の恩師

子煩悩の先生

市場 没食子

終戦後停電盛なりし頃、それもブドウが出初めた八月中頃、ヒヨッコリ先生が訪ねて下さいました。黄昏過ぎでした。有合せでビールがあつたので呑みかけたらちまち停電、ロースクを灯したら先生が例のユーモアたっぷりの語調で「これもえゝなあア」と笑われた。何にしろ疎開から家内と子供が帰って間もなしで店は美容室に二階の二間は洋服屋さんにどちらも戦災者に貸してあつたので、六畳一間暮して狭いので恐縮していたら、子供が先生に出したブドウを欲しがつたので先生は一、二粒喰べられただけで子供に分けてやつて下さつた。このアンケートを妻が見てあの時子供にやつてもらつた事を書いてくれと言いながら一度先生に出直してもらわねば申訳けないと言ふ。先生は子煩悩ですなえと付足した。あれから十年、ブドウを横取りした三人の子供も、長男長女はそれ〜大学に通っているし一番欲しがつた末っ子の二男も中学二年になつてゐる。

子沢山僕の枕はどこへいたの句が浮んで来た。







未亡人男の声で子を叱り  
退院も保険切れとは寂しすぎ 出雲市  
療養所かつては息をとめたところ  
善人を殺して汚職幕となり  
ひとり弾く三味あじけないものになり 大阪市  
袖口で恋の眼鏡の玉を拭き  
塗下駄の紅緒二十才の頃の色  
婦さぬと云えば悲しい眼で見つめ 豊中市  
すねて咲く様に二階のアマリリス  
今日あたり来なきるピース買 京都市  
嫁くうわさ友外出が多くなり  
お見合の頃から恋に変わりかけ  
腕組んで見ても女に策がなし  
加茂川で自動車洗つて雨上り 守口市  
満員でおつけの息を浴せられ  
原色を着る娘に似合の彼が出来  
大人しいわるさは金魚つかんで居 大阪府  
老眼鏡上から心覗くよう  
奥さん奥さんと商売のむつかしさ 鳥取県  
新築を見上げりゃ杭に蹴つますき  
手帖に書いた唄で妓を思い出し  
並木道一処雀宿るところ 大阪府  
父からの首が廻らぬ扇風機  
さて逢うてみれば歩巾が揃うだけ  
帰省した義弟空気の味に酔い 広島県  
事業用マジックインキで届くふみ  
負けた碁へ待たすの考えすぎる  
酌をして廻り無芸の身を恥じる 金沢市  
悩み多き女の乳房たれてる  
市議さんが寝たを果議けなす  
商魂は入院してまで宣伝し 兵庫県  
お化粧へ見舞廊下で待たされる  
真相がわかり言葉も改まり  
蝶々を例に年上すゝめられ 兵庫県

おごらせる財布気にする苦勞性  
娘のルー酒乱の父を背負て生き  
欠伸すれば妻も欠伸をして返し 西宮市  
五田のカミソリでミニ男前になり  
脳膜炎だった子に上げ足取られ  
失業が自転車掃除ばかりする 岸和田市  
汚すのは五人洗うのは一人  
借りて着た茶羽織の妻見直され  
主婦の会かみつような顔ばかり 岡山市  
委見へ目下売出中の顔  
水臭い夫婦になって趣味に凝り  
郊外に住んで桃の苗木の苗 徳島県  
老さらばえて気の毒なほど無趣味  
腰低の来たと思えば寄附のこと  
宣伝のジャズに鉄とる手は狂い 七尾市  
神主とニコヨン屋の湯にひたり  
見晴しのよい火葬場で白骨となり  
当たらおごる話を聞いてあげ 金沢市  
本当に嬉しい顔は子をあやし  
丁重にされて手ぶらで来たを悔い 和歌山県  
現職を捨ててはがゆい世に出馬  
親族会議へ隠しおさせた赤い爪 鳥取県  
悔みたら〜と力にもならぬのが  
散歩とは植木屋までの良い身分 五島市  
遠足を無口で帰す春の雨  
子の貯金箱に手を出す淋しい日 今治市  
せめて子へ兜をおつてやる節句  
社長の高より高いカメラのリフレクション 田辺市  
母の日の母が映画の子らへ傘  
道楽をとがめず妻は手内職 愛媛県  
神様も耐で我慢をして貰い  
立てば読み坐れば眠る通勤車 岸和田市  
推薦映画何所が儲けているのやら  
すき腹に妙薬と云うかしわ餅 兵庫県

同 石橋方古人  
同 板東千代美  
同 石川ひさみ  
同 藤川沙智子  
同 大谷月都  
同 藤本千永  
同 鈴木村諷子  
同 堀須賀太  
同 平田越舟  
同 山田圭都  
同 護川梢月  
同 久米奈良子

同 樋口舟遊  
同 中野三四郎  
同 光好陽子  
同 土守トン坊  
同 前浜嶮多路  
同 能村美佐緒  
同 木下一休  
同 山本九里三  
同 秀川承平  
同 越智一水  
同 室井八九寸  
同 榎水泡  
同 植山武助  
同 前川越山

国際観光旅館

# 碧流荘

山中温泉

電話 三〇一 番

電話 五〇一 番

だが、講演だけを済して後は、床  
の中で選句をされると云う有様。  
//温泉でお粥ばかりを召上り//  
はその時の感慨である。  
翌朝は大分気分も直られたので  
一番静かな「まんだら湯」へぶら  
〜出掛けた。透き通った湯の中  
へ師弟の情が美しく溶けてあふれ  
ていった。窓の外は、桜の散りし  
きる春の朝であった。

山中温泉名集

## 河どり

加賀石川屋

加賀山中温泉  
電話 二一八 番



イヤリングまでが重たい恋のはて  
噂ほど進まぬ恋のもどかしく 兵庫県  
恋愛をしようかいかいと見直され  
泣かされてくるなとパパがけし 大阪府  
欲が出てからの兄弟他人めき 大阪府  
コマ歌舞伎みてきた話糊を借り 大阪府  
おとなりの栄転妻と箸をとる 新加坡  
えくぼもうあばたと変り三年目 新加坡  
やけで飲む酒とも知らずほめて 福岡県  
まだ煮え湯呑みたいらしい再軍備 福岡県  
週刊紙だけの知識でコップ酒 高槻市  
新築が画となる空が色を持ち 高槻市  
旧姓のまゝで寄寓の不仕合せ 玉野市  
風邪引きがみんな出揃う月給日 玉野市  
月末が近くパイプのいる煙草 大阪府  
看護婦がぼち／＼きれいに見 大阪府  
顔ぶれが揃い同窓会は派手 岡山県  
鉄持ったまゝで今年の春も逝く 岡山県  
右の窓ごらん下さい古戦場 岡山県

父の死  
藁のぬけたように夕餉の膳広し 兵庫県  
ふと我にかえれば悲し親がなし 高松市  
七人を支える靴の鉄を打ち 高松市  
もう少しこの世に居たいドック入り 新加坡  
団休よりアベックがごと女中同志 新加坡  
風呂敷をわざ／＼網に入れて提げ 笠岡市  
商魂がゴム風船を手に持たせ 笠岡市  
ボマードが春の目覚めをほのめ 大阪府  
合オーパー着て、浴衣を、に行き 大阪府  
麻雀の徹夜で伸びた髪を剃り 天理市  
台所を変えたを油虫までが知り 天理市  
長患い女難の相のまゝで老け 熊本県  
故郷は名物の蚊が出た便り 熊本県  
妻の歌初めて聞いた子守唄

同 出口白猫児 兵庫県  
同 六車 静々 大阪府  
同 青柳扇子仙 大阪府  
同 豊島餓次郎 福岡県  
同 三上 春雄 高槻市  
同 辻 白溪子 高槻市  
同 伊原 明林 玉野市  
同 竹内 千里 玉野市  
同 岡崎 一也 岡山県  
同 辻 文平 岡山県  
同 赤松 玉雪 高松市  
同 高野むじな 新加坡  
同 佐内 隆文 笠岡市  
同 藤村 孝江 大阪府  
同 仲野花鶴美 天理市  
同 淵川 秀敏 熊本県

人波に一人逆らうモク拾い 大阪府  
ニコヨンが後始末するデモ広場 熊本県  
編機やつと買え糸糸は買えぬま 熊本県  
女房も左党で夫婦善哉や 松江府  
栄転が独身寮に仮寝する 松江府  
鮎釣りの今日は残飯まいて去に 枚方市  
臍に灸すえてまで食欲を増進し 枚方市  
退院へ畳も替えて妻は待ち 枚方市

和歌山へ帰宅  
凹凸の故郷の道が恋しなり 大阪府  
好物のすしへ朝から母多忙 大阪府  
過ぎてから参観する日親に云い 大阪府  
本名の電話仲居をとまどわせ 富田林市  
血茶椀母にまかせて娘は夕刊 富田林市  
麻疹らしばあちゃんの経験 富田林市  
猪車ベル肺活量が追いつけず 大阪府  
タリミナル止まれば人がつき当り 大阪府  
黙秘権妻ゆ／＼と針仕事 玉野市  
住みついてスツケースの薄埃り 宇都市  
お別れの言葉お節句してゆきな 宇都市  
お化粧の挨拶までが派手になり 貝塚市  
改札へ照臭い程待ち呆け 貝塚市  
新任の婦長ユーモア持ち合せ 大阪府  
日輪を背に小さなはぜを釣り 大阪府  
モク拾ひひよう／＼と来て妻子 笠岡市  
かまきりのような女房にしかり居 笠岡市  
牛乳を長命してと祖母につき 貝塚市  
割高に離れを貸して未亡人 貝塚市  
食う心配ないので療養呆けになる 河内長野市  
人の尾について笑えぬ不機嫌さ 河内長野市  
赤い靴太い肢体かかりかかり 小松市  
ナイロンの金魚空中で飛行中 小松市  
ピンボケも初歩の記録と糊をつけ 笠岡市  
代筆へ感心し乍ら墨をすり 笠岡市

同 広瀬 我利 大阪府  
同 松井野狸翁 熊本県  
同 板倉 三文 松江府  
同 草深 醉升 枚方市  
同 寺柚 花車 大阪府  
同 河井 庸佑 大阪府  
同 川端東雲楼 富田林市  
同 小島さぎ 大阪府  
同 則田水鏡子 玉野市  
同 神田 豊年 宇都市  
同 杉本 一鶴 貝塚市  
同 蔭山 鬼落 大阪府  
同 出原 真奇 笠岡市  
同 小田 柳叟 貝塚市  
同 森本黒天子 河内長野市  
同 万仲 一進 小松市  
同 木山桃仙坊 笠岡市

お買物は  
鳥取大丸へ

鳥取市駅前

人生のスタート

野村 味平

此奴はどうも、平穩で一生は終  
れまい。これが、二十代のわたく  
しを識っている、極く少数の人達  
の見方であった。

その頃は、心の隅にいろいろと  
したものを、常に宿っていて、流  
しに出て、コップ、茶碗の類を打  
ち割って、鬱憤を晴らしたり、折  
角始めた釣道具の竿を、釣れない  
からと、折り曲げて川にぶちこん  
で、掻き混ぜて戻ると、気かを  
転換する排口が見出せず、自分な  
がら、飽きられていた矢先、計らず  
も、聖城川柳社の先輩から、川柳  
の手ほどきをうけて、路郎先生の  
説かれるところの、川柳は人間陶  
冶の詩である。この貴い言葉に、  
触れたわたくしは、初めてこれだ  
と、人生のスタートを、切替えるの



年寄へ守りのつもりの碁を囲み  
お隣の田舎のかしわ餅もたべ  
末っ子に一町二段作らされ  
喰うものも喰わず養子へ蓄の遊ぎ  
披露までもう取りに来た借衣裳  
エビで鯛釣られて母は嬉しそう  
焼酎で酔うて枕すひざ欲しや  
幸いを幸いにして孫の守り  
笑うこと忘れて娘色気づき  
生まだけに追われている無沙汰  
引込思案運はむこから逃げていた  
四十の女あくびを遠慮せず  
札東で鬼にも仏にも変り  
シャツターヘナースは裾をひるがし  
サイリウングスリルあるわと十八九  
駅前の文化立退料でもめ  
レレもちよつ見れる程に病み  
鼻ぐすりもうきいてるあほら  
デモ隊のトップはなんと二男坊  
折り鶴へ母遠い日の手つき見せ  
三人目も簡易保険は目をつける  
貨車の戸へ象は別れの鼻を振り  
パパをパパと呼ぶ女あり家もめ  
一つには慾も手伝う趣味がふえ  
居眠りをしてても隙のない男  
拜むこと忘れて今日も無事に生き  
弱点を突かれ黙って窓をあけ  
手を拭いてネクタイ結ぶだけ  
人生の初夏だサイクリングの一家  
臨時工神武景気と云う入社  
姓呼んでなれしくも押売りが  
縁談を持って行くにも目を選び  
母癒えてお釜は元のつやになり  
所望された家族会議で良い返事

同 植村客遊子  
同 西沢 堅持  
同 加藤 向水  
同 塚脇 笑太  
同 前野 美保  
同 林 葵丘  
同 半田 夏生  
同 中谷ハナ子  
同 林 昌男  
同 本城 弦月  
同 吉川 悦子  
同 齊藤 巖  
同 関 すゞ女  
同 山田スミ子  
同 二宗 吟平  
同 同村都三夫  
同 橋 十四呂  
同 遠山よし子  
同 奥谷 弘朗  
同 赤松 千秋  
同 萩原 竹郎  
同 夷石 鼓風  
同 富山 雪山  
同 藤沢不二郎  
同 大杉 春吉  
同 須藤 俊江  
同 永松 道雄

開店は療友母も客になり  
妻と出た時は立呑けなしとき  
塵箱へバタ屋と犬と入れ替り  
奥さんによるしくなど先手打ち  
保育園もうスカートを替えてゆき  
病んでから母の信仰目立って来  
新緑へ首学校もハイキング  
いゝサクラ酒も知らずに散り行く  
我が村の花で酔えます唄えます  
求婚の手紙女房の武器となり  
人の気も知らずあつけない相談欄  
ナフタリン臭い晴着で山登り  
三つほめ二つ叱ってよい羨  
都会から姉の土産は隆鼻術  
ませた娘にどん臭い親邪魔がられ  
プロパンガス購うて田舎に満足  
カーネーション母の赤も赤が好き  
御自慢の二階とくに貸しており  
あの頃の夢が事務所の隅で老け  
引越して来た人相が気にかかり  
会費には負けずに呑んだ二日酔  
一匹の蚊へ口やかましい齢になり  
流行語上手に入れて若く見せ  
修理費が不足の様に朱を暈し  
同窓会返信「欠」がまだ続き  
蔭口を十分聞いてもうないか  
角砂糖レモンの浮ぶ灯にくすれ  
白人の娘が座布団へ足をくみ

原田 綾女  
坂東 若芽  
野口卯之助  
高瀬 幸路  
阿部たけし  
高橋 蟠蛇  
細川 千草  
中町 三平  
本多駄目八  
小出 督生  
本田 稔  
鎮浪 錦花  
板緑 一星  
西岡 洛醉  
安並 十七  
遠山 一雨  
神庭 詩郎  
平田 実男  
谷本鈍愚坊  
木山 二路  
村井 城南  
藤富 淀月  
住谷多一郎  
正口 辰始  
堤 勝三  
笹本 茂輔  
加納 信  
満生 拜山  
永田都詩子  
野辺山清車  
宮政 周防  
山内 俊見

山陰の旅  
鳥取大砂丘と温泉  
国立公園大山へ  
是非のおいでを  
お待ちしております  
日ノ丸観光バス

決心をしたものである。それ以来  
眠れない真夜中など生命ある句を  
作れと、復讐して、一、二句の作  
句の間に、いつとはなく、安らい  
だ気持ちにもなれるし、魚は釣れよ  
うが、釣れまいが、気長な時刻を  
打ち興することも出来て、釣竿に  
は、欠かさずに黴布巾が使えるま  
でになつたのも、みんな川棚を始  
めた賜物であつたと、心から愉快  
な目を迎えて居る。

内外植木並造園  
中西栄常園

宝塚市中筋  
電話一一五番

# 七

庭園石組に七五三の手法がある  
洛西竜安寺、大徳寺真珠庵、石清水八幡等其他にも多数あるが、未だ六四二と云うを聞いたことがない、二四六の如く隅敷は、西洋趣味で、工芸作品でも多く左右対照の形を基準に発達している。即ち二がもとで、二が四となり六となる。

所が東洋は一が基準となつて、一に、婦一する思想が発達している、紫宸殿のまんなかには、高御座が一つ南面しておわします。仏様でも、本尊が阿彌陀如来ならば脇には観音菩薩、勢至菩薩が侍立する。

即ち一より三が生ずるのである。奇数は陽の数であるとして尊ぶ、月は十五日して満月となる、七五三を合すると十五となつて、陽の数が満ちて目出度いのである。漢詩にも五言、七言がある、川柳は五七五の因子をもっている、奇数を尊ぶ好みがある、かゝるリズムにも表れる、短歌にしても情歌にしても奇数に立脚していることがわかる。

けで紹介された一文を讀んだことがあつて、以来武玉川の十四字句に取附かれ、とうとう十四字のみを抜き出すことを思ひ立つた。全十八編総句数一万二千余句。其約半数六千句が十四字句で、其内から四千句を抜き出して、独り楽しんでいたのであるが、それではあき足らず、誰彼に推賞し時には京都支部句会で、特に十四字による作句を募つて見たこともあつた。

## ケロリ族 九角

大きらい抽象論は苦手なり  
たれの罪教育者をはあわてさし  
単純な事しか出来ぬケロリ族  
我が利害鋭く意見のべるなり  
教育も大陸形に子が育ち

を、頂いたのを奇貨として、少し並べて、御参考供にしたい。  
取付安い顔へ相談  
心配ごとに限らず、誰しも、何となし好ましい顔へ相談する、人  
過去を振り返つて観る時。世の移り変りとは面白いもので、その時代の流行に例えれば長くもなり短くもなり、或は丸く或は角に、千差万別人の気分を色々々々、引ずつて行くものであるが、いつか知らぬ間に又もとの振出しへ多少違つても戻つて居るような感じである。進歩発展とは人間の心のはからいだけで宇宙の大自然は少しの誤差もなく廻つて居るのである。  
雨上りの葉陰に殿様蛙のどこ吹く風と大きな臍をキョロつかせている姿も、眺めようでのんきにも見られ侮辱されるようでもある。大きな自然の流れに棹をさすことは出来ぬが自然はよくしたもので、そうキョロ／＼するに当らぬものである。いつか是正されるものはされて間違ひのないように人間世界が組織立って行くものである。このような考えが既にケロリ族に属して居るのかも知れない。

## 親生

姉が姑となると弟の処へ嫁の愚痴をこぼしにも来る。ましてや一寸事が大きくなると、頼りになるのは男兄弟だろう。  
只縫ふていて額にて見る  
手を握られて顔は見ぬ物  
仕着の不足下に着て出る  
今は最早かゝる人情に接しない、然し懐しい人情であり、私等はこゝに郷愁がある。  
呵られた夜の夜着はきせ捨  
ケロリ族借金取をよく防ぎ  
ライバルと取引がありケロリ族  
ケロリ族墓参の帰り映画館  
すりむけば矢張血も出すケロリ族  
学校へ習慣で来てケロリ族

## 鳥雀

情しらすの笑ひ大きく  
穴へ入りたい程な氣も拘まず、大きな声で不人情な笑  
今がよいとは言ぬ後添  
神楽にあたる聲は不器量  
金の減つたもたらで本服  
亡つた時に悪心はなし  
親に奢つて見せる贅入  
酔つて戻つた妻を見上る  
隣へいきみの廻る堪忍  
声を立てるといふが奥の手  
真じ目に成るが人の衰へ  
うつくし過て入れにくい傘  
女の替る女すくなし  
忘れに出たに能く似たる顔  
扱て何を書き出したのか、最初は先生の七十の賀に因んだお話をし御祝にする意図で、七字七字の句も亦目出度いと言いたかつたのが、十七字を逆に見ると七十で、因縁があつて七五五には、やっぱり勝てんのか。  
京都支部の受持つた一員を、どうするかで、二三の同人と相談し、京都にはどうもケロリ族が多いから一つケロリ族で塗りつぶそうと、往復ハガキの至急で集めた処、帰つて来たのがタツタ一枚、病氣や何かで断つて来た方は二人。さすがにあとは皆ケロリ。あつた鳥雀と、此度京都作家協会の理事になつた親生氏で役を將す。

## 京都支部編集

大正か昭和の初期かの川柳雑誌で俳諧武玉川の十四字句を取り上

# 川 倉 敷 支 部

## 田 垣 方 大

### 川 柳 の メ リ ャ ッ ト

(一)

私は十五、六年まで十五貫の体重でしたが最近十九貫あります。昭和二十二年の春盲腸炎から腹膜炎を併発して、一時は医師も「危い」と言うたらしいが、その医師の優秀な医療で冥途へ行くて歩いていたので引戻されたような次第です。それから思わしくない不健康状態が続いたのですが、たまたま二十四年秋路郎先生達の山陽柳園によって川柳を始め、約一年間は生活の苦しさも何も忘れて作句に没頭致しました。或る日今日から冬服に着換えようとするときとチヨッキの釦が全然かからない無理にかけると苦しめてとても着ていられないので毛糸のチヨッキを着用に及び其の日会社で体重を測ってみると十六貫五〇〇匁ありました。一年間に一・五貫も肥っていたのです。敗戦による社会の激変と、生活苦にもみくちゃにされた時ぐと握った川柳という支柱が精神的な苦病を取り去って、私の身体をぐんぐん健康にみちびいてくれているのでした。「川柳なるかな」

社の同僚が「君は川柳をやっている何かプラスになることがあるのか」とよく聞かれるが、私は即座に「怒ることが少くなった」と答えます。

それ程昔の私はよく怒ったものですが最近殆んど怒らない、これは私の妻が「あなたは怒らなくなった」と言うのですから間違いないと思う。私は夜は必ず十分間でも川柳雑誌を繙くことにしている、川柳雑誌を机上にして今日の出来事を川柳に纏めてみようとしていると、物事を客観的に見て自分の醜さが、はっきり判ってくるので、今日のような短慮は絶対に、つつしもうと心に誓う、川柳してつと心の平静を得られる所以はここにある、特に川柳雑誌巻頭の路郎先生の窓口談義は、そのままだ私達の教養指導書であり、処生訓であります。「偉い人にして下さい」「出世させて下さい」と神に手を合わすより窓口談義を熟読玩味した方がよほど効果があります、怒らない生活は愉快な生活です。「川柳なるかな」

## 川 柳 と 精 神 修 養

### 相 原 一 善

五月一日メーデー、この日が私の川柳を初めた日である。戦後、昭和廿五年五月一日、田垣方大氏をリーダーとして水島地区で初めて句会を開いた（これが倉敷支部の前身である）私もすすめられて簡単な気持でお仲間入りをさせてもらった。

同年十二月、山陽新聞川柳大会

で初めて路郎師に紹介していただいた時「あゝ一善君か、しつかりやうて呉れ」と言われた。

私は、ハッ、とした。川柳家としてはどうも気安い物か、この大家にして高かぶらず温情あふる言葉、よし僕もやる、作句は第二、川柳により精神修養をと、だ

が本気になって見ると川柳のむつかしさを知らされた。スランプ又スランプ、誠に山あり川ありである。何事もやりとげるむずかしさを知った。だがこの作句の苦しみがどうやら私を人間らしい人間にして呉れたらしい。

私も五月で満七年間川柳雑誌に一月も休まず投句をつづけて来た。困難とたたかう為、短気、この短気が私の社会生活に大きなマイナスをした。短気、この欠点を直す為の川柳となった。現在の私は川柳による修養が大きくプラスしている事は事実である。川柳による精神修養

これが私のスローガンである。又新しい作家にもこう奨めてい

## 名 工 の 魂

### 藤 井 春 日

戦前私の勤めていた会社の先輩で今は郷里で静かな余生を送っているKさんを訪ねた際「近頃は陶器の蒐集を始めてネ」とさも楽しそうにこれが竹泉これは六兵衛。

道入などと茶碗花瓶香炉つぎつぎと並べてそれぞれの特長を説明されるのである「中国の陶磁中では慈母のおもかげがある。殊に古九谷には「中国の赤絵にない、肌のあたたかみとうるおいが溢れている」などなかなか詳しいものである。知識の乏しい私はその一つ一つを只見つめて成程と頷いているばかりでした然も並べられた一つ一つが何となく尊い美しさをたたえ好もしい物に見えてくるのでした。それもその管全精神を打込んで作られたに違いないその生きた魂が私の心を捉えたからである。

柿右衛門が名を残したのもその作品に魂がこもって人の心を捉えるからである。人の心を捉えると言うことは私達川柳を志す者にとつて最も大切な事ではなからうか、忘れてならない熱と魂、命ある句は並大抵で生れるものではない熱のある一歩一歩こそやがて魂のこもった名句を生み出すことになる。あゝ一生に一句、命ある句を残したいものである。

険しきは命ある句へ続く道

聞いて下さい

## 野 田 素 身 郎

「川柳をつくるために恋をしてるのね」と私はある女性から言われたことがあります。そうでは

ありませんが、恋もしました。恋の句もつくりました。念のため句帳を繰ってみますと、過去七年間、路郎先生により川柳塔若しくは近作柳園に載った句の中の三分の一は恋の句でした。恋をしていましたから——今も恋をしています——恋の句が多数できたので、かつして川柳をつくるために恋をしたけれども、しているのではありません。恋はそのような思考や、願望や、理性の外のものであると私はおもっています。恋は、恋しようとしても、けつしてできないものではあります。恋してはいけない人を恋した悲劇は、古今東西の小説を繙くまでもなく、私達の身近な人々の間にも数多くみうけられるところですよ。

私はこれからも恋の句をもっともつくりたいとおもいます。人間性が最も微妙に作用する恋愛という現象は、句材として見捨てることのできない興味と、いくらつくっても、尽きることがない深淵さをもっているからです。

しかし私は私の恋にはもう終止符を打ちたいとおもっています。このような願望の外に恋愛という感情は作用するものであります

率直に言いましう。私の恋に終止符を打ちたいと願っているという事は、即ち、その人と結婚したいと願っていることにはかなりません。

どうも仕舞がのろけになりましたが悪しからず。

(川 倉 敷 支 部 ・ 編 集)



# 生きることに 無駄はない

品川陣居

路郎先生が古稀におなりなす

たので祝賀特集号を出すから何か書けとの編集部からの御下命があったので、無い知恵を、何がなと考へつづけていたが、締切期日も迫ってきたので、以下とりとめもない偶感下責めをふさぐことになる。

古稀ということとは、いうまでもなく杜甫の句に

「人生七十古來稀」

とあることからきているのだが、にんげん毎日毎日を生きて行くことは、ただ時間の経過ばかりではない。さりとして凡愚、いかに生きてゆくことに意義あらしめるかと苦慮してみても、さてとんとい知恵もうかんでこない。けっきょくは時間の流れのなかに身をうかべていられればいい方で、へたをすればいろいろな障害に遭って生きてゆくことすら不可能になる。だがにんげん生きてゆくためにいろいろなことをするが、それが無駄になるといふことはないよう

な気がする。

これは極く卑近な見聞だが、道路に、むやみやたらに紙屑をすてたりすることは「公衆道徳」上よろしくないことはわかっている。その紙屑をちらかすにんげんがあれはこそ（も、おかしなが）道路清掃人が、それを集めることとが一日一日の糧が得られることにもなる。ぼくが北京にいたころは、紙類が貴重で、どんな紙屑でも拾い集めれば「かね」になった。ところがあちらの大人（たいじん・紳士）ははなをかむのに紙をつかわないで、チンと巧みに手ばなをやる。大人がそうだから一般民衆はいうまでもない。だから道路には紙きれ一つ落ちていないので、ひろい集めて「かね」に換えるということができない。紙ではなをかむのは日本人だけである。したがってはなをかんだ紙を路にすてるのは日本人だけである。ぼくなども、そうした一人だ。

だが、奇妙なことに棄てた瞬間にはな紙は拾われてしまう——すし大げさにいえば争うようにして拾われるのである。だから北京の大道には紙きれ一つ落ちていかなかった。——清掃人も何もいらないのである。

この無駄のないということで感心したのは、ある雑誌から依頼されて、レポを取るために、隅田川畔にある「蟻の町」（組織的・もはんのバタ屋部落）を訪ねたときその仕切場で、その会長さんの話をきいたが、この世の中で無駄というものは一つもない——というのが主張であった。ポロ製、鉄屑、ガラス瓶、片方の靴、エトセトラ、何でも拾い集めてきたものが、分類処理されて、それぞれ生産資源として生かされてゆく。その会長さんは、拾い集めた片方ずつの靴を履いて平然としていたのを見たが、ぼくナルホドと感心したものである。もうすこし、にんげんくさい話

に戻すと、ぼくが青年の頃、春宵——としておこう——いわゆる「源氏屋」（ほんびき）につれられて、ある家に——女のいる家に行ったのであるが、そこにいたのは、昔のことで教え諭十五か六にしかみえない少女で、しかもその家は、その少女の両親の家であった。

だが、なかなか少女は、ぼくのそばへあらわれなくて、しばらくしてうるうちに、隣室がざわめいて食器のふれる音がする。めしを食っているのかとおもっているやがて少女があらわれ、お待ちになつてすみません。あたしの家では、あたしにお客があるとお祝に「おそば」をたべるんです」といふ。ぼくは啞然としたが、おそばはそうではなくて、娘に客がなければ食事にも事欠くように寛えた。その頃、川端康成の『浅草紅団』（くれないだん）が好評を博していたので、宛然ぼくは名作の一シーンをみた気がしたが、少女に売淫さすことの是非はいうまでもないことだが、その一家の者が、それによつて一食の糧を獲るということとは「無駄」ではないのである。

もうひとつ「恥」を御披露すると、戦後の混乱時代、新宿駅頭には、ひと待ち顔の女が立っていてなかなかその場から去らないのである。だから遊心をもつた男たちは、それらの女に当つてみるので

古稀祝賀

川上日車

古稀祝賀

水谷竹莊

古稀祝賀

加納山茶花

あるが、ともかく駅頭だし、乗客としてそこに立っていることはありうるのだから、そうした素人（しろと）さんに、へたなことをいって恥をかくのだから、そうした素人めいた無言の女のうち三人に一人は「そのつもりで立っているのがあって交渉はスムーズにいくのが常であった。」

ある宵、ぼくは四十をもう三つ四つ出たくらいの中年の女に、  
 「勇敢」に当ってみるとOKしてぼくといっしょに歩き出したのである。

その中年の婦人は、どうみても売色人のカテゴリーにははいらない面差しであったが、持った手さげでも身なりでもさっぱり小ぎれいで、どうしても新宿へ小買物に出てきたとしか見えない風姿である。

ともかく近くの温泉マークへつれこんで、いろいろ話をきいてみると、アパート住いで中学生の男の子がひとりある未亡人で、二、三日前から駅に立ってみたというのである。すこし稼ぎためて小商内をしてみたい念願だという。

夏のむしむしする宵であったから、きているものを脱ぎすてたのを見ると安ものでないレースの長襦袢をつけていて、乳房もしなびてはいず、まだ売色の資格は十分あるとみえたのである。おそらく中産階級の出で戦災から身辺の急転に女としての余燼をかきたてて

街（ちまた）に立つ気になつたものらしかった。

これも、その婦人にとっては何「悪」でも「罪」でもないのである——無駄ではないのである。

×

そこでわれわれは川柳を創ることには無駄はないか——と自問してみる。

路郎先生が、おそらく半世紀にもわたって川柳を創りつづけたらたということを考えてみると、これはいまさらいうまでもなく大へんなことである。しかも永年にわたって本誌を主宰していらして今日の盛観をみるのは、いつに先生の御努力ばかりでなく霞乃夫人の一筋につながる御助力のためのものであるが、ただ三十年、四十年川柳をやったからとて、先生のひんにならうことは出来はしない。先生の幸運であつたと片づけてしまふことも当らない。それなら何であるか——ということになれば、これも数千言ついでいしても言いつくせないであろう。

ただ、ぼくごときが想像しうるのは、先生の有名な、あまりにも有名な「いのちある句をつくれ」に根源があるのではないか。先生がこのジャック・フレーズを川柳雑誌の「錦の旗」にのせられるまでには、うかがい知れない深いお心がひそんでいっているからである。

ぼくの「にんげんの生きること

に無駄はない」という考え方を、先生のお言葉にのせて頂くとすればどうだろうか。

「生きてゆく」「いのちある」という二つのことばの相似性からぼくは何か先生のお考えの底にふれられる気がする。ぼくの偶言——はなをかんだ紙をすてることにも、売色の女を相手にすることにも無駄はない——とすれば、ましてもろもろの日常を生きてゆくことをソース（取材）とする川柳創造であるから無駄のあるはずはないのである。なればこそ半世紀の永い間、一筋に川柳道におつきし下さることも出来たのであり、これからも「いのち」のお有りのあるかぎりおつきしなさることのできるおともうのである。

君見給え  
 ほうれん草が  
 伸びている

先生の玉吟である。道ののへのほうれん草が伸びていることに、「君見給え」と注意をかんきされた——とだけでは「お心」も推しはかれないが、伸びるものへの注視——これは先生のたえざるお心

でなくてはならない。ぼくごとき「人生」はただ生きてゆくだけで、それが自分の周囲に「無駄」な存在でなかつたと、せめて揚言してみるだけで、何の計画性もなく、まして意識的に周囲をとりまわすためてゆく才能など微塵もないのであるから先生の「大」にたいして「小」という比較をするさえおぞましいのである。

東京では、この五月十一日、前田雀郎氏の還暦祝賀大会があつて二百名近い来会者があり、盛況だつた。つくづくおもつた。これには、これもやはり雀郎氏の人徳というより、永年にわたる周囲への気のくばりと心の包摂であつたとおもう。

路郎先生の不朽洞会員のチーム・ワークと同様、雀郎氏の丹若会同人の献身——やはりこれなくしては西も東も川柳は巨きくならないのである。

×

せつかくのお需めにたいしてつじつまの合わね不文で恐縮だが、おかげで何か心の温さを取りもどしたおもいに、うれしく摺筆する。

〔昭和32年5月17日〕  
 （東洋経済新報社編集局）

旅 飯

**田毎荘**

心 斎 橋 大 丸  
 北ノ辻 東 入 丸  
 電話 (27) 八八六〇  
 三二一九

<p>唯一の庭園雑誌</p> <p><b>日本庭園</b></p> <p>電話 京都上③1999</p>	<p>川柳雜誌社</p> <p>古稀祝賀</p> <p><b>京都支部</b></p>	<p>川柳雜誌社</p> <p>古稀祝賀</p> <p><b>堺支部</b></p>
--	---	--



写真右から(前列) 藤平、味平、とよ、俊夫、(中列) 一廣、恒雄、光郎、光雄(後列) 全博、武高、久雄

川 大 聖 寺 支 部 編 集

消 息

当支部では、常連で通る柳人は十七名余りで、後はフリーでいるので、この辺りの加減にいつも苦心を払っている。

七十代が一名、六十代も一名、五十代の四名、四十代には五名で三十代に三名いる、二十代になっても三、四名を出ない。ところが、この数字から判断しても、五十代四十代が中堅で、作句力の方になると、句会には出席はしたいが、恥かしいやら、くすぐったいやらで、おっさんばかりの句会ではないかと、なかなか進めには応

じて呉れない。作句馴れをする、相当な作家になれるのにと、喋らして貰うだけのことで、興味は持っていない、大胆にやってみる者はほんの僅しかおられない。これは、当地方ばかりではなく、どの支部でもそうであると想っている。

路郎先生は、古稀に達しられても、いまだ情熱は燃えに燃えと、柳界の先頭に立つておられる。私達も後れてはならないと、励ましている。

散 文

笑 え な い

私にとって、一番苦痛でならなかったのは、小学生時代の遠足や運動会の時です。席の一人が欠席しますと、一番びり、私は、手を繋ぐ相手もなく、独りぼっちに成るので嫌でした。私も、美人で背も高く、人並みであれば、今頃は産婆にも成らずに凡人で終ったでしょう。今から三十五年前、大阪日赤小児科の青山太郎先生のお宅から、新町の緒方産婆科へ、背の低いのが、チヨコく走り通った頃を懐かしく思い出します。緒方時代には、安岡珊枝郎先生に御世話になり、永い間消息が絶えておりましたが、川雑で、先生の御無事を知り本当に嬉しく思いました。此頃では横が太ってデブの産婆で馴染まれております。

昭和三十年二月九日のアサヒヒラフに、風がつたえた話、楽しい産婆と題して、当町御出身の作家

随 筆

眞 実 を 発 見

中松 恒 雄  
昨年の五月、石川県で発刊されている、地方柳誌に私は、次の様なことを書いた。

「入園児が少なくなったので入る方、幼稚園の先生や施設を自由に選んで入れる様になった。先生の方、試験されることになった。大試で、誠誠結構なことである。大試などでも入る方のお客さんが試験をされると言う様な妙なことが、長らくの慣習で行われているが、先生を試験して、良い先生のいる学校へ自由に入れる様にしたものである。」

そして、筆者自身さへこんなことは、夢の様なことだと思っていながら、数ヶ月後の文芸春秋八月号の六十三頁に、私の任んでいる片山津町出身で雪の研究で知られている、北海道大学の中谷宇吉郎教授が次の様に述べた。

「アメリカの官立大学では、入学試験をしちやないんです。という事は、国民の税金を出している人々のんだから税金を出している人々のものだ。そこで、教えるわれわれは、使われてるわけですよ。持主の子供が入ろうというのに、使われる者が、入っていないの悪いなんて言えないわけです。」

以上のようなわけで、日本と、アメリカの開き、国更なが思い知らされた。貧乏国日本では、何かいいことも話をすると、そんなことは理想論だ、空想に過ぎないといつて、一笑されてしまう。

所が、我々日本人が、空想だと思っている事が、アメリカでは、ちゃんと、現実に行われているのだから驚いてしまう。川雑ハワイ支部の浪之助氏の句に  
処方箋一枚が二千円するらしい。  
というのがある。あちらでは、処方箋一枚が二千円するらしい。日本でも、あちらさんの真似をして、医薬分業にはして見たが、処方箋料十一円五拾銭では、何時の日か、完全医薬分業が出来ましようか。大体、憲法にも児童憲章にしても、言うてあることは仲々立派だが、あれは、皆理想なんだぞうだから、日本では、良い話を耳にしたら夢を見ているんだ、ということをおかねばならない。

漫 筆

鼻 放 談

那 谷 光 郎

一体鼻とは何の役目をするものか言うまでもなく臭覚を司どり又一つの呼吸路でもある。今ここで医学的の検査をしようとは思わな

を作る為の造物主のいたずらと考えたらどんなものだ。だから鼻の造形は色々とも変っているのだ。これからは鼻眼鏡をかけてとくと見ようではないか。

高く鼻筋の通ったのはとかく自尊心が強く優越感情の多い人だ。鷹鼻は理知に富んでいるが接吻には邪魔である。一番感じの悪い鼻だ、お、魔法使いの悪婆よ。安座をかいた団子鼻、これはお人好しの象徴みたい、漫画だ漫画。天井が臭い鼻、何と聞抜けに見える事よ。鼻柱の強さ、天狗の鼻ならへし折ってやるべし。折られてからは人間になる。鼻毛を抜かれることのない様に眼尻を下げぬこと、恋にも商取引にもチト御用心御用心。鼻息の荒いはお傍へ寄れない。吹とばされる。失敗すれば自然治まる。放とつけ放とばさる。鼻じろむはご気嫌の悪い徴候、まさか紅くも黒くも塗れま

い。ならばそのまま大マスク。シッ食った報いの鼻は鞍鼻だ。昔はよく見掛けが文化のお陰か近頃は見たことがない。鼻を鳴らすのは不満たのふくれ顔、何とかなだめてごまかせよ。世の亭主よおほむね心掛けて然るべし。こんなことを言えば切がない、皆さんもとくと鼻眼鏡をかけて変った鼻をお探下さい。自分の鼻に就て感想を書けと言われたら、鼻がために恥かしい思いの人もあり、自惚れて堂々と書きなぐる人もあろう。顔の中央に鼻座する只一個の鼻が何と人生を悲喜交々に交錯させていることか。世の中に鼻柱を境に左右両顔が真の対象をなす人が幾人いることであろうか。

正本水客

時は明治四十四年、人は青年十松、と言つてもピンとこないが、路郎先生その人の前名だと言われると、おのおのことがピッタリしない気がする。

名前と云えば、人からも時々聞かれて答に困っていることであるが、西洋をマスターこそすれ、かぶれておられるなどは絶対に思えない先生が、おどさん方に、ロンドン、アスト、リリ、ポー、と一連の名付けをされた心構えについて、お渡し願えればと思つて、記念券で言いたいことを言うべしと与えられたので。

松川杜的

「糞尿譚」ではないが、お視いの記念券に臭い話を書いて申訳ない。便所にも一枚カレンダーを貼るのが僕の趣味、毎年あちこちから貰うカレンダーの内一番美しいのをそこに貼る。句会の予定や家族の誕生日等に〇印を付ける。

あわたししい中にも出勤前の五分は心のゆとりをあたえてくれる。そしてカレンダーとにらめっこしながら、その日のスケジュールができあがる。

野村初甫

ゴールデンウィークに超満員の「月光」で箱根熱海の旅に出た。箱根八里をバスにゆられ、白と緑の春衣裳の富士もおどきらしく印象的に眺めた。

箱根バスこころは籠で通りたし箱根から見る富士山も春姿。芦の湖へ旅のつれを捨てて来た夜は熱海泊り湯上りの浴衣にハッテン姿の五人、ビール二本、酒二本を持て余し、そこそこにカメラ脚を伸ばし始めた。

植村客遊子

醜い顔の人も手術で美しくなっている。昨今、姫路の国宝白鷺城も昨秋から其の美容手術に着手しました。これと前後して、当姫路に川柳と言ふメスによつて心もスッキリした人間にならんものと、大阪の水客ドクトルを主治医に、アシスタントは地元ドクトレス時実新子女史と、鉄道病院の東西事務局長以下、俗に云う国鉄一家のクランケ、七十名が作句に精勵、去る五月十九日には、新緑を訪ねて吟行も味うところまで参りました。

永尾永断

遍路は一人でも同行二人と書く。大師と共に歩くからだ。先頃、母を誘つて遍路の旅に出た。年が年なので乗物を利用しての巡礼を計画していた。

四国の土を踏んだ時、そうするのが当然の如く歩き出した。母の信仰が、乗物による安易な遍路を拒否したのである。この気持は川柳にも通じる様に思う。川柳と同行二人、こんな事を考

久保和友

句会に出席すると国鉄職員制服を着ている人があつてヒヤッとした。これが私の句作を始めた頃の想い出である。終戦間近して何もなかったから制服もよかつたのかも知れぬ。他の人も奇妙なものを着ていた。いま思えば面白い現象である。食うものがないのに川柳を作っていた。いま句会へ行くのに制服をやめて背広でいく国鉄職員が多くなつた。

吉原紅月

初めて逢つた人に、よく、あなたのお住いはと尋ねられて、私は困るのです。仏様の阿弥陀如来と同じ阿弥陀町と言う奇妙な名前前の土地だからです。「何か仏様と関係があるのですか」と問ひ返されます。勿論仏教とは関係深く、小さな町に似合わぬ程お寺の数もあり、「ではあなたの土地の人達は皆慈悲深くよい人ばかりでしょうね」と反問されます。ここで又当惑するので

淺野瓢太

作句の上に於いて、いつも考えさせられるのは燃焼不足と言うことである。余りにも生々しい素材は、現在の私等にとつては感情が先走つて表現が自由にならぬ。哀しみを突放せ、喜びの底を見よと絶えず先輩に指適される。そうして無理に自分を哀愍の外へ引きずり出して句を作っていると、自分一人が力んで悲壯がつているのに気づいて何だか変な気になる。本職は機械屋で日常の仕事は絶えず図面とか数字を追ひ乍ら、どうも感覺的に物を言うたちらしい。感情を冷徹に処理することは写実味の乏しい自分にとつて目下の急務であるが、まだまだ遠いことの様

黒川紫香

飛弾高山の手前に小坂と言う駅がある。ここから御嶽へ登る途中に物静かな温泉があつて、近くの下呂とは反対に湯治場と言つた感じでもしていいと思つております。

菊田いさむ

T市へ出張して大阪駅へ帰つて来た私は、車を拾おうと思つて、駐車場の方へ歩いて行くと、横から急に一美人が私の所へやつて来て、「あたしの車にお乗り下さい、お送りしましょう」「はッ」と私は返事をしたが、まるでキツネにつままれた様に私は乗つてしまった。

その美人と私を乗せた車は、市内を離れて、郊外へと急いだ。車内にはふんわりとした香水の香り。やがて洋風の、しようしやな建物の前で車は止つた。事此処に至つて私は大きな気持になつてしまつた。先に降りた女はドアを開けて私が降りると先に立つて「どうぞ」と言ひながら美しい部屋に私を案内してハンドバッグの中から手の切れそうなお札で十万円、ぼんちと夢の眼の前へ。こんなウマイとは思ひませぬか。

塚脇笑太

私の一生に、この様な問答が何十回となく繰り返されるでしょうが、私は、阿弥陀如来のように常に微笑をたたえた慈悲深い顔だけどもしていいと思つております。



3 3 3 川 柳 会  
・ 編 集 ・

# 年齢を超えて

川 村 好 郎

八十になつても二号が欲しい  
これは自称三十五歳の松江梅里  
を見ての拙吟である。家業の精進  
振り、句の若々しき、彼を知る人  
は孫が二人もあるいゝお祖父ちゃ  
んと誰が思うだろうか、正に汗と  
情熱に燃る青年である。

い艶

歳は大厄、男の四十二歳は大厄と  
忌み嫌ひ恐怖を抱いて迷信と知り  
つゝ自分が其の年齢になると  
厄なんかあるもんかと気にし  
てい

好 郎

恩師路郎先生は還暦祝賀会に、  
「六十一まだ情熱は燃えに燃え」  
と詠まれ我々を鞭撻された。しか  
も今年は古稀を迎えられなおおかく  
しやく、情熱は愈々燃えに燃えら  
れている姿を仰ぎ我々門下生は如  
何に感激し敬慕していることか。  
我々は年齢を忘れねばならぬ。  
年齢を超えて精神は情熱たぎる若  
人でありたい。

昔から女十九歳は厄年、三十三

となるのである。我々は困苦、  
災厄、失敗を自己の責任を回避す  
るために、もの云わぬ年齢や姓名  
に其の罪を負わず卑怯を持つてい  
る。女十九は「重苦」苦が重なる  
三十三は「惨々苦勞」する、男の  
四十二は「死に」に通ずると解釈  
をするのである。私はこんな考え  
を持つている。  
女は十九に限らない。十九歳前  
後は所謂思春期に入り肉体的にも  
精神的にも変化がある最も注意す  
べき年齢であり、将来の半数の力  
を養う年齢である。

倫落の女うちの娘と伺い年

好 郎

青春をなぜ虫ばむか療養所

好 郎

女三十三前後は女性として社会

的にも家庭的にも最も忙しく重大

な役目を果たす時であり、大厄に非

ずして「大役」と解釈したい。家

にあつては妻の役、母の役、まだ

子の役が残つてい、この年頃に未

亡人になる方は一層大役であり、

少くともこの三役を一日に何回と

なく繰返し大江美智子そののけの

早替を演じなければならぬのが女

の三十から四十頃までの年齢であ

る。

妻の夏洗うては干し洗うては干

し

である。男の四十から五十は男の

「大役」である。肉体的にも老境

に入り、社会的的地位も出来、一

生の事業の乗るかそるか緊襪一番

生き甲斐を感じる時もある頃、ま

た没落せんか、容易に立上れない

時もある年齢である。

五十からですよと女将にお

だてられ

年齢と肉休、年齢と境遇は切り

離すことの出来ない関連があり支

配さるゝことは否めないが我々は

こんなに信じたといえ幾歳であらう

と精神は常に希望と喜びを忘れて

はならない。私はこゝに川柳の有

難味をしみんと感じ川柳によつ

て生活のうるおいを得、順逆を通

じて生きる道を教えられ人生の味

を知らしめられていることを感謝

せねばならない。

生々庵民が還暦近しと誰が思

う。春路、栗、文蝶氏の不屈な若

き、小松園氏が五十半ばとは驚

く。白柳子、香林、豆秋氏は頭は

禿げてゝも情熱は禿げてない、房

々々している。水客、潮花、柴香氏

の川雑トリオの万年青年を見よ。

青年路郎師に続こう。先生は

「生命ある句を削れ」と教えられ

ている。肉体はやがて減びるのであ

らう。我々は句によつて永遠に生

きねばならない。

## 3 3 3 川 柳 會 (堺市)

川 村 好 郎 選

そんなにも禿げてないかと

鏡見る

鏡の顔どうやら自信がつい

たらし

それ程に見たい自分の顔か

いな

正直に写る鏡でいやになり

慕詣り無縁仏も拝んどき

雪 山  
高 志  
狂 二  
千 里

くされ縁ですわと女房折れ

てでる

縁あつて二号としての厚化

粧

これも縁などとうまいこと

金を借り

アメリカの桜やっぱりパツ

ト散り

半分はあきらめて待つとい

便り

半分で工事打ち切る市の予

算

半分を手形で貰つたのがか

り

半分は前借りしてる退職金

算

座布団も世帯の疲れにじん

で居

真すぐに生きて無欲とも言

われ

無理は承知ですと寄附が回

つて来

その翌日割引無理とはもう

云わず

明日の事分らないからねむ

られて

呑み仲間明日を約してその

まんま

梅 里

# 交通 雑感



## 若本多久志

祝吟  
十七字逆さにしたら  
古稀の数  
(多久志)

最近、交通機関の混雑は日増に激しくなり、朝夕のラッシュにはサラリーマンの悲哀をかこつてとまさない有様、加えて次々に起る悲惨な交通事故、さては自動車強盗の出没、ETC……実に交通対策こそ由々しき社会問題としてクローズアップされてきた。

この世相を我々川柳人はどう観ているだろうか。机側の柳誌から共感の句を二三、拾ってみることにしよう。(作者省略)

毎度御乗車有難そうな声でなし私鉄の改札口でよく聞かされるこ

わないが、せめて当分ストでも遠慮して欲しいものである。

二両目へ用心深い顔で乗り

こう事故が多くてはうっかり、汽車や電車にも乗れないが、やむを得ぬ時は安全率の高い、二両目が三両目への御乗車をお勧めする。

観光の秋に冥土へ落ちるバス

何ヶ月も旅行貯金をしてやっと思つた団体見物が未だ目的地へも着かない先に、蜚へ転り落ちて、そのまま冥土へ行先変更とは余りにもミゼラブルな。

対策は樹てず踏切地蔵建ち

日本人の非合理性を如実に物語るこの種の地蔵さんを随所に見かけるが、さぞやカラスもとまらんだらう。

強盗じやアないぞと乗り込む

午前二時

深夜のタクシーを止めると時々、強盗じやアないかと一応警戒される。ノイローゼの運転士さんへは思いやりのつもりで左にあらざる事を表示してやること肝要。

人相の悪いタクシーやり過し

きれいな車体で、スマートな運転士の車に乗りたいたいのはやはり人情とでも申しましようか。

運転手浮世の嘘に馴れた唇

どんなに用心深い人でも、兎角タクシーの中では明けつ放しで密談をやる。黙々とハンドル握る運転士には耳がないと思つてゐる

のか、話の内容は、金、女、酒あらゆる社会の裏話、嘘あり、まこと少なく面白い。

エンツツてやれとバッジは議員

議員のバッジは国会？市会？兎に角、運転士に不正行為を強要してまで、タクシーに安く乗ろうとする根性は風上にも置けぬ。

運転手ここはどこやと酔が覚め

こんなお客がよく車内で八百屋を開いて臭いしまつをさせたり、文なしで自宅まで送らして、妻君に嗷鳴られ、夫婦喧嘩が片付くまで料金も払つてくれないことがあるとか。成程、タクシー運転士も苦勞の多いことだ。

人間は弾力性の満員車

弾力性という言葉は実に満員電車の間隙から生れた言葉であるう。

満員車急なノツチでゆすり

込み

これも善良な乗客がよく食わされる手だ。入口にはばかり立っている乗客も悪いが荷物の様に扱うとは言語問断、安い定期でも運賃は払つてゐるんだぞ。

満員車師病やぞと言うたる

か

呼吸も出来ぬ位に押されてくる「わしや、肺病やぞ」と怒鳴つてやりたくなる。

十二貫皮もなく宙に浮き

こうなると衰れと云うも愚なり。

同僚であろうが男押しして乗り

近代女性の勇猛振りにはラッシュの時に遺憾なく発揮される。気の弱い男性はただ、アレヨ、アレヨ。

満員車に乗ってしまったら早く出せやましい日本民族もひと度、乗りものに乘ると異状心理になるらしい。然しこれが偽らざる人間か。

子よ見るな押し合つて乗る

朝の父

朝の食卓でお説教した父親も、さて通勤の停留所では人を押しつけてでも乗らねば遅刻の憂目のみ。然しこの浅ましい姿だけは親子達に見せたくない親心の反省。掛けられる電車何やらスカミたい

乗物は何時も満員という常識が、偶々、空いた電車に乗ると変な錯覚を起すことがあるし又、頼りないこと夥しい。

終電車男敗した顔がゆれ

夜、十一時頃から終電まで、車内は妖しい脂粉の香が漂って、男敗した佳人達のツンとした顔がゆれている。

終電車馬鹿な男と佳い女

ゲンゲンに酔つた中年の馬鹿男と、そんな男達がいるので生活の糧を得ている麗人達が、乗り合せている終電風景はなかなか面白いコントラストだ。

(不朽洞会・副理事長)

祝 吟

川 雜 鳥 取 支 部

古稀祝う美酒めぐり感無量  
大阪の空へ古稀を祝う念

永遠の情熱古稀は古稀でよし  
色つやの良き還歴と思ひ込

川柳の情熱若さおとろえず  
青年をしのご情熱燃えさか

古稀だとも思えぬ若さ句に  
生きて 茗 人

古稀だとは見えぬ丈夫な飲  
つぶり 耕 民

献盃へ百里の道を馳けつけ  
ん 日 満

お目にかかつた  
事ども

杉 谷 湖 山

昭和の初期に川柳を習い始め、  
当時の川雜に第一線と言つのがあ  
り私の句もようやくそれに載せて  
頂ける様になつた頃、当時玉出に  
お住いの先生をお尋ねしたが先生  
はすでに当時筑前橋詰にあつた事  
務所にお出かけの後とて葎乃先生

のお供をして先生にお目にかかつたのが最初である。あの眼鏡奥から本気で川柳をやるとどううか、と言われる様な気がしてぶるうとした事を今も覚えてゐる。初めて鳥取にお出になつて今は亡き鉄州兄等と一文字と言つて宿でお話を承りましたが、何んの宿も思つて出来なかつた事を今残念にも思つてゐます。其の後出雲市、米子市の大会でお目にかかり、次いで三十一年大阪に於ける新年句会でお目にかかつたが、何んと言つても三十一年五月十三日に鳥取で催された川柳大会に於ける先生は、私の生涯に於ける幸福であり生涯の記念として心の奥に保存したいと思つておられます。

路 郎 先 生 と の

初 対 面

青 木 遊 星

私が日満さんの御指導で、戦後川柳を初めて川雜を読み出した其の頃より、麻生路郎先生と誌上で御会いする様になつた。然し先生はどの様な御人か一度面接出来る機会の到来を待ち続けていたが、案外其の機会に接する日が早やくやつて来た。それは私が不朽洞会員にしていただいた、昭和二十五年九月十七日岡山の弓削で開かれた、第二回西日本川柳大会の席上で初めて路郎先生に御会いする事が出来たのである。然し私の考え

ていた先生のかんじというのが初対面の第一印象と少々くい違つてゐる事にまごついた。なぜならば先生が、席上に御入りになる横顔、御席でのすまされた顔何んと固苦しむつたしそうな御人と感じたからである。がしばらして閉会御話を始められるや、情有り涙有り、こつけない有り、やわらかみのある個性のじみ出た見事なる話術に、私の初対面印象の間違が一時にしてふつとび、さすがは川柳の父我等の師たるの感が私の胸に焼きつけられた。其の後弓削で四、五回米子で一回と御会いする度に増々親密感をおぼえ家族的なふんいきに私はとけこんでいった。然し何んと言つても先生のあふるるばかりの人生味を身近に味あわせていただいたのは、鳥取での第一回山陰川柳大会で、前夜祭の三朝又当日のこんしん会で有つたと私の胸中がはつきりと教えてくれる。あの時以来私は川柳をやつてゐる自分の幸福、有義義愉快さをはつきりと再確認致し益々川柳道にてつしたいと邁進致しております。

先 生 を 語 る

増 田 耕 民

霞に生きると言ふ仙人ならぬ横山大観画伯は、あの高齢で酒のみで生きておられるとき。思うに画伯は、絵画最高の美と酒に溶け

込んで俗事など毛頭意に止めず、それこそ澄み切つた大自然其のまの心境になりきつたまつたく文字通り超人間的な存在である。麻生路郎師をこれと比較対照することとは甚だ迷惑なことかも知れぬが何んとなく相通する点が非常に濃厚で有るよう思えてならないので敢て述べさせて頂く。路郎師は酒のみで生きられぬは勿論であるが、飲酒家を量的でなく好みをとる言ふ点からこれを上申下に区分すれば、上の部の首位程度とお見受けする。そして、明けても暮れても、時に夜を徹する川柳一筋の日々である。其の間俗界の雑音が流れ込む間隙がない。否流れては来るがそれを洗練浄化して川柳化されてしまふのである。俳聖子規の病床吟に

句を関すランプの下や柿  
二一〇

と云うのがある。闘病尙俳句を捨てぬ不屈な其の面魂が見えるようである。これに対し路郎師は益々健康で豊饒瘦軀、鶴の如き容姿に脈々とその魂が躍動し近作吟の  
◎ 大学れたか花火あげたいほど  
うれし

にうかがえる如く、烈々たる其の情熱將に対照的好一对である。長い今迄の御生涯を川柳一途に生きられ、将来も亦亦久しく生きて行かれる師こそ大観子規と共に其の道へ真に溶け込んだものと云えると思う。酒についても私は川柳的に飲み川柳的に酔うようになり

たいものと思う。これについては人各々個性が有る限りそんなことが出来るかと云う反論や、それは一体どのような意味かと云う疑問が出ると思う。先きの個性云々に付いては縁なき衆生かも知れぬ、後の疑問に付いては言うに言われぬ妙味で路郎師の飲つ振り酔つ振りがそれでであると答へたい。川柳に徹し溶け込んだ心境こそが自然にそうなるものかと実は過般鳥取川柳大会に来鳥された時此の目で見て、其の映像が眼底に灼けつてゐる。こうした飲つ振り、酔つ振こそ、自己のみでなくたくましくとも周囲を愉快になごやかにする。醇漢といえども用捨なく刑すべしなど物騒な論議も自然消滅である。然し所詮は人間である第三者の批判を受ける面の有ること当然である。殊に特異な個性を活かして吾が道一本にまっしぐらに突き進む人はそれが鮮かに淨き彫りされて来る。だが然し、そしてそれが盲目的でないだけに美化され浮化され、詩化された高度な情操に包まれ覆われて人を引きつけ仰がせる颯爽として枯淡な風格になるのではなからうか。師は本年古稀を迎えられるのであるが、壯者を凌ぐ御健康振りととく。益々磨かれた高風は川柳界にどしどし吹き込まれることと吾々の期待は大きく御自愛を望むや切なるものがある。書けばまだまだつきぬが大體に於いてこれが私の路郎師観である。

川 雑 明 和 病 院 支 部 編 集  
路 郎 先 生 の 古 稀 祝 賀 行 事 を 心 か ら 御 祝 い 申 上 ま す 。  
支 部 長 西 尾 青 一 路

### 川 柳 と 信 仰

瀨 崎 紫 路

傷 心 へ 柳 魂 は す ば り 見 ぬ い  
て 居  
川 柳 と は 何 か ? 質 問 さ れ て も  
我 々 未 熟 な 者 に は 正 解 を 興 える 事  
は 出 来 ま せ ン 。 そ れ も そ の 管 師 と  
し て 仰 が れ る 先 生 方 は 十 年 廿 年 と  
川 柳 道 を 歩 み 此 処 に 川 柳 家 と し て  
の 地 歩 を 築 き 、 来 る 日 来 る 日 の 廿  
四 時 間 を 将 来 も 精 進 さ れ る の で あ  
る か ら …… こ う 書 い て 来 る と 川 柳  
と は 大 変 骨 の 折 れ る 物 、 又 難 か し  
い 物 の 様 に 思 わ れ ま せ ン が 決 し て そ  
ん な 物 で は な く 何 処 に で も 川 柳 の  
題 材 は あり 、 誰 に で も 川 柳 は 作 れ  
る 物 で あ る と 思 い ます 。 療 養 生 活  
を し 乍 ら 何 か を 求 め て い た 私 が 此  
の 様 に 手 近 に あり 川 柳 に 心 の 灯 を  
見 出 し 今 の 私 に 取 っ て は …… 川 柳  
は 唯 一 の 心 の 友 と 成 り つ つ あり ます  
。 水 谷 鮎 美 さ ん 「 川 柳 は 宗 教 に  
通 ず る 物 で あ る 」 云 々 と 言 う 言 葉  
が 私 の 脳 裡 を 離 れ ま せ ン 。 成 る 程  
鮎 美 さ ん に し る 青 一 路 さ ん に し る  
栗 さ ん に し る 揃 い も 揃 っ て 血 色 の  
良 い ゆ と り の 有 る 、 実 に 羨 望 晴 ら し  
い 円 満 な お 顔 で あり ま して 、 此 処

に 川 柳 が 円 満 な 人 格 に 達 し 得 る 信  
仰 へ の 道 で あ る と 感 じ 取 る の で あ  
り ます 。 結 局 川 柳 と は 何 か と 言 う  
問 題 に 対 し て は 皆 様 の 顔 形 が そ れ  
ぞ れ 違 う 様 に 個 々 の 主 観 に よ っ て  
各 人 各 様 の 解 答 が 出 る の で な い で  
し ょ う か 。

私 の 主 観 と し て は 川 柳 は 一 に も  
二 に も 楽 し み を モ ッ ト ー と し 、 野  
心 と か 感 情 問 題 と か 、 抜 き に し た  
お だ や か な 気 持 ち で 毎 日 の 療 養 生  
活 を 送 り たい と 思 っ て お り 又 そ う  
す れ ば 知 ら ず 知 ら ず の 内 に 信 仰 の  
道 に 合 致 す る も の と 確 信 し て お り  
ま す 。

### 川 柳 と 私

副 島 夢 人

私 が 川 柳 を は じ め 出 し た の に も  
次 の 様 な 理 由 が あ っ た の で す 。 病  
氣 療 養 で ベ ッ ド で 終 日 横 に な っ て  
暮 し て い る と 、 病 人 と い う も の は  
病 氣 の 事 、 他 の 諸 々 の 碌 で も な い  
事 を 考 え て 煩 悶 し ます 。

「 死 ぬ 事 を 忘 れ て い て も み ん な  
死 に 」 と 言 う 句 を 心 経 講 義 の 中 に  
書 い て 、 高 神 覺 昇 氏 は 、 死 へ の 諦

観 を 述 べ て お ら れ ま せ ン 様 に 、 一 度  
は 人 間 死 ぬ の で す が 凡 夫 の 悲 し さ  
意 味 は 良 く 解 っ て い る つ も り が そ  
の 様 に 淡 々 と し た 気 持 に な れ ませ  
ん 。 又 欲 求 不 満 を 他 に 昇 華 さ せ る  
意 味 に お い て 、 何 か 病 氣 に 害 の 無  
い も の で 人 生 に プ ラ ス す る も の は  
無 い か ? 休 は 動 け な く と も 、 暇  
と 時 間 は 十 分 過 ぎ る 程 有 る の だ か  
ら …… こ の 機 会 を 大 に 活 用 し て

自 分 の 祝 野 を 広 め 、 考 え 方 を 豊 に  
し ょ う と 思 い 、 そ の 一 つ の 手 段 と  
し て 川 柳 を は じ め ました 。

始 め て み る と 、 一 つ の 兼 題 に 対  
し て こ れ こ れ の 見 方 が あり 考 え 方  
が 有 る と 思 っ て 、 自 分 で は 、 あ ら  
ゆる 場 面 を 考 え て 作 っ た 積 り で も  
他 の 人 々 が 作 ら れ た も の を 拝 見 し  
て み る と 、 な る ほ ど こ ん な 考 え 方  
も あり 、 こ ん な 見 方 も あ っ た の  
か !! ウ ー ン !! と な ら ざ る を え  
ま せ ン 。 先 生 方 に 直 し て 戴 い た の  
を 読 ん で み る と そ の 表 現 方 法 に よ  
っ て 、 確 に 自 分 と 同 じ 事 を 言 っ て  
あ っ て も 、 深 み と 、 広 が り が 有  
り 言 葉 の 使 い 方 で か く も 変 っ て く  
る も の か と 驚 く の 外 あり ませ ン 。

の 心 の 転 換 法 で あり 、 休 も 使 わ ず  
に 勉 強 出 来 る と い う 事 が 強 み で こ  
れ が 一 番 氣 に 入 っ た 次 第 で す 。 あ  
ま り 欲 張 り で し ょ う か ? 他 の 療  
養 の 皆 様 は 如 何 で す ?

### 鳴 尾 の 松

樋 口 舟 遊

最 初 に 麻 生 路 郎 先 生 の 古 稀 の 御  
祝 を 申 上 げ ます 。 路 郎 先 生 は じ め  
諸 先 生 方 の 御 臨 席 の 下 に 華 々 し く  
私 達 の 明 和 病 院 支 部 が 結 成 さ れ て  
以 来 も う 二 三 月 に も な り ます 。

当 日 の 路 郎 先 生 の 御 話 に よ り ます と  
こ の 私 達 の 明 和 支 部 の あり ます 鳴  
尾 が 「 川 雑 」 発 祥 の 地 だ そ う で す  
の で 今 日 は 一 つ 私 の 郷 土 で あり 支  
部 の 所 在 地 で 有 る 鳴 尾 に つ い て 簡  
単 に 御 紹 介 さ せ て 頂 き たい と 存 じ  
ま す 。

そ の 昔 中 国 地 方 遠 征 へ の 途 上 秀  
吉 が 主 君 信 長 の 計 報 に 接 し 急 遽 都  
へ 引 き 返 す 途 中 尼 崎 で 敵 の 伏 兵 に  
逢 い あ わ て て 逃 げ こ ん だ と 言 わ れ  
る 寺 の 有 る 街 道 の 南 側 に 内 大 臣 平  
重 盛 が 出 養 生 し て い た と 伝 え ら れ  
る 所 が あり ます 。

そ の 時 重 盛 に つ き そ っ て こ の 小  
松 の 庄 に 在 み つ い た 重 盛 の 家 来 一  
族 が 私 達 の 祖 先 だ と 言 う こ と で  
す 。



人相もそえて三行尋ね人 東雲楼  
 人相で推理裁判される損 周甫  
 流行は人相も変える隆鼻術 洛醉  
 人相の割に話せば解る人 夷男  
 どん底に落ちた人相とは見えず 陽子  
 人相は大黒さんに似てるけど 黙 噪  
 人相でもう決めている老刑事 黒天子  
 人相を生かした職でよく儲け 一 雨  
 人相も腹も悪うてもてる男 よし子  
 間の抜けた人相寄席でもており 茂 輔  
 黒眼鏡美男も人相悪くなり 圭 水  
 結果論から人相も悪かった 不 二  
 將軍と云う人相の守衛殿 恒 雄  
 人相が無実の罪を着せられる 恒 雄

貧すれば人相までも変り果て 英路  
 人相が小鳥へ和む死刑囚 三四郎  
 人相見に云われてからのノゾム 静 馬  
 人相が随所になる職を持ち 夜 潮  
 善人の相で金には縁がなし 葉 光  
 人相が馬そっくりな養子が来 光 郎  
 苦勞して来た人相で慕われる 雄 々  
 二枚目の人相で汚職記事にのり 牧 人  
 大臣の相は耳からほめられる 沙 智 子  
 人相であたら親切割引かれ 笑 太  
 人相はどうあろうともガスの地位 雄 声  
 人相見整形外科と気がつかず 鼓 風  
 貧乏をすれば人相まで変り 木 魚  
 ローソクの灯で人相を保障され 水 堂  
 人相はどうあろうとも惚れてあり 錦 花  
 人相はもう気にならぬ妻のしわ 春 雄  
 人相もだん／＼亡父に似て頑固 白 李  
 上に立つ相と云われたまに老い むじな  
 惜しまれる人相をして日備夫 三 思 楼  
 (五)善人のどこか弱気な顔の相 牧 人  
 (五)人相のよさは村長のなれの果 南 牛 子  
 (五)人相がこもも変った楽屋裏 定 月  
 (五)福相をまだ信じてる五十過ぎ 水 鏡 子  
 (五)化石にも似た人相へ肩が凝り 幽 谷  
 (人)付き合えば人相と別な味があり 巖 谷  
 (地)人相に似合わぬ詩情もちあわせ 惠 二 朗  
 (天)人相が親に似て居てしまれ 春 吉  
 (軸)整形で変えた人相でもてゝおり

# 柳 界

恒例の「川雑川柳まつり」は本社では路郎主幹の古稀祝賀川柳大会として七月七日(日)午後一時から網島の元藤田男爵邸で多彩なプロの下に賑々しく開催される▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)は六月十八日午後七時半から南地のミュンヘンで開催▼南海電鉄川柳会は六月十九日午後六時半から粉浜の親和寮で開催▼大阪通信病院鳥ヶ江川柳会は六月廿九日午後二時から五階講堂で開催以上何れも路郎主幹出席▼川雑倉敷支那句会は六月九日午後一時から慈愛幼稚園で開催された▼川雑下関支那句会は六月十六日に下関駅で開催▼川雑岡山支那句会は五月十八日赤支那で開催▼水郷川柳社(大洲市)では六月二日城山の観勝亭で前田伍健氏を迎え供養碑除幕式句会を開催さ

# 展 望

了れた▼東洋樹句集出版記念会(神戸市)が六月十八日午後六時から三宮町のパウリスタ三階で開催された▼川雑備前支那句会(岡山県)が六月八日娘川楽居で開催▼呉柳会満一周年記念川柳大会が六月九日に呉市で開催▼川雑篠山支那句会(兵庫県)は六月九日に無鬼居で開催▲広島川柳会は六月十五日に教伝寺で開催

### 消 息

▼八木摩太郎氏は「堺市友」一号に「堺市役所物語を書く人は？」を執筆▼麻生路郎先生は五月十八日NHK第一放送から食満

人相はどうかあろうとも惚れてあり 錦 花  
 人相はもう気にならぬ妻のしわ 春 雄  
 人相もだん／＼亡父に似て頑固 白 李  
 上に立つ相と云われたまに老い むじな  
 惜しまれる人相をして日備夫 三 思 楼  
 (五)善人のどこか弱気な顔の相 牧 人  
 (五)人相のよさは村長のなれの果 南 牛 子  
 (五)人相がこもも変った楽屋裏 定 月  
 (五)福相をまだ信じてる五十過ぎ 水 鏡 子  
 (五)化石にも似た人相へ肩が凝り 幽 谷  
 (人)付き合えば人相と別な味があり 巖 谷  
 (地)人相に似合わぬ詩情もちあわせ 惠 二 朗  
 (天)人相が親に似て居てしまれ 春 吉  
 (軸)整形で変えた人相でもてゝおり

### 句 集



南北氏について平井正一郎氏と対談を放送された▼戸倉普天氏(兵庫県)は佐渡から仙台の令息を訪ねられ山寺に芭蕉の旅を偲

▼「ほんとうの私」(三条東洋樹著)が神戸市兵庫区神田町七九の白鳥川柳会から刊行された。本句集は自己の生活からにじみ出た山気のない作品で埋められている。一説を薦める。定価二百円、送料十六円▼句

▼小西無鬼氏御長男が五月廿五日に良縁があつて華燭の典を挙げられた。およろこび申上げる。

集「うめだ」(昭和22年版)が大阪市北区會根崎上四の四〇うめだ番傘川柳会から上梓された。川村伊知呂氏外、同会の人達の年刊句集である。頒価一五〇円▼岡崎川柳研究社では目選句集「五万石の風」を十一月一日に発刊するので目下出句者を募っている。詳細は岡崎市中町六丁目同社へ。

文化生活は電化で...  
 電気器具は日立製品を

日立全商品特約店  
**三永電気株式会社**  
 大阪南区八幡筋堺筋  
 TEL 8040.3221

季節一品料理  
 江戸前にぎりずし  
 アベノ橋地下映画食通街

**大 萬**

梅里の店

★大万川柳(第七十七回)を募る  
 兼題「タクシー」路郎先生選  
 締切・七月十五日 郵費五割以内  
 発表・七月廿一日 (寄附票あり)  
 投句は 阿倍野区松崎町三丁目  
 一〇 大万川柳会宛

らか室集編



— 路 郎 —

★ボツ／＼暑くなった。編集室では知らぬ間にシャツ一枚になって  
いる。★本号は私の古稀を祝って  
いるんな原稿をいただいたので賑  
やかな雑誌になった。殆んど倍大  
号になったので読みごたえがある  
うと思う。暑い季節なので堅い読  
み物は避けた。また私としては相  
当におもはゆい原稿があるので恐

る募を告廣舞見中暑歡交人柳

川柳雑誌社

八月号へ貴方

の暑中見舞廣告を

★一ト口金二百円。

幾口でも申込んで

下さい一ト口分の

原稿は住所と姓と

雅号程度。活字指

定はおまかせ願ひ

ます一ト口分は五

分の一段組三行。

★原稿締切は七月五

日着便

★広告料は前金のこ

と(郵券代用でも

よろしい)

縮しているが、編集部で骨を折っ

てもらったので、兎や角云う訳に

もいかぬ。読みづらいたところがあ

つたら飛ばして読んでいただきた

い。古い柳友達が忙しい中から特

に寄稿されたことを心からよろこ

んでいる。★七月十日は私の誕生

日だが七日が日曜になるので、本

年の川柳まつりは七日に繰り上

げ、古稀祝賀川柳大会として不

朽洞会がウンと力コブを入れてい

る。会場は網島御殿と云われる豪

壮な邸宅で大阪にこんなところが

あるかと思われようなどこな

で涼味に浸る意味からでも万障繰

合せて参会していただきたい。私

からも特にお願ひする。既に遠隔

の地からの出席の通知をうけてい

るが、こんな時にこそ顔を見せて

欲しいと思う。

正 誤

▼前号四頁上段二十行目、二段四

行目、「万句会」は「万句合」の

誤り。▼前号八頁上段二六行目、

「税金を払いのんだり」の句は

「税金を払いのんびり」の誤りに

つき訂正▼前号一七頁上段二九行

目「舞扇」の句は暗合句を発見し

たので抹消することとした▼三月

号一六頁上段一三行目「手の置場」

十四行目「忘れもの」の句は作者

ある日の恩師

父と呼びたい

水谷竹燕

私達の恩師と言うよりも、本当  
のお父さんか、お祖父さんと呼び  
たい様な気がする先生である。そ  
れ程甘えたい様な、親しみを感じ  
させて下さる先生、殊に一寸お酒  
を召上って、ほろりと酔われて、  
よくしゃべられる先生、とても明  
るくほがらかで愉快になられる先  
生、そんな時の先生が、私は一番  
好きなのである。また川柳だけで  
なく、不朽洞会員の一人一人の、  
私生活にも色々心配して下さる。  
身の上相談、就職の世話から多忙  
な時でも貴重な時間をさいて心よ  
く色々な面倒を見て下さる先生、  
私達不朽洞会員にとっては、何よ  
りも有難い恩師である。

無言の教訓

清水白柳子

私の銀婚式の時に早速来て下  
さって、  
いちゃいちゃと二十五年は夢と  
すぎ  
の祝吟を頂いた。又、私の好きな  
芝居、映画、旅行、散財を、先生  
も、また好きでいらせられる。そ  
れで先生とはよく話があうし、共  
鳴して貰えるので、昔からよく先  
生のお供をさせて飲み歩いたり、映  
画や芝居を見物に行ったり、各地  
の川柳大会によくお供をしたもの  
だ。その度に、色々面白い出来た。

巨人の愛

直原七面山

第七回西日本川柳大会(昭和三十  
年九月)の前日、私は師を弓削  
駅頭にお迎えした。  
その時どうお思いになられての  
ことか、突然師の方から「やあ」  
と手をさし出されたので、私はそ  
の手をたたく握りしめて師弟の縁  
を結んで以来初めて感激の握手を  
交したのです。私は師の手に「巨  
人の愛」を感じ、「慈父の心」を  
感じました。

趣味の時間を川柳一途にと思っ  
ていた私は、川柳と共に生き、生  
涯を川柳に捧げ様とおこがましく  
もかたく決心をしたのです。

聖なる顔

不二田 一三夫

人間が無我の境にある時は神の  
姿に近いものを感じる。先生が選  
句される時のあの銀髪も印象的だ  
が、入選句に対して「よくやった」  
という慈愛の眼のあたたかき。没  
句に対しては峻厳ではあるが「ま  
た出直してこいよ」と、慈悲の眼  
が光る。その先生の横顔を、同じ  
机の端から拝むような気持で、じ  
っとあかず見入っている自分自身  
を私はよく見かけるのである。

編集録音

▼ワイ  
下時代  
だから  
云うの

ではないが、本誌の特色を生かして、ページの新ネスコ化を図ったが(無茶かしら?) 路郎先生のご人徳へ、ご協力たまわった諸大家の山積された原稿を前にして、ややグロッキー気味の私へ、「不二田クン、あんまり欲ばるからさ」

と、先生の慈愛に満ちた眼がニッコリされる。先生にご助勢ねがつて、ここにシャニムニ机へ吸いつく。足かけ三カ月、本号と取っ組んだ私ではあったが微力がそれにともなわず各地柳壇や阿倍野支部の頁等、載せられなかった事をお詫び申上げる。しかし、この堂々の執筆陣の顔ぶれは、柳界にエポックを画するものと自負しているがどうであろうか。▼徹夜に徹夜を重ねている私だが、さすがの流感も手のだしようがないようだ。この編集熱がカゼ熱を圧倒したのであろう。

カゼの神曰く「昔からナンヤラは風邪を引かんのじゃワイ」(一三夫)

藤井毛織株式会社

特約店



足立株式会社

毛織物卸商



大阪・名古屋・伊勢を結ぶ...

近鉄特急

座席指定・ノンストップ

大阪-名古屋 2時間35分  
大阪-宇治山田 1時間54分  
名古屋-宇治山田 1時間34分

大阪上六発		名古屋発		宇治山田発	
7.40	15.40	8.00	16.00	8.40	16.40
8.40	17.40	9.00	18.00	9.40	18.40
11.40	19.40	12.00	20.00	12.40	20.40
13.40		14.00		14.40	



本社 大阪市天王寺区上本町6

近畿日本鉄道

GABA <8500>  
<7500>



GOSHO  
DEEPLAKE  
TEX

江商株式会社

大阪・東京・名古屋・福岡

スートフ  
春地のおい

O.S.K.

レイキード

株式会社 大坂商店

大阪市東区船場一丁目二番地  
電話(94) 1745-5563番

募集

課題吟募集

- 鍵人 (全知以也) 土井 文蝶選  
(甘菊以也) 福田 安夢選  
(七月二十日締切)
- のれん (全知以也) 若本多志選  
(七月二十日締切)
- 苦手 (井野以也) 後藤 梅志選  
(八月二十日締切)

毎号募集

- 近作柳樽 (近作柳樽) 麻生路郎選  
北川春葉選
- 川柳塔(雑) 麻生路郎選
- 文章(評論・研究・感想其他)  
(毎月二十日締切)

投稿規定

- ▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
- ▼ 『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
- ▲ 『課題吟』は誰でも投句が出来る。
- ▼ 『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌

第十二巻 第七号

B列5号 毎月一回一日発行  
本号に限り 特価一〇〇円  
(送料八円)

昭和三十三年六月廿五日印刷  
昭和三十三年七月一日発行

大阪市吉野区内万代西丁目二五番地  
行印刷人 麻生 幸二郎  
大阪市吉野区内万代西丁目二五番地

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八一  
投稿口座 大阪 七五〇〇

# THE SENRYU ZASSHI

NO. 362

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

## 不眠 昼間療法!



日中のイライラもすこしおさめ

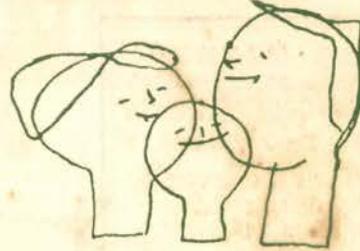
昼間の服用だけで、夜自然に安眠  
ができ、日中のイライラや不安感  
もとれ、明朗・能率的な生活を送  
れる習慣性のない安全な新薬です  
スッキリした頭で作句の為にも!

晝はすつきり・夜はぐっすり

### ノクタン錠

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ④551-2

## 朝潮見観

なんば発

- ① 8.10    ② 11.45
- ③ 14.15   ④ 18.10

観潮クーポン

お楽な日帰りコース 750円  
観潮と淡路島周遊 850円  
お問合せ 南海交通社 ④103.8888 ⑨5078

### 南海電車



明るい  
家庭は  
電化で  
★御用命はお電話  
下されば係員が参  
上いたします

### 日本機械株式会社

本社 大阪市南区末吉橋通四丁目十六番地  
御堂筋新橋北詰新橋ビル  
電話 船場(25)1856(代表)~7番